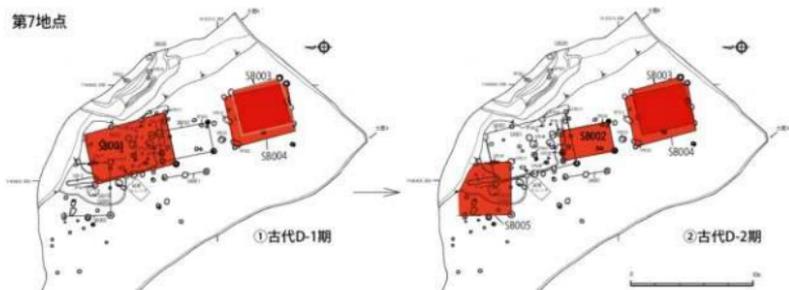
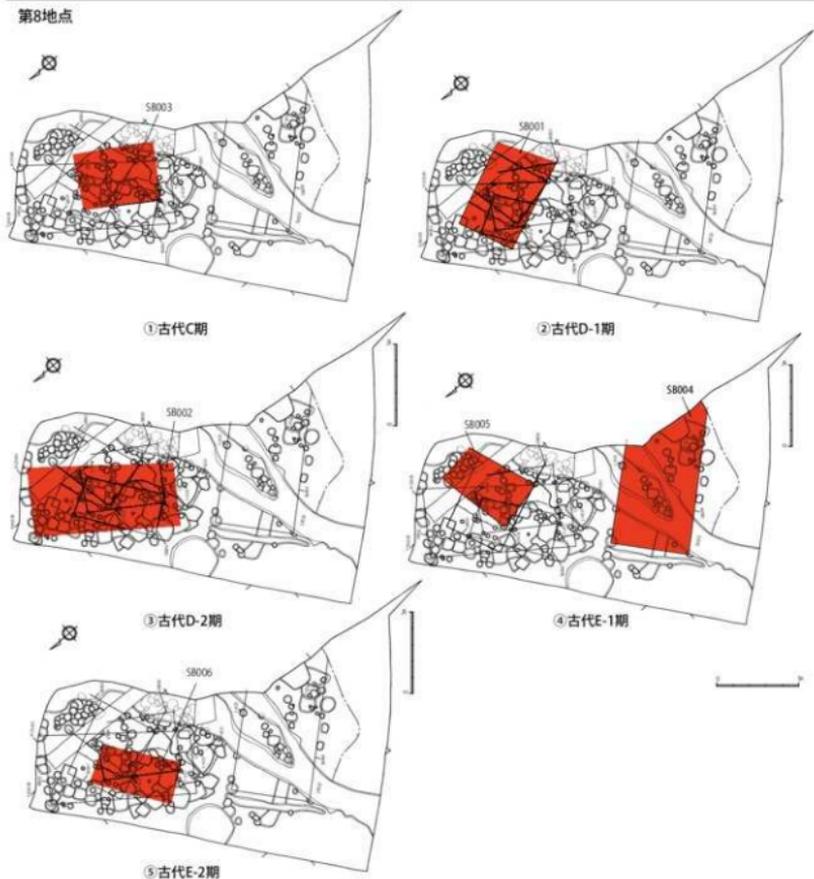


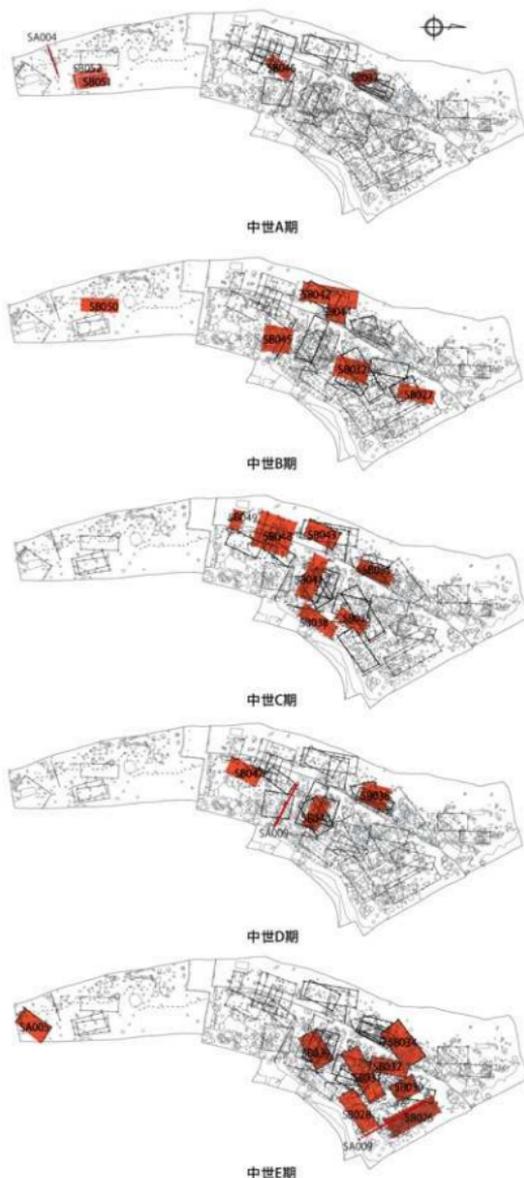
第7地点



第8地点



第481图 第7·8地点古代建物跡变迁图



第482図 第4地点中世建物跡変遷図

性格ではあるが、この丹生・丹川地区は海部郡丹生郷に属している。海部郡衙推定域が丹生川下流域の城原・里遺跡に考えられていることから、これら建物跡は丹生郷に関連する公的施設とも考えられる。ただし城原・里遺跡は8世紀半ばには衰退することから、その後の海部郡衙の動向は不明である。丹生川流域には中・上流域にかけて低地に公的施設と思われる建物跡や遺構遺物が点在しており、これらは丹生川坂ノ市条里の経営に関連することも予想される。またNSJ4に展開している建物跡は長方形の大分平野では特異な形状の建物跡が検出されており、『大分市史 上巻』にて古代丹生駅の推定地を丹生川上流域に推定している説もあることから、NSJ4が丹生駅とまったく無関係とは言い切れないが、これら建物群の性格について検討の余地は十分に残される。

中世は、第4地点で遺構を確認している。古代の掘立柱建物跡を伴う集落は、中世に連続することなく、断絶し、15世紀頃から本格的に中世の開発が伴う。第4地点の小字は福寿庵であり、中世地名として認識される。福寿庵は大恵寺の塔頭ということであるが、大恵寺は大友氏11代当主大友親著の菩提寺である。遺構は切り合いを多く持ち、検出は困難であった。出土遺物は遺構の割合からすると、少量であり、一般的な集落とは性格が相違するものだろうか。掘立柱建物跡の変遷6期にわたって展開する。各期の詳細をみていく。

中世A期建物群は4棟を確認した。調査区南側で2棟(SB051・052)と柵跡1列(SA4)、調査区北側で2棟(SB037・046)が展開する。

建物跡の主軸方位は統一性はない。SB051・052とSA004は直交するため、関連がありそうである。身舎面積は約24.5㎡である。切り合い関係はSB037がC期のSB035に切られるだけである。よってSB046は方位を無視すれば、他の期に下げることが可能である。またSB051・052も調査区南側で検出しているため、調査区北側で展開する建物群からはやや距離を置いており、方位に捉われることがなければ、該当時期が下がる可能性は残される。

中世B期建物群は掘立柱建物跡6棟(SB27・32・42・44・45・50)が展開する。SB27・32・42・45・50の建物主軸方位はN2°～15°Eに振れ、SB44は前者に直交する状況でN79°Wである。SB42とSB44は重複するが、切り合い関係は不明である。SB27・32・45は後背地の丘陵にほぼ平行に並び、やや南に離れてSB50がある。特にSB45の桁行と梁行はほぼ同じ長さで、平面プランはほぼ方形に近い。その他の建物跡が長方形プランであるので、建物の性格差があるのであろうか。また身舎面積は、SB027・032・045が並ぶその西側の丘陵際にあるSB042・044が58㎡を有し(SB044は東側が後世の削平により、不明で30.4+a㎡)、この期の建物跡では一番大きい建物であるため、その立地などから、中心的建物となりうるか。

中世C期建物群は、調査区中央付近に集中し、掘立柱建物跡7棟(SB033・035・038・041・043・048・049)が展開している。SB041以外の建物主軸方位は類似し、N16°～37.5°Eで、SB041はそれらに直交し、N65°Wである。掘立柱建物跡平面プランはSB048以外は長方形プランを呈するが、SB048はほぼ方形プランを呈し、建物内南東は総柱に近い状況で、身舎面積も72.2㎡で、他の建物の身舎面積とは明らかに相違する。明らかに他の建物跡とは性格差があるものとする。SB048はまたB期SB045と平面プランでは類似し、同様の性格の建物が引き継がれたものか。

中世D期建物群は、調査区中央付近で掘立柱建物跡3棟(SB036・040・047)、欄跡1列(SA009)が展開する。SB036・047は主軸方位をN16°～27°Eをとり、その2棟に直交するようにSB040が主軸方位N63°Wをとる。掘立柱建物跡の平面プランは長方形である。SB040とSB047の間に平行してSA009が遮蔽施設となりうる。またSB036は東西2面に庇をもつ2面庇掘立柱建物跡であり、庇もちの建物跡は当期はこのSB036だけであり、他の時期の建物跡にも庇もちの掘立柱建物跡はほとんどない。

中世E期建物群は、調査区北側に掘立柱建物跡が集中し、南側にも柱六列(状況からすると欄よりも掘立柱建物跡の可能性)が並ぶ。掘立柱建物跡は6棟(SB026・028・030・031・034・039)、柱六列(SA005・008)が展開する。この期はD期までとは建物主軸方位、身舎面積とその立地が相違している。SB028・031・034・039は主軸方位N56°～62°Eをとり、直交するようにSB026・030がN14°～27°Wをとる。SA005も掘立柱建物跡となれば前者の主軸方位に近いと思われる。またSA009の柱六列は欄跡の可能性が高く、SB028と並行するため関連がありそうである。ただSA009とSB026は重複関係にあるため、建物の存在は前後する。さらにSB030と重複するように銭貨とかかわりの埋納土坑であるSK1265も主軸方位や埋土が類似するため、この期に該当すると考えられ、SB030とSK1265は関連性があることも推定される。このあと当該期のSB030を切る掘立柱建物跡SB032が存在する。

中世F期建物群はE期のSB030を切る状況でSB029の1棟のみが存在するだけで、この土地に展開していた建物群は一気に衰退へとむかっただけと思われる。

以上第4地点における中世掘立柱建物跡をA～Fの6期に大別して述べてきた。この第4地点の小字である福寿庵と関連される建物群かということが大きな焦点である。建物跡からみるとB期SB045やC期SB048などは他の建物跡の様相とは異なる。また出土遺物も遺構が展開しているわりには、かわかけや鍋類などの煮炊具もほとんど出土せず、一般的な集落とは様相が違う。これは日常生活空間とは違った土地利用が考えられ、その1つに大恵寺の塔頭である福寿庵の関連施設の可能性があると考えられる。また出土遺物からしても15世紀前葉から16世紀前葉くらいの時期が考えられ、大友氏11代当主大友親著との関連を考える上でも、出土遺物が与える時期は福寿庵としての施設が展開しても問題ない時期である。その後、第4地点は17世紀前葉まで建物跡が断続的に残ったりもするが、18世紀中～後半までには現在のような水田化が行われたと考える。

### 第3節 中世における地鎮に伴う出土銭の特色について

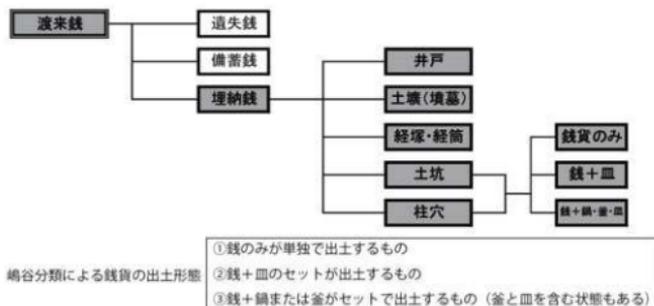
考古学における地鎮と現在我々が日常で目にする地鎮という言葉には、その意味に違いがある。試みに「地鎮」という単語で辞書を引いてみると、類似する言葉として（注1）

「地鎮祭：土木・建築などで、基礎工事に着手する前、その土地の神をまつて工事の無事を祈願する祭儀。とこしずめのまつり。土祭。地祝。地祭」

「地鎮法：堂塔伽藍を建立するとき、土台石を入れる前に地神から地を借り受けるために、地神を本尊として修する法。まず地をならして、中央と東西南北の四方に五宝・五穀・五葉を埋めて不浄をはらう」

等がみられた。地鎮祭とは今日も家宅の建築時に目にする機会の多いものであり、一方の地鎮法は、密教における寺院や特殊な建築物で行われる儀式であって、日常ではまず目にする機会はない。考古学でいう地鎮とはこの地鎮法をルーツとしたものであり、歴史の中で様々な宗教や思想が習合して発生した「地」にたいするまつりの痕跡を示す遺構が一般に地鎮遺構と呼ばれるものである。本稿は中世における地鎮遺構を出土例を挙げ、銭貨がどのような意図をもって埋納されたかに関して述べていきたい。

日本国内において銭貨が地鎮に用いられた例としては寺社や塔の基壇に敷設していたものがあり、およそ7世紀後半の奈良県明日香村・川原寺塔基壇の出土資料にまで遡ることができる（森郁夫1977）（注2）。中世になると、銭貨が柱穴あるいは掘立柱建物に近接する遺構からの意図的な出土がみられ、全国的には15世紀～16世紀にかけて最も顕著かつ規則的な形状で出土している。中世の出土銭貨の様相を大別すると、概ね以下のように図示することが可能であり、また嶋谷和彦氏によれば地鎮における銭貨の出土形態は大きく3つに分類され、それぞれが互いに異なる枚数や配置を呈している状況がみてとれる（嶋谷和彦1997）（注3）。



第483図 中世出土銭貨フローチャート

また、上記のフローチャートでは埋納銭以外の形態をいくらか確認できる。裏や壺などに数百枚から数千枚の銭貨を貯蔵し、自宅の地中や人里離れた山中に埋納する備蓄銭は中世出土銭の形態としては代表格であり、国内の経済において銭貨が一定の水準を満たした媒体として周知されていたことを示すものといえよう。

これら備蓄銭は一般に有力国人や豪農、豪商によって埋められており、財産の貯蓄を目的としたものであろうという考えがなされていた（注4）。しかし、近年では大仏や銅経筒などの製作をおこなう際にそれらの原料となる銅に銭貨を転用していたことがわかり、備蓄銭が貨幣としてのみではなく、二次的な用途を目的として保存されていた可能性が示されている（注5）。中世の銭貨が多方面からの需要や用途のもとに流通していたことは、備蓄銭の役割があくまで使用することを目的とした上で貯蔵されていた銭貨であったことをうかがい知ることができる。

対照的に地鎮遺構における銭貨の存在は、いわば死蔵される役割を担ったものである。地鎮めに用いた銭貨は再び利用されることはなく、故に明らかな意味や目的をもって意図的に埋納されたものであると考えられる。そ

れら地鎮めに関する遺構について、大分県内における出土例から嶋谷和彦氏の分類を引用した上で以下に挙げてみる。

①銭貨のみが単独で出土するもの

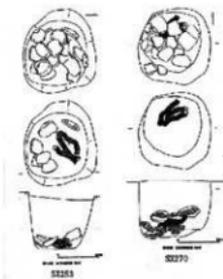
臼杵市の荒田遺跡では、桁3.5m×梁3.2mをかぞえる掘立柱建物(SB04)の西側に平行する土坑(SX72ーピットb)中から中国銭(唐～明)と無文銭が混合した銭貨40枚余りが層状で出土している。小規模な倉庫跡と考えられたが、SB04自体からは遺物の出土はなく、報告者は宝形造の仏堂等の宗教施設である可能性を示唆している。遺構については施設に伴う祭祀土坑との考えが大きい。また柵列状遺構(SA01)内の柱穴の1つから、遺構形成時に埋置されたであろう中国・朝鮮銭を含む銭貨17枚の出土が確認されている。最新銭は朝鮮通貨(李氏朝鮮、1423年)であり、遺構時期は15世紀半ばから16世紀初頭と考えられている。いずれも中世代の遺構であり、施設造成に伴い埋納された銭貨であろうと考えられる(神田高士2001)(注6)。

第484図 荒田遺跡 SX072

大分市の中世大友府内町跡第5次調査(B地区)では、16世紀後半ころに形成されたと考えられる土坑(SX253・SX270)中から96～98枚の銭貨を連ねた縋銭がそれぞれ3縋ずつ出土した。土坑は上方から5×10cm大の扁平河原礫に覆われるかたちで出土しており、土坑形成時に銭貨を埋置した後に礫を敷き詰めるというプロセスがあったと考えられる。銭名は錆着が激しいため判明していないが、調査区が大友氏館拡張以前に存在した可能性のある区画であり、そのほぼ同時期に形成された地鎮遺構ではないかと考えられる。また一方で調査区南端と東端にそれぞれ溝状遺構が延びており、その南東と南西の隅部分に土坑(SX253・SX270)がそれぞれ位置している状況から、溝状遺構の造成に際しての祭祀行為であった可能性も考えられている(槇島隆二2005)(注7)。

②銭貨+皿がセットで出土するもの

大分市の猪野・中原遺跡がこれに該当する。遺跡は、戦国時代にあたる方形区画を呈する溝を中心とした居館跡で、区画の中心部の遺構である円形土坑(SX050)中からは土師器が、それぞれ東西南北中央に十字を切るように5点配置され、各坑の中に銭貨3枚が入った計15枚が確認されている(銭貨は北宋から明代にかけてのものである。また遺構からはほかに散銭3枚が出土しており、総計18枚をかぞえた。最新銭は宣徳通貨、1433年)。坑内に埋置された銭貨の数が3枚で統一されていることの原因は不明であるが、密教における地鎮の特色として五色の玉を五方(東・西・南・北・中央)に埋めることが必須であるということ(注8)や、県外の例であるが16世紀後半の時期である東京都の染井遺跡(津藩主藤堂和泉守の下屋敷跡)からは土師皿底部に五行(木・金・火・水・土)が書かれた墨書土器が出土しており(橋口定志・星梓1991)(注9)、猪野・中原



第485図 中世大友府内町跡 第5次B区

遺跡における土師器坑の配置が宗教的意図をもって配されたことがうかがえる。加えて、この遺構を囲う形でコの字状に掘立柱建物群が展開しており、SX050が空間全体に対する地鎮を意識したものであった可能性が考えられている(塩地潤一1997)(注10)。また銭貨を伴うものではないが、前述の中世大友府内町跡第5次調査(B地区)では大小の土師器皿が埋納された遺構(SX134)があり、中からほぼ同型の土師器皿が5枚、五方に埋置された状態で出土している(槇島隆二2005)。銭貨の有無を除けば猪野・中原遺跡と同様の配置であり、時期もほぼ同一であることから比較研究の良好な史料として考えられている。

なお、今回の調査で確認された土坑(SX1265)は嶋谷分類でいうところの『②銭貨+皿のセット』に該当し、土師器皿が一面に配置された状態でその中央に固まるように銭貨46枚が埋置されていた。銭貨は全て中国唐代から北宋代にかけての銭貨(最新銭は政和通貨、1111年)であり、



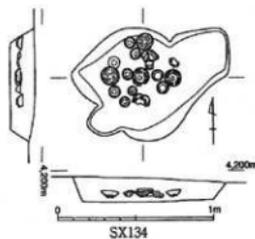
猪野・中原遺跡 SX05

第 486 図 染井遺跡出土墨書土器

状況から 12 世紀半ば以後の遺構である。その中には繊維質の付着がみられる銭貨があり、葉や布などで銭貨をくるんだうえで遺構に撒かれたものであろうと考えられる。当時、全ての銭貨にこのような処置を施した上で埋置した可能性もあるが、今回は残存状態が良好でないため一部のみの確認にとどまった。銭貨に対してこのように外装を施したものは他に類例を見ず、また SX1265 の遺構底部には小動物と思われる遺体と植物遺体が確認されている。すなわち、穀物・動物・銭貨という最低 3 種の供物を土師器皿に添えて埋納した可能性が考えられ、動植物の遺体が消失をまぬがれた点においても遺跡の今後の地鎮研究における資料的価値はきわめて高い。なお『③銭+鍋または釜がセットで出土するもの』については今回は遺跡を確認できていない。

以上、甚だ簡潔であるが地鎮遺構における銭貨の位置付けをみた。さきに述べたように元来地鎮とは土地を使用する際にその土地の神に供物を捧げ、その地での建築や生活における安泰を願うものである。また一方で、密教や仏教における呪儀としての地鎮というものが存在し、土地神からその地を借りる意味をもった儀式としておこなわれてきた。そして考古学でいう一般の祭祀・地鎮関連遺構とは、広義的に後者をその本質として採用するものである。長い年月をかけ、多数の宗教や風習が融合または変化して形成された民間信仰は狭義的な分類・解釈を加えることがきわめて難解であるが、その信仰に関連する遺跡の中から銭貨が出土することは、当時の人々が銭貨に対して高い価値観を持っていたことを示すものといえよう。

原田昭一氏は地鎮遺構における銭貨の役割を、その出土状況から前述の荒田遺跡 (SX72) に代表されるような掘立柱建物群に近接する土坑や柱穴など「建物に対する地鎮め関連遺構」と、猪野・中原遺跡 (SX050) や中世大友府内町跡第 5 次調査 (SX134・253・270) などのような「土地に対する地鎮め関連遺構」とに大別しており、前者を土地神に対する土地の使用料、後者を供物を盛る土師皿に対して主



第 487 図 中世大友府内町跡第 5 次 B 区

體となる「供物」に相当するものであるとし、いずれにおいても銭貨が地鎮めの儀式におけるメインとして扱われたことを示したと論じている (原田昭一 2006) (注 11)。

一方で地鎮めにおける銭貨埋納の意義をきわめて経済的な思想から考えたものとして、木下密運氏は銭貨の地鎮めへの「採用」を道教から派生した買地券思想に共通するものであると認識しており、埋納の意義を土地神からその地を「買い取る」ための代金としてのものである可能性を指摘した (木下密運 1984) (注 12)。だが、地鎮めに関する遺構すべてが必ずしも銭貨を伴出するものではないことから、すべての遺構例が一樣に該当するものであるとは考えにくい。中世から近世に進むにつれて、地鎮めに使用される銭貨が呪具としてのみならず、買地券思想に準じる純粋な銭貨としての役割をも期待されて埋納するケースも発生するようになったと考えるのが自然であろう。中世における人々の経済観念の発達と宗教的観念との融合が、こうした祭祀儀礼に対しての姿勢や思想の変化をもたらしたものであると考えることができる。(山下 朋紀)

#### 参考文献

- (注1) 新村出版『広辞苑』岩波書店  
(注2) 森郁夫 1977「奈良時代の鎮壇具埋納」『研究論集Ⅲ—奈良国立文化財研究所学報 28—』奈良国立文化財研究所  
森郁夫 1979「古代における地鎮・鎮壇具の埋納」『古代研究』18 86元興寺文化財研究所  
(注3) 船谷和彦 1997「中世の“地鎮”と“銭貨”」『出土銭貨』第7号 出土銭貨研究会  
(注4) 以下の文献を参照した  
① 鈴木公雄 2002『銭の考古学』吉川弘文館  
② 坂詰秀一編 1986『出土渡来銭—中世—』ニュー・サイエンス社  
(注5) 飯沼賢司 2008「銭は材料となるのか—古代〜中世の銅生産・流通・信仰—」『経簡が語る中世の世界』思文閣出版  
(注6) 神田高士 2001『荒田遺跡』白幡市教育委員会  
(注7) 植島隆二 2005『豊後府内 1』大分県教育庁埋蔵文化財センター  
(注8) 木下密運 1984「中世の地鎮・祭壇」『古代研究』28・29 86元興寺文化財研究所  
(注9) 橋口定志・星梓 1991「染井里—染井遺跡（加賀美家地区）の発掘調査—」豊島区教育委員会・染井遺跡（加賀美家地区）調査団  
船谷和彦 1992「“地鎮め”の諸相」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会  
(注10) 塩田潤一 1997「猪野・中原遺跡」『大分県埋蔵文化財調査年報 8』大分市教育委員会  
(注11) 原田昭一 2006「大分県における城館出土の銭貨」『出土銭貨』第24号 出土銭貨研究会  
(注12) 木下密運 1984「中世の地鎮・祭壇」『古代研究』28・29 86元興寺文化財研究所  
船谷和彦 1992「“地鎮め”の諸相」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会

※なお、本文中のフローチャート作成においては以下の文献を参考にした。

- ・鈴木公雄 2002『銭の考古学』吉川弘文館
- ・坂詰秀一編 1986『出土渡来銭—中世—』ニュー・サイエンス社
- ・原田昭一 2006「大分県における城館出土の銭貨」『出土銭貨』第24号 出土銭貨研究会
- ・船谷和彦 1997「中世の“地鎮”と“銭貨”」『出土銭貨』第7号 出土銭貨研究会

## 第4節 各遺構について

### (1) 埋裏 (第3・10地点)

縄文時代の埋裏遺構は、丹川地区の発掘調査で3基の埋裏遺構が検出された。埋裏の性格は埋葬施設やその他胎盤などを収納するなど考えられているのが一般的である。縄文時代の埋裏遺構は大部分野でこれまでに4か所確認できている。深町遺跡、玉沢地区条里跡第16次調査、植田市遺跡、浜・長無田遺跡などがあげられる。

玉沢地区条里跡第16次調査(大分市教委 2008)では、鉢ではないが、縄文時代晩期浅鉢の埋設遺構が確認されている。鉢には丹が外面全体に塗布され、口縁部内側にも一部塗布されている。底部は打ち欠いている。脂肪酸分析を行っているが、詳細は不明であった。

浜・長無田遺跡(大分市教委 1995)は、海岸付近の低地に立地しており、1基の埋裏が検出されている。縄文時代晩期末(弥生時代早期)にかけての遺構で、底部は胴部下部から意図的に打ち欠いており存在していない。裏の内部からは骨片が出土している。出土した深鉢は下黒野式土器とよばれている。他に孔列文土器なども出土している。

植田市遺跡(大分県教委 1994)では、1基の埋裏遺構が検出されている。これも下黒野式土器と呼ばれる土器である。器壁内外面には横方向〜斜め方向の条痕文で調整している。底部は意図的に打ち欠いている。

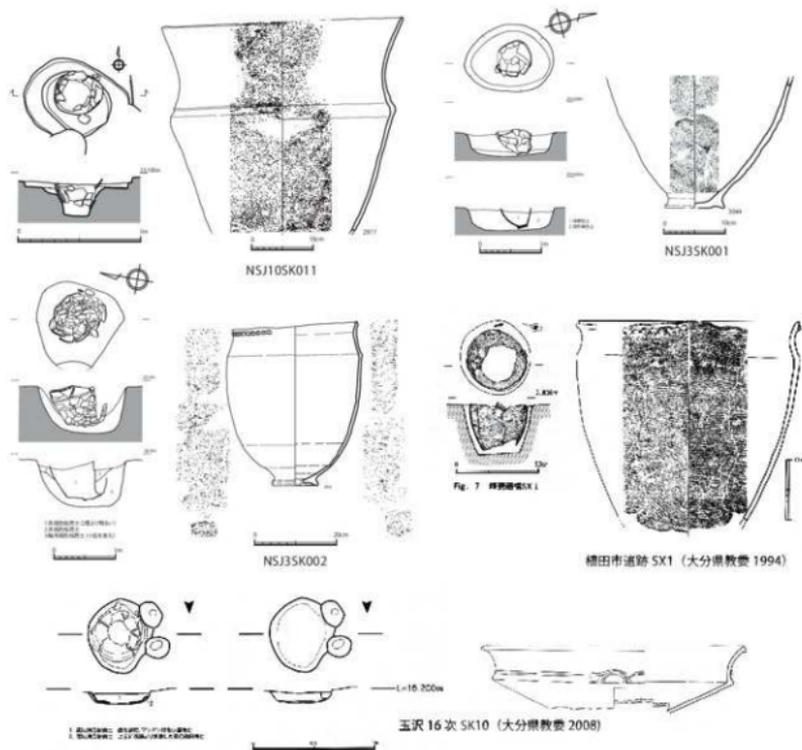
今回の丹生川坂ノ市条里跡の調査では、第3地点と第10地点で計3基が検出された。第3地点はSK001とSK002、第10地点はSK011である。第3地点SK001は後世の削平により上部が削られているため、詳細な型式をおさえられないが、底部は平底に近い。第3地点SK002は口縁部端部に刻目突帯文をもつ下黒野式とよばれているものである。底部中央に穿孔が1つあけられており、胴部下半を大きく打ち欠くものではない。第3地点SK001とSK002は約3mほどの距離にあり、検出標高は約19m代である。第10地点SK011は検出標高23mほどで検出した。底部は大きく打ち欠かれている。

第3地点SK002と第10地点SK011の深鉢は型式差があることは前節でのべたとおりである。また底部の打ち欠き方と立地にも差異がある。底部打ち欠きは立地のやや高いところで検出された第10地点SK011は、大きく打ち欠いている反面、低地で検出された第3地点SK002は底部中央に穿孔をあげているだけである。型式

的には第3地点SK002のほうが新しくなると考えられる。このため、時期が下がることによって埋葬行為を立地の高いところから低いところへ移しており、また底部などを打ち欠く行為も大きく打ち欠く時期から穿孔程度のものへと移行していったとも考えられる。底部打ち欠き行為は、諸説あるが、死者の再生を願うものとして理解もできる。低地への移行は、時代的に縄文時代末から弥生時代早期にあたるため、水田耕作などの普及によって生活基盤が低地に移行していったとも考えられる。いずれにしても、大分平野の埋葬遺構は数少ないため、今後の資料増加を待つところである。(五十川 雄也)

参考文献

- 大分市教育委員会 2008『玉沢地区条里跡 第16次調査』
- 大分市教育委員会 1995『浜・長瀬田遺跡』『大分市埋蔵文化財調査年報』6
- 大分県教育委員会 1994『樋田市遺跡』
- 高橋徹 1980『大分県考古学の諸問題(1)：刻目突帯文土器の出現とその展開について』『大分県地方史』第98号
- 大分大学文学部 1962『丹生川』
- ピーター・メカトフ、リチャード・ハンティントン(訳：池上良正、池上富美子)1996『死の儀式』



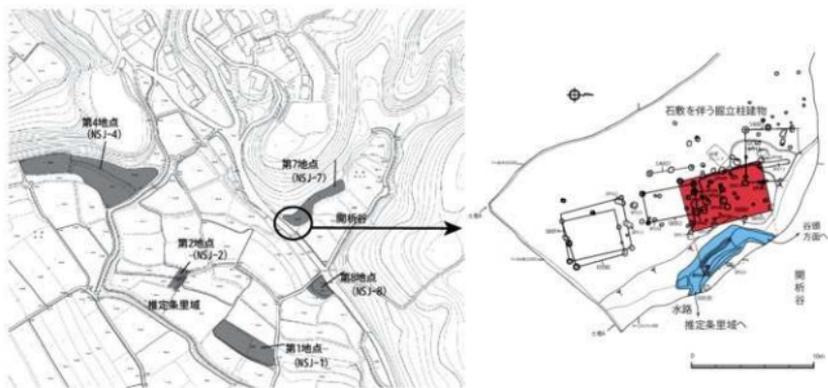
第488図 大分平野の埋葬遺構

## (2) 石敷遺構 (第7地点)

第7地点 SX001 は石敷で、それに伴う状況で SB001 が検出された。また SB001 を構成するすべての柱穴から壁土が多量に出土している。これら遺構を復元すると、土壁造りの掘立柱建物跡の内部に石敷のある施設が存在したと考えられる。時期としては、少ない出土遺物を参照すると9世紀代に存在したものと推定される。

このような9世紀代の遺構の検出例は、豊後国はさることながら、九州でもほとんど例がないと思われる。

今回の調査で検出された建物跡を伴う石敷遺構の立地は、丘陵端の周辺よりやや高い、見晴らしの良い箇所にある。さらにこの石敷遺構の北側に接するように、同時期の水路跡が確認できている。前述したようにこの遺構はもとよりこの地点の他の遺構からも出土遺物はごくわずかであり、出土遺物が須臾器裏口縁部や、緑釉陶器片、円形の石製品(温石?)など通常の生活に伴うような遺物は皆無であるため、一般的な集落の一部であるという性格は考えにくい。これらからすると水車などの実用的な遺構かもしくは祭祀遺構ということが考えられる。前者の水車などの実用的な性格に関しては、石敷遺構や水路跡に伴うような遺構がほかに確認できていないこと、水車などの利用を考えると立地が周辺よりも高い場所に位置しているため、そのような施設を設けなくても水は十分に供給できると思われる。さらに出土遺物が特殊なものが多いため、水車などの実用的な施設の可能性は低いのではないかと。だとすると、祭祀的な性格の可能性があげられる。この第7地点の周辺には、公的施設が考えられる建物群が第4地点と第8地点で展開している。また発掘調査では当時の古代の水田を確認できていないが、丹生川坂ノ市条里跡として条里制に伴う水田開発があった可能性が十分に考えられる。当時の水は、第18章の水掛かり調査の成果を踏まえると、丹生川よりも谷水を利用した可能性が高い。石敷遺構に伴う水路は、その谷の中に構築されているものであり、水田への水の供給路となることは十分に考えることができる。このことからすると当時の周辺の公的施設に関連する人々が、水や水田耕作の祭祀場として第7地点 SX001、SB001 を利用したと考えることができよう。ともあれ、事例に限られるため、今後の同様な施設の増加例を含め、性格を突き詰めていく必要性の余地は十分に残されているものである。(五十川 雄也)



第489図 第7地点石敷遺構と立地

## (3) 中世墓 (第6・9・10地点)

中世墓は第4地点 SK005、第6地点 SK515・SK520、第9地点 SK086、第10地点 ST012などで検出した。第4地点ではSK005のほかにも、平面プランが長方形になる土坑(SK400・500・600・700)を数基集中して検出した。これら土坑は良好な出土遺物などはほとんどなかったが、当初は土墳墓と考えていた。しかしながら埋土分析の結果(第19章参照)によれば、土墳墓の可能性は低くなった。

第9地点SK086、第10地点STO12の土壌墓である。第9地点は12世紀～13世紀を中心にした荘官クラスの屋敷跡と考えられる遺跡である。第9地点SK086は人骨や遺物は出土しなかったが、拳大状の礫が配置している状況で出土した。本文中でも述べたように、このような形態の土壌墓は杵築市八坂中遺跡などで確認されているため、土壌墓の可能性は高いと考える。またこの土壌墓の周辺に12世紀後葉～13世紀中葉の掘立柱建物跡などが展開しており、他に土壌墓は検出できていないため、SK086が土壌墓であれば、屋敷墓として考えることができよう。

第10地点STO12は第9地点と直線距離でわずか200mほどしか離れていないが、検出標高は第10地点のほうが第9地点に比べて1.5mほど高い。出土遺物を考慮すると第10地点STO12は第9地点の遺構群と同時期として捉えられる。第10地点STO12は第9地点の屋敷と関連ある人物で、ただ第9地点SK086が屋敷墓として存在したとき、少し距離を置いて土壌墓を築いたとも推定される。また第10地点STO12出土に円形湖州鏡や銅製鈴、鉄製紡錘車などが上げられる。ところで湖州鏡の形状は、円形、方形、六花形、八花形、隅入方形などがある。日本での分布域をみると、円鏡は畿内中心、方形鏡は中国・四国地方以東、六・八花形鏡などは九州に多いとされている。また銅製鈴に関しては、出土例はほとんどなく、鉄製鈴や土製鈴が稀にある程度で、銅製鈴が円形湖州鏡や鉄製紡錘車と共に出土した例は少ないと思われる。となれば、この第10地点の被葬者は他地域との関係をもっていた人物像を伺うことができる。

次に第6地点SK515とSK520である。この2遺構は明確な人骨や副葬遺物などが見当たらないため、墓の性格は推定の域を出ないが、その他の性格も考えにくい。第6地点は14世紀後葉～15世紀前葉にかけての遺構群で構成され、断続して、16世紀後半の遺構もまばらにある。第6地点SK515とSK520は重複し検出し、SK515がSK520よりも新しい。SK515はやや不定形の長方形プランの中に二次被熱を受けた礫が充填している状況で出土した。またSK515は土壌内の外側に人頭大ほどの礫を置き、中心部は拳大の礫が集中する。また床面はフラットである。第6地点SK515に切られるSK520は長方形の形状で埋土には炭化物が充填され、その周辺は被熱により固くしまっていた。これも墓と関連する遺物は出土していないため、推定の域ではある。ただSK515、520は、墓関連の遺構ということで、人体の火葬に用いたとも推定される。

第4地点SK005は、細長い楕円形で、骨片と推定されるものをはじめ、かわらけや鉄滓が全面に付いたかわらけなどが出土した。土器などは上層で確認されたため、棺外もしくは人体の上に置かれたものであろうか。遺構の時期は16世紀代と考える。第4地点にはこの土壌墓と同時期の掘立柱建物跡はほとんど展開しなくなる。が数棟展開しており、この第4地点の集落と関連のある人物の土壌墓と考えられる。

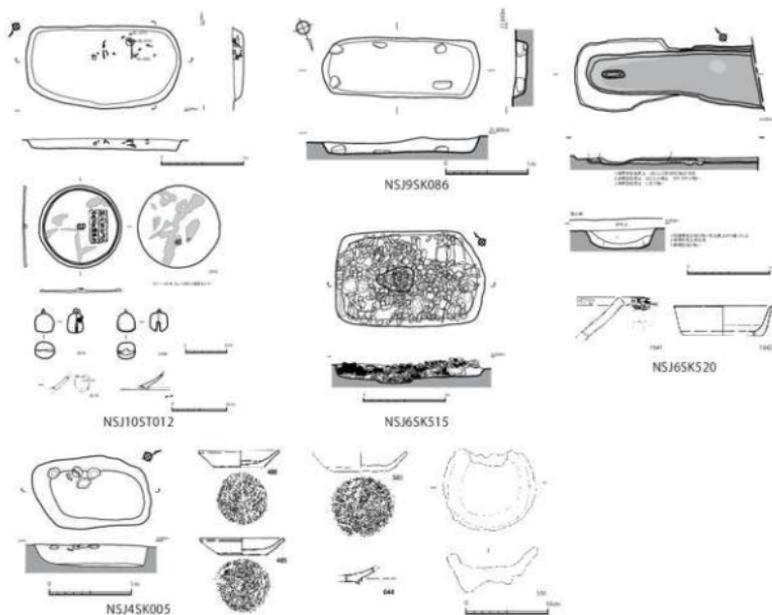
以上が中世墓と考えられるものも含めての検出遺構である。特に第10地点STO12と第9地点のSK086は12～13世紀代の丹生庄を理解していく上で、重要な資料となり、12～13世紀代の大分平野の墓制を理解するうえで欠かせないであろう。(五十川 雄也)

#### 参考文献

- 久保智康1999「中世・近世の鏡」『日本の美術 No.394』
- 青木 豊1992『和鏡の文化史』
- 中世墓資料集成研究会2004『中世墓資料集成』

#### (4) 第6地点SK510のかわらけ大屋廃土坑

第6地点では、溝状遺構や掘立柱建物跡、土坑、祭祀土坑、道路状遺構、井戸跡、中世墓などが確認された。また字名も奥園と古市という場所である。奥園と古市の字境に波板状圧痕を伴う道路状遺構が東西に延びており、その道路状遺構の南側にあたる奥園は、溝などに囲まれた土地で、掘立柱建物跡や土坑などが展開する。一方で古市側は奥園よりも比高差約3mほど低い。また遺構も奥園に比べると希薄で、出土遺物もごくわずかで、柱穴も奥園で検出のものよりも規模は小さく浅い。字名の古市から考えると、これらピット群は店舗的性格のものが想定され、特に遺物が非常に少ないところをみると仮設的な店舗だったと推定される。

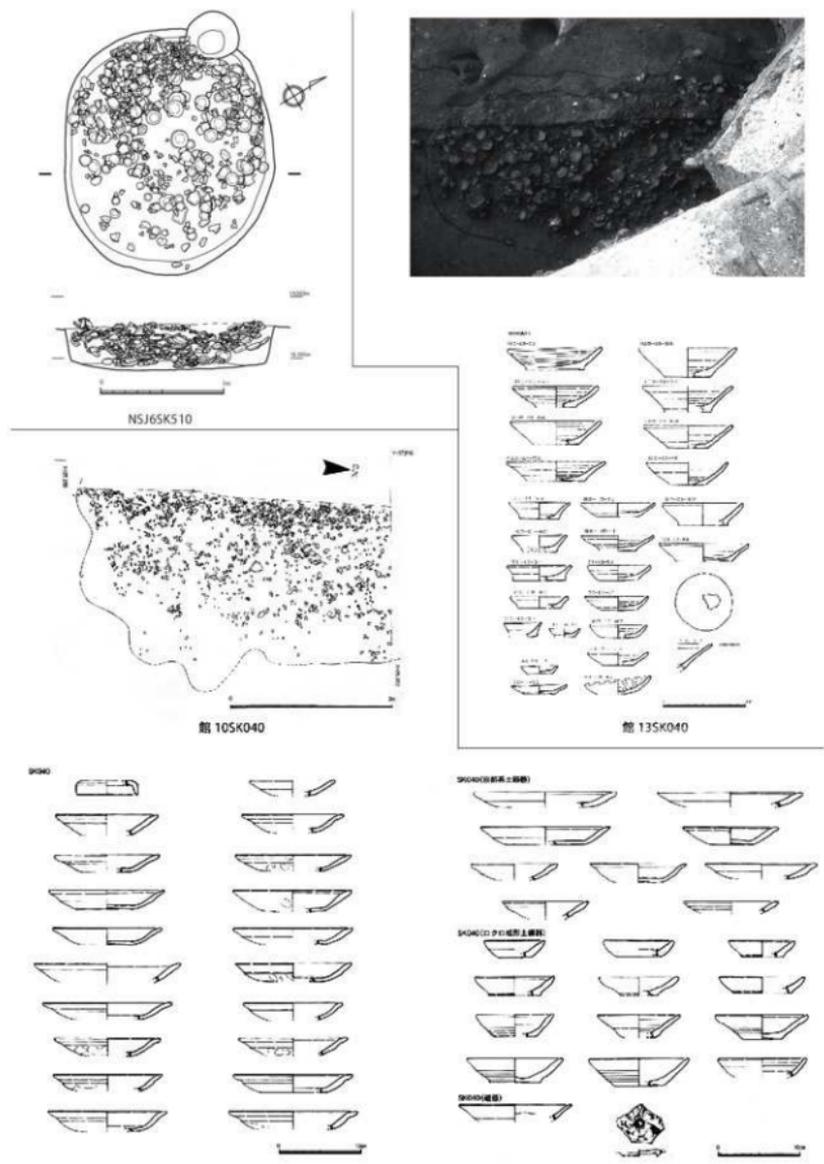


第 490 図 NSJ4・6・9・10 地点出土中世墓

そして今回は奥園で SK510 の遺構が出土し、かわらけの坏皿を大量に廃棄していた。実測図掲載のものは 250 点ほどだが、残りのよいものしか実測しておらず、未実測の破片を加えると 500 点近いかわらけが一度に埋められたと考える。また SK510 の埋土の自然科学分析によれば、かわらけとともに稲藁や動物脂などが検出されたため、これらを用いた製品が廃棄された可能性を指摘している（第 19 章参照）。ところで、かわらけ大量廃棄の行為は中世集落のどこでもみられるものではない。これまでに類似する遺構が検出できているのは豊後国府内の大友館跡内だけである。大友館内で出土している大量廃棄土坑と第 6 地点 SK510 と共通するところは、かわらけの坏・皿が 99% ほどを占めるところで、その数も 200～300 点以上を含有する。大友館内のかわらけ大量廃棄土坑の位置づけとしては、儀式・儀礼に伴うことが考えられている。第 6 地点 SK510 もその出土状況から、大友館出土のものと同性格が類似すると考えることができる。前節で述べたとおり、第 6 地点 SK510 出土土器の編年での位置づけは 14 世紀末～15 世紀前葉と考えることができることから、大友氏 11 代当主大友親著との関連が考えられる。14 世紀末～15 世紀前葉の大量廃棄土坑 (NSJ6SK510) は、他では例が限られる。また土器の使用目的も明らかになってないことから、この期の大量廃棄土坑のあり方については、検討が必要となる。

以上のことから、第 6 地点 SK510 を伴う奥園側の検出遺構は、大友親著との関連が期待されるところである。大友親著と丹川地区の結びつきに関しては、第 17 章で飯沼賢司氏が述べられており、さらになぜ大友親著の伝墓や菩提寺の字名がこの丹川地区に存在しているのかというこの土地の重要性も含めて考察している。いずれにしても、通常は守護クラスの館内でしか見られない儀式などに伴うかわらけ大量廃棄土坑が、丹川地区の第 6 地点 SK510 で検出されたという意味は、当時の大友氏と丹生を考えると大変意義深いと思われる。

(五十川 雄也)



第 491 図 第 6 地点 SK510 と大友館跡出土かわらけ大量廃棄土坑

## 第4節 総括

平成16年度から対象面積約40haに及ぶ圃場整備事業に伴う発掘調査は平成19年度までの4年間つづいた。このような大規模事業が入ることは稀で、丹生・丹川地区にこれまで調査のメスが入ることもしなかつた。今回の発掘調査では丹生川上流域における調査成果は大きなものがあり、総括としてまとめてみたい。

縄文時代は後晩期以降の調査を実施した。NSJ3SK01・02、NSJ10SK011からは縄文時代晩期の埋土遺構が発見された。その埋土遺構の立地や打ち欠き行為の変遷が認識できたことは新たな知見となった。弥生時代はNSJ1・2・10などで遺構が発見された。NSJ1は弥生時代終末の水路跡(排水施設)から祭祀的な土器も含めて、1か所に集中して廃棄しており、水田と関連したであろう水路の祭祀が想定できたことは成果の1つである。NSJ10では比高のやや高い丘陵上に中期～後期にかけての円形住居を複数検出した。古墳時代はNSJ4で、丹の貯蔵施設と前期の竪穴建物跡を2棟検出。確認調査で野間古墳群7号墳及び8号墳の周辺トレンチ調査で、特に7号墳の周溝を発見し、円墳である可能性が高くなった。周溝からは壺形埴輪や小型丸底壺などが出土し、7号墳の時期を考える上で重要な資料となる。NSJ4SK006は丹の貯蔵施設であり分析の結果、ベンガラが主体であることがわかった。水銀朱ではなかったものの「丹生」や「丹川」の地名の由来を考える上で興味深い遺構であった。古代、丹生・丹川地区は丹生郷の域であった。NSJ4・7・8は8世紀～9世紀にかけての公的施設を想定できる掘立柱建物跡が多く見つかり、遺物も緑釉陶器(防長系や近江系のものを含む)、灰釉陶器、越州窯系青磁、円面硯片などが発見できたことは、海部郡の地域社会を考えていく上で重要な成果であろう。これらの公的施設の性格が、丹生郷の経営に関わるものなのか、丹生川坂/市条里の経営に関するものなのか、海部郡衙に関するものか、さらに古代の交通に関して、丹生・丹川地区は西の松岡・毛井周辺から大野川を渡河し、広内を通過し白柁へ抜ける通過点にあたり良好な立地であることから国が関係する施設なのかは今後の検討課題である。中世前期はNSJ9・10で遺構遺物が大量に発見された。今回の調査で出土した資料は良好な一括資料にも恵まれているため、時代及び遺跡の性格を追及する上で重要な成果であった。NSJ9は丹生庄の荘官クラスの屋敷跡もしくは寺社関係の建物跡と推測される。また高台付瓦器皿は白柁石仏群出土のものと同プロポーシオンなどで類似し、この遺物が他地域では現在のところ、未発見のため、NSJ9の施設主体者と白柁石仏群の関係があることが予想される。南北朝期は、NSJ6地点の付近に大友親著の墓とされる近世に建立された石造物があるが、付近に字大恵寺の存在とNSJ6SK510のかわらけ大量廃棄土坑があり、関連が期待できる。これらについては、別章において、別府大学飯沼賢司教授の成果を参照していただきたいが、14世紀後半から15世紀にかけての大友氏からみた丹生・丹川の立地の重要性があらためて知ることになったと言える。中世戦国期もNSJ4・6などでわずかであるが遺構が残され、水田化には至っていない。この頃は太友氏に加判衆であった齊藤氏が丹生庄を本領とし、現在の丹生神社付近に拠点があったといわれている。NSJ4・6について戦国期も水田化されておらず、NSJ6地点においては、京都系土器器皿が出土しており、丹生庄城が豊後国府内からみても重要な拠点の1つであったからに違いない。古代から中世にかけて、丹生川上流域で水利権を握る重要性は下流域の佐井郷・佐加郷を抑えることに繋がり、また交通の視点に立つと白柁庄・戸次庄をも抑えることに意味があったのであろう。その後近世は大部分が水田化した。さらに明治・大正・昭和期になると丹生川流域で良質な粘土が採掘できることから、周辺に瓦窯が造られた。粘土採掘跡は確認調査でも多く確認しており、古代条里水田の発見も期待されていたが、粘土採掘坑により壊されていた。今回の圃場整備事業が今後どのような成果を上げていくか、またどのような影響があったのかは、別章で別府大学の中山昭則氏が述べられており、新たな視点で土地開発を考えていくことは大変重要であると思われる。

最後になったが、これまで発掘調査を支えていただいた地元の皆様、そして大分県中部振興局、大分市耕地林業課、別府大学の方々に感謝するとともに、発掘調査で多大な手助けをいただいた嘱託職員の高谷史穂氏(現愛知県豊橋市教育委員会)、山本哲也氏、また報告書作成に尽力を尽くしていただいた整理事業員さんに感謝し、結びとしたい。(五十川 雄也)

## 第17章 丹川地区の村落遺跡調査と丹生荘の歴史

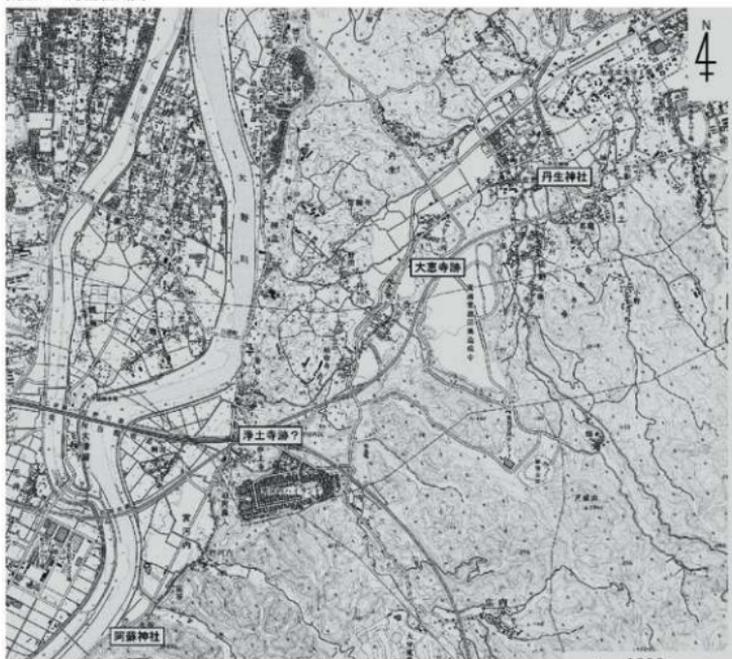
飯沼賢司・高 陽一・三谷弘平（別府大学）

### はじめに

大分市大字丹川の前身、丹川村は明治9年(1886)に大分郡久所村と上久所村が合併して成立した。この地区は、丹生川の上流に位置し、中世の丹生荘に入る。丹生荘は丹生川沿いの谷に展開した荘園であり、その範囲は現在の<sup>みやうちのうら</sup>大分市宮河内・<sup>ひろ</sup>広内・<sup>にわ</sup>丹川・<sup>いにしへ</sup>丹生・<sup>くも</sup>一本・<sup>くま</sup>久土・<sup>さの</sup>佐野の地区に比定される。鎌倉時代の中期、弘安8年(1285)に作成された豊後国図田帳では田数150町、領家は高倉宰相家(高倉茂通)、地頭は大友兵庫頭入道すなわち大友頼泰であった。

丹生川の河口には坂ノ市があり、丹生川を挟んだ向かいの丹生台地の先端上には大分県最大級の古墳亀塚がある。坂ノ市は鎌倉時代に創建された萬弘寺の市から発展したといわれるが、亀塚などの立地から見ると、古代の国崎津とともに重要な津であった坂門津の所在地であった可能性がある。また、丹川地区近辺には野間古墳群があり、古代から調査地一帯に遺跡が広がっている。いずれにしても、この丹生川沿いの地域は古代から重要な場所であり、隣の佐賀郷とともに大友氏が地頭職を所持したことは、この地区の重要性を窺わせる。

図版1：丹生荘域図



## 1 調査編

本調査は当初、平成16年度～17年度にかけて圃場整備に伴う発掘調査の関連調査として別府大学文化財研究所によって、実施された。調査対象地域は圃場整備が進められる丹川地区を中心に、平成16年度の場合は大分県大分地方振興局からの受託研究で、平成17年度は大分市からの受託研究で2年にわたって村落遺跡調査が実施されることになった。

飯沼賢司（別府大学教授）が中心となり、平成16年度では11月～12月にかけて調査を行ない、水懸かりや水系などの水利調査や学名や通称地名などの調査を中心とした現地調査を実施した。平成17年度では8月～12月にかけて前年度の補足調査に加え、調査対象地域に関する文化財調査を行った。また、並行しながら、中山昭則（別府大学教授）が中心となり、圃場整備における換地問題と集落の関係についても調査を進めた。

その後、丹川地区の圃場整備事業は18年度、19年度まで実施され、発掘調査は続けられた。その間に村落遺跡調査の補足調査も断続的に行い、20年度に報告書の原稿を受託し、最後の調査を行った。本章の執筆は飯沼賢司、高陽一（明豊高等学校教諭）、三谷紘平（別府大学大学院文学研究科博士後期2年）が担当した。

### 1 水利調査

圃場整備対象となった丹川地区を中心に調査を行なった。この地区での水利状況は丹生川から取水して灌漑する水田と、谷迫水を利用して灌漑する水田に分かれる。後者では昭和井路と呼ばれる近代長距離型水路の水によって補われていることから、その点を考慮に入れた調査を実施した。調査の成果は図版7・8で、それぞれの性格による灌漑範囲を図解化することにした。

#### ① 川から取水する灌漑

調査対象地域における丹生川から取水する井堰は四ヶ所を確認した（図版7・8中A・B・C・D）。A～C井堰は丹生川の河川改修によって河床を掘り下げたため、河床が下がり、現在はポンプ給水でもって水をくみ上げる仕組みになっている。井堰の名称についてA井堰は「クリクマイゼ」、B井堰は「カヤキイゼ」、C井堰は「オカンシタイゼ」と呼ばれているが、D井堰は名称不明である。今回は、この四つの井堰からの水懸かりを確認する調査を行なった。

#### A井堰懸かり（クリクマイゼ（栗熊井堰懸かり））

字古市あたりでポンプ給水しているが、丹生川が河川改修される以前の位置は図版7中の点線範囲にあったと聞き取ることができた。灌漑範囲は丹生川左岸一帯に広がっており、C井堰のオカンシタイゼ付近まで至る。

#### B井堰懸かり（茅木井堰懸かり）

クリクマイゼより下流に位置し、丹生川右岸の条理的構造をもつ水田一帯の水をまかなっている。河川改修以前は、河道が下久所の古政所の集落の縁を通っており、イゼは現在の位置より少し上流の橋の下にあったと聞き取ることができた。

#### C井堰懸かり（オカンシタイゼ・岡下井堰懸かり）

茅木井堰より下流に位置している。この井堰から取水した灌漑範囲は今後の調査を必要とするが、傍にある堂ノ下の水利調査から谷迫水と合流することで水量を補っていることが分かった。

#### D井堰懸かり

丹生川の支流である上久所川から取水した水で上久所川右岸の字桑原などの水田を灌漑している。現在では昭

和水路と連結し、用水のほとんどはその水に依存している。名称について今後の調査が必要である。

### ② 谷迫の水による灌漑

谷迫の水による灌漑範囲は図版7・8で示す。受託調査の期間（平成16～17年度）で調査した地域での主な谷迫の水懸かりは、堀の内の台地から流れる冷迫の水を利用するもの（図中・ロの灌漑範囲）、誓願寺の池懸かり（図中・ハの灌漑範囲）、野間口の池懸かり（図中・イの灌漑範囲）堂の下の迫の池懸かり（図中・ヘの灌漑範囲）、上久所の集落を潤す堀迫池懸かり（図中に明示）などがある。

平成16年から19年まで及ぶ圃場整備の対象地の丹川地区全区にかかわる池がかり水路として赤迫井路がある。この井路は池がかりの水路としてはこの地区でも長距離の水路である。赤迫池（宮河内分）から延命寺、延命寺の栗熊迫を通り、堀ノ内の下、宗角寺を経て、字栗熊のある丹川地区の丹生川左岸の水田に水を掛ける。

谷迫の水は川から取水した水での灌漑が不可能な傾斜地を潤している。それらの水の落ち水は、川灌漑による水路と合流しており、水資源の有効的再利用を行なっていることがわかる。一方、これらの水田灌漑範囲は昭和井路とよばれる長距離型水路によって水が補給された構造を持っていることから、昭和井路以前においては水量が限られた状況であったことが容易に推測され、谷迫水による灌漑の限界を窺わせる。

また、堀ノ迫池からの灌漑は、さらに堀ノ迫池よりも上部の迫地形を利用して築かれた奥迫池（現在は工業団地開発によって消失）とが連結した構造を持っていた（図版7）。

### ③ 水利概況

①・②の成果から調査対象地域の水利状況を見てみよう。基本的に谷迫の水は築堤によって池に集められ灌漑に利用されるが、落ち水は川灌漑の水路と合流したり、井堰の少し上流で落ちて再び取水されたりすることで水の再利用方法が見える。発掘の成果からも、このような構造を思わせる遺構を確認した報告を受けている。クリクマイゼ付近の奥園（第6地点）での発掘では丹生川に並行する溝跡と直交する溝跡が確認されている。この二つの溝は水路の可能性があり、並行する溝は原クリクマイゼ（クリクマイゼ前身の井堰）から取水した用水溝とも考えられ、直交する溝は谷迫水をこの溝に落としていた水路もしくは取水した水を分けた用水溝とも考えられる。（図版6中写真）。後者の場合は河川改修以前におけるクリクマイゼからの水路という可能性も否定できないが、いずれにしても谷迫水が川に落ちた後、再び井堰によって取水されるという水資源の再利用という方法が発掘からも窺い知ることができると言えよう。ここで、興味深いのは流路跡での分岐的な場所に伴って土師器を数十枚埋納した祭祀遺構（第4地点SK1265）が確認されており（図版5中写真）、他に福寿庵でも同様な祭祀遺構に宋銭なども確認されていることから、この地域の15世紀代の開発史の一面が見える。

また、赤迫池に発する長距離水路赤迫井路に注目してみよう。赤迫井路は延命寺地区の栗熊迫の小谷の縁を回り、谷の川の水を拾い、堀ノ内の下、宗角寺を通り、丹川地区の栗熊の条里水田に水を掛けている。丹生川流域では、「栗熊」の地名は、三か所に見られる。延命寺の栗熊と丹川地区の水田名と堰名クリクマイゼである。これらは、水源と水の供給先を示す地名と考えられる。字奥園にあったクリクマイゼは、堀の名によくあるように、条里水田の中心にある栗熊方面へ水を供給したため、その名がついたと考えられる。延命寺の栗熊の場合も、その迫の水が栗熊の地名のある条里地区の水田の水を補給したためと考えられる。赤迫池がいつ築造されたかはわからないが、赤迫井路は赤迫池の水を主水源として栗熊迫の水を補給しながら、丹川の条里の水田へ水を供給する最後の姿といえる（図版2～4）。そこには、水田の維持と開発の歴史が秘められている。



延命寺の集落から  
宗角寺方面へ向う赤迫井路

図版2



栗熊の迫の赤迫井路

迫の縁を回り中央の水田を横切る。その際に、迫の奥からの用水の水を合わせている。この水利構造から推定すると、赤迫池に連結する以前は、本来、この迫の水を水源としていたと思われる。

図版3



図版4

## 丹生荘における埋蔵文化財と用水

図版5 福寿庵遺跡（第4地点）：15世紀後葉の～16世紀前葉ころと思われる地鎮祭遺構・出土品…土師・宋銭・イネ科植物



2005年8月撮影

図版6 奥園遺跡：A：14～15世紀中葉のころと思われる地鎮祭遺構・出土品…土師、水路遺構



A地点での遺構

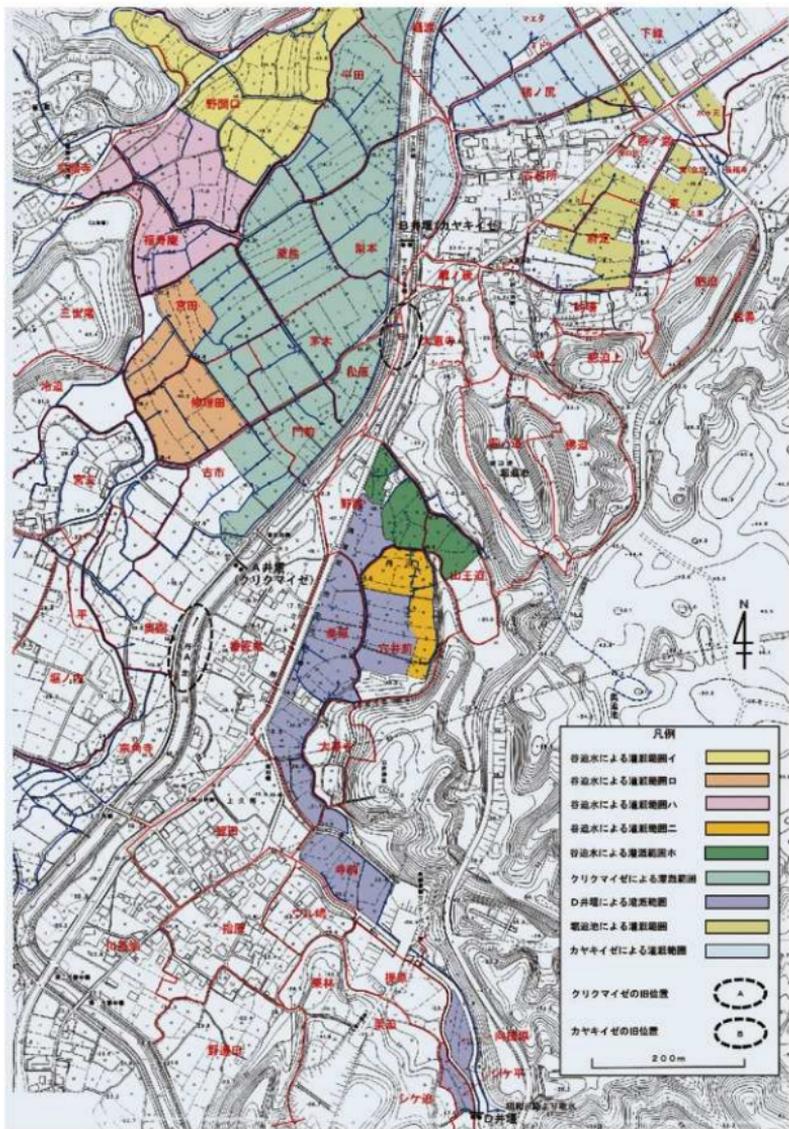


A地点で出土した土環・皿（第6地点SK510）



水路遺構

2005年11月撮影



図版7 丹川地区灌漑調査図①



## 2 地名調査

地名調査では、大分市から字界園・地番園などや、字と地番の対応表などを提供していただくことで、調査対象地域の字領域図（図版7・8）を作成した。豊臣政権下の文禄二年（1593）に作成された検地帳写があることから（『豊後国莊園公領史料集成』六・丹生荘66・67）、その検地帳写に記載された地名などの現地比定を含めた調査を行なった。この史料は検地奉行山口玄番が作成したものであることが表紙に記載されており、それぞれの地域における地名および地目の等級や耕作者名なども具体的に記されていることから、当時の景観を知る上で重要な史料であるといえる。それぞれ記載された地名について調査で得た地名と対応させたところ、『豊後国莊園公領史料集成』六に記されている地名が若干検討を要するものが散見した。そこで、所蔵先である大分県立先哲資料館での写真で校合をすることで訂正を行ない、その上で現在の字名と対応させた形で表1を作成した。但し、原本がもともと写であるため、その書写の段階で誤写しているものも多い。

また、対象地域で聞き取ることができた屋号についても地番と対応させる形で一覧表を作成した（図版10・表2）。

1の水利調査の③でも述べたように、15世紀代の遺跡が字奥園や字福寿庵で発見された。福寿庵は大友親著の菩提寺である大恵寺の塔頭（たっちゅう）（子院）であり、地名調査では、今は跡形もない大恵寺の復原を意図して調査を実施した。詳細は考察編に譲る。



図版9：大恵寺跡

表1 文禄二年豊後國海邊郡丹生庄御検地帳写記載地名・字名対照表

( )は、原文書を照合した上で改めたもの。また、写す段階で誤記した可能性がある。〈 〉は通称地名。

検地帳記載地名	現地名	しての迫		よしか迫
中ノ村	久所村	おか	〈岡〉	まへしり
とうそん		わさり		ミマサ
なかた	長迫	辻やしき	岡辻カ	くり懸(熊カ)
めうけん		辻畠	岡辻カ	宗かくし
寺前	寺前	井斎天	〈井才天〉	ミヤ共
三百分		平ノ下		ひらはた
ひさげ原	提原	チャノ木ノ下	茶木下	な(ほか)りの内
くわい迫		通(延カ)めいし	延命寺カ	おか内
おはやし		しつかちん		そう覺寺
三とり	下縁カ	やしきはた		いさいこ
といの内		うるしま	ウル島	大蔵屋敷
ひ□(るカ)た	蛭田カ	といの内		しえの上
川ぶち		くわ原	桑原	しえの下
たかた		ミワノか迫		くり懸(熊カ)谷口
ひわはた		のりノ平		延命寺栗熊カ
かわらはた	川原畑	かたしろ		宗かくしが谷
やしきまへ		のち	野路	ひしき
ハ(くカ)リ林		やしき畠		くりかけの迫
さし原	指原	とうあんてん		
ひしきわき		まへ□		
のへた	野辺田	かやき	茅木	
いはの木ノもと		六十はた		大通(恵カ)寺下
来かうし	来光寺	やしきはた		壺尾
天神免		古いち	古市	大通(恵カ)寺
□ふところ	姥ヶ懐	門まえ	門前	おか迫
ひろ山た	広山田	道はた		佛迫
くりか谷		はへかや		まとの上
おくか原	奥ヶ原	のへた	野辺田	はみ
ひしきはた		くほた	久保田	不定
山田中内		かわらはた	川原畑	はいりん
中ノ内	中ノ内	しゆりた	修理田	〈梅林〉
まへか迫		ハキやしき		ひさこ
はた中		古やしき		ひし畠
土とり	土取	ついでのはな		とまや
よこ岩		かうりんし	光蓮寺カ	古政所
いてのしり	井手尻	うせやしき		いちのせ
圓めい畠	延命寺カ	中尾	中尾	いのしり
やしきはた		中を谷	中尾	猪ノ尻
やくした		谷		ひしの宮
辻の下	辻の下	こなかし		にしのみ
谷		野島迫	野畑カ	長ふくし
おり		のはた	野畑	しはを
おかノ下	岡下	はる	原	すいかもと
				水ヶ本
				ミとり
				下縁カ
				にしミヤ
				西ノ宮

平田	平田
かやき	茅木
なしもと	梨本
ひらた	平田
ちし	
ひし	
ミヤた	宮田
かやき	茅木
のま	野間
ふくしゅあん	福寿庵
徳の尾	
のま	野間
山さき	
としのかミ	
ひへか迫	冷迫
ミヤた	宮田
ふし原	
とちき	
大くほ	
のまの口	野間口
のち	野路

ひとへ□し	
ぬめりいし	滑石
穴ヶ迫	論ヶ迫
あらいかう	弘川カ
柳はた	柳谷
は□いかう	弘川カ
はたいかう	弘川カ
門が内	
ひろ田	広田
黄力田	
こへち	
丸口(田カ)	
丸田	
いのさこ	
竹ノ下	
下はる	
平はた	
さ□の木の本	
ほりたひら	
梅の本	梅ヶ迫
の中田	

とうしり	道尻
こうき	
たはた	
さほ	
うちはた	
しゃうはた	障子畑
瀬口田	
瀬口田	
あさ入	阿蘇入カ
山た	
山田	
こうやはた	
城の下	
さうちか迫	
うちはた	
うちはた上田	
上土寺	浄土寺
こくらまさ	
こくらまさ	
つか田	
つかた	
ふるはら	
そとか迫	
ふるさこ	
ひふり	火振
宮のわき	
さとハラ	佐土原
うちはた	
宮その	
内畠	
かと畠	
山ノ口	
やしか迫	
うど	
ひしやくう	
長さこ	長迫
かいてか迫	
いふね	
はたのしり	
たうハラ	
いけの谷	
柏木はた	
柴の下	
たの下	
くれか谷	暮ヶ谷
東畠	
うち畠	

上ノ村 平田村	
一ノ瀬	
ひわたし	樋渡
大とおり	
平た	平田
まへ田	前田
セキてん	
はつたゝ	八反田
岡ノ下	岡下
ふつりすり	
こもすい	
おか下	岡下
つちとり	土取
岡くほ	岡久保
ミとり	下緑カ
いのしり	猪ノ尻
まつのもと	松本
平田	平田

宮河内村	
宮のまへ	
宮の前	
うらき	浦木
さをの下	
宮の西	
たに口	
宮の西	
山崎の下	山崎
道そい	
いけの上	
池の上	
あさ夕の前	
中すか	
きしの下	岸の下
江	
はん	下半カ
きしそひ	
中けい	中毛井
亀の却	亀甲
道添	
亀のこう	亀甲
西川ふち	
ふ定	
さうちか迫	

廣内村	
くぬかはる	梶原
長田	
よこ竹	
うりふち	
ひうかふち	日向瀬

ひか迫	
ふくしやうし	福浄寺
はさま	
こやしき	
たのひら	田平
内畠	
かひか迫	貝ヶ迫
ほきた	
山田	
大道	大道上
しやうとうし	浄土寺カ
うちはた	
ゆやのさこ	
はさま	
はんのた	下半付近カ
ゆきの迫	
宮のまへ	
はさま	
うちはた	
川下	
藤の木の下	
川の下	
しんとう	新藤下
とうしり	道尻
とりうし	道尻
ふ定	上・中・下の不定
かなや	金谷
かなやか迫	金谷
せきたい	関台
ふ定	上・中・下の不定

表2 丹生屋号一覧

小字	屋号	居住者	番地
番匠拾	オク	佐々木信廣	837-1
	シンヤ	佐々木豊治	856
	瓦屋	船田利美	889-3
蛭田	ナカヤシキ	松井 勤	1301
	ヒガシ	松井 靖	1306
	ニシ	後藤 幸光	1328
古政所	オク (タバコ屋)	池永 信義	266
	下 (シタ)	富来 惣一	266-1
	コーバ	富来 文彦	269
	オモテ	富来 和徳	277-2
	隠居	富来 輝男	275
	裏隠居	富来 文男	273
	カワラヤ	渡辺 一夫	280
	新屋敷	富来 保治	283
	門前	三浦 章夫	298
	西カド	合沢	305
	西	池永 哲夫	312
	フジョー	三浦 雅明	318
	シンヤ	富来 則夫	317
	新宅	富来 眞平	328
	カジヤ	木村 清彦	336
西ノ宮	西の宮	前田 芳郎	339
東	ミセ	池永 専一	469
	ヒガシ	不明	不明
	上ヒガシ	合沢 光男	489-2
的場	マトバ	上岡 清	528
	ヒザコ	秦 忠次	521
	門前	富来 光雄	540
肥迫上	本家 (中梅林)	富来 伝	625



### 3 石造文化財調査

#### 古政所の富来家の石碑

##### 大恵寺址碑石銘（図版17）

銘文に「豊後国丹生郷貞処邑雲鶴山大恵寺」とあり、大恵寺のことを詳細に記載されている。この銘文については考察編に譲る。

#### 西の宮の石造物

##### 無縫塔（図版18）・五輪塔

室町期、15世紀代のもと思われる。個人の自宅の庭にあるが、この家の畑がある隣接地字長福寺にあったものとみられる。このタイプの無縫塔は禅宗系の寺院における僧侶の墓塔として利用されている。長福寺は室町期に大友親著の寺院として開かれた大恵寺の末寺として見える寺院である。

#### 番匠給の石塔

##### 大友親著墓塔（図版20）

塔の形状から近世期のもので、銘文には安永五年（1776）に大友末流の松野外記能勝が大友親著の三百五十年忌として造塔したとある。

#### 山王迫の墓（図版11）

尾根上の中腹に墓地がある。片岡家の墓地で、中世の五輪塔残欠が数基と近世近代墓が展開している。尾根の頂上に一基の墓石があり、銘文からは明治38年（1905）に造立された先祖墓であることがわかる。特に十代片岡政明を供養する塔で、片岡家の出自と、片岡氏が大友家家臣として天正六年（1578）の美々津合戦の戦功で、丹生荘久所に住居したという内容が刻まれている。



図版11：山王迫の墓

#### 宮谷の公民館の石造物（図版12）

大字宮河内宮谷に寺跡を利用した公民館がある。敷地内に中世～近世近代の石造物がある。中世のものは宝篋印塔二基と五輪塔残欠。近世は石輪、大乗妙典塔などがある。

宝篋印塔は二基とも宝珠は後補。宝珠を除いた高さは、向って右塔が141cm、左塔が131cmで、右塔の基礎は後補（宝塔基礎力）である。笠、塔身の形状はほぼ同一で、二基ともに時期差はない。笠には格狭間が段形毎に彫られている。その手法は豊後南部に分布する南北朝期玄正式の宝篋印塔に類似するが、彫り口は稚拙で時代はかなり下るものである。



図版12：宮谷公民館宝篋印塔

## 光蓮寺と延命寺の境界にある宝篋印塔（図版B）

坂ノ市一戸次線の道端、延命寺の集落の下、光蓮寺橋の近くに崩れた宝篋印塔がある（図版13）。これまでほとんど注目されていない塔であったが、今回の調査で、大分の禅宗の展開を考える上で重要な塔であることが判明した。詳しくは本文でも触れるが、宝篋印塔やその周囲にあった石造物について紹介しよう。

まず、宝篋印塔であるが、凝灰岩で現総高143cm。基壇は一重、基礎は壇上積形式で一石を二段に分け、それぞれに二区の格狭間を入れる。段形は三段で上段に蓮弁を造り出している。塔身には瓢車型の光背を彫り窪め、半肉形の四方仏を配す。笠は二つに割れ足元に落ち、相輪は欠失している。

注目すべきは塔身の四方仏で、その精巧な彫り口は白杵市野津町水地にある文永四年（1267）銘九重塔（国重文）に酷似し、おそらくは同時代同系統の仏師による作であろうと思われる。また、基礎の壇上積形式も特徴的で、先の文永塔、佐伯市上岡十三重塔（鎌倉期・県指定）を初めとして、豊後南郡に分布する鎌倉末～南北朝期の宝塔・宝篋印塔にしばしば見られる。基礎を二段に分ける手法は本塔にしか見られず特異なものではあるが、以上の点から、造立年代は鎌倉末から南北朝期と考えられる。

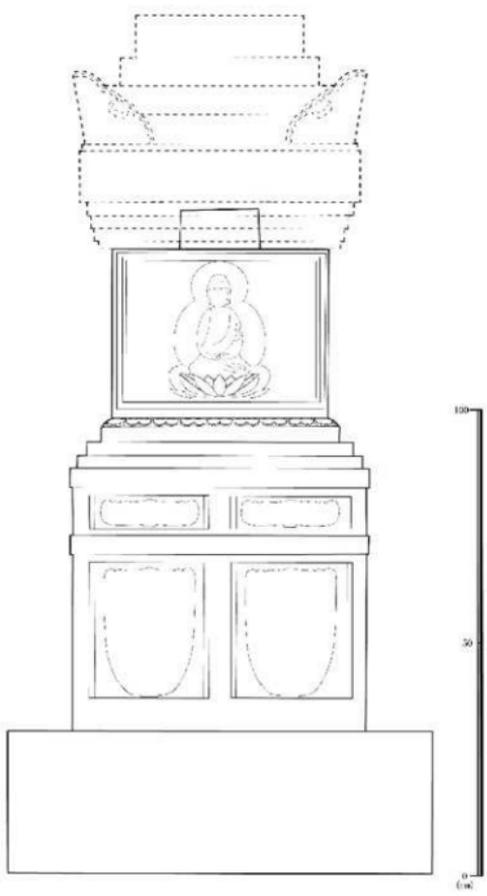
また、宝篋印塔の横に五輪塔残欠が集められているが、その中に銘文の入った塔破片を発見した。破片の特徴から、無縫塔竿石の一部であることがわかった。もとは八角の竿であったと見られ、一面に「貞□丁未七月念二□」と刻まれている。「貞□丁未」は干支から「貞治六年（1367）」であり、南北朝期の無縫塔であることが判明した。同時代の無縫塔の作例として代表的な塔は、杵築市大田の宝陀寺にある悟菴智徹ごあんちてつの墓塔と伝わる無縫塔である（図版14）。宝陀寺無縫塔は安山岩で総高159cm。その形状・古さから、大分県における無縫塔の先駆をなす優塔である。延命寺の破片を比較すると、竿石一面の幅は13cmで宝陀寺のそれとほぼ同じ大きさであり、竿石に造り出されている蓮華飾も同形で精巧に彫られていることから、元の塔型は宝陀寺無縫塔とほぼ同規格の塔であったと思われる。無縫塔は主に禅宗の僧の墓に用いられる形式で、この破片は付近にあったという浄土寺に関係する遺物であり、また、浄土寺は悟菴智徹とも関係する禅寺であることから、丹生荘における禅宗の展開を考える上でも重要な発見である。詳しくは考察編に譲る。



図版13：延命寺宝篋印塔



図版14：宝陀寺悟菴智徹無縫塔



図版15：宝篋印塔見取図

#### 4 文献調査

大智寺所蔵大友親著像（図版26）

字大恵寺に関する調査をおこなったところ、大恵寺と深い関わりをもつ大智寺（大分市）に大友親著の肖像があり、調査の一環として写真撮影を行なった。

（以上文真 飯沼・高・三谷）

## II 考察編

### 1 古代の丹生郷と条里地割

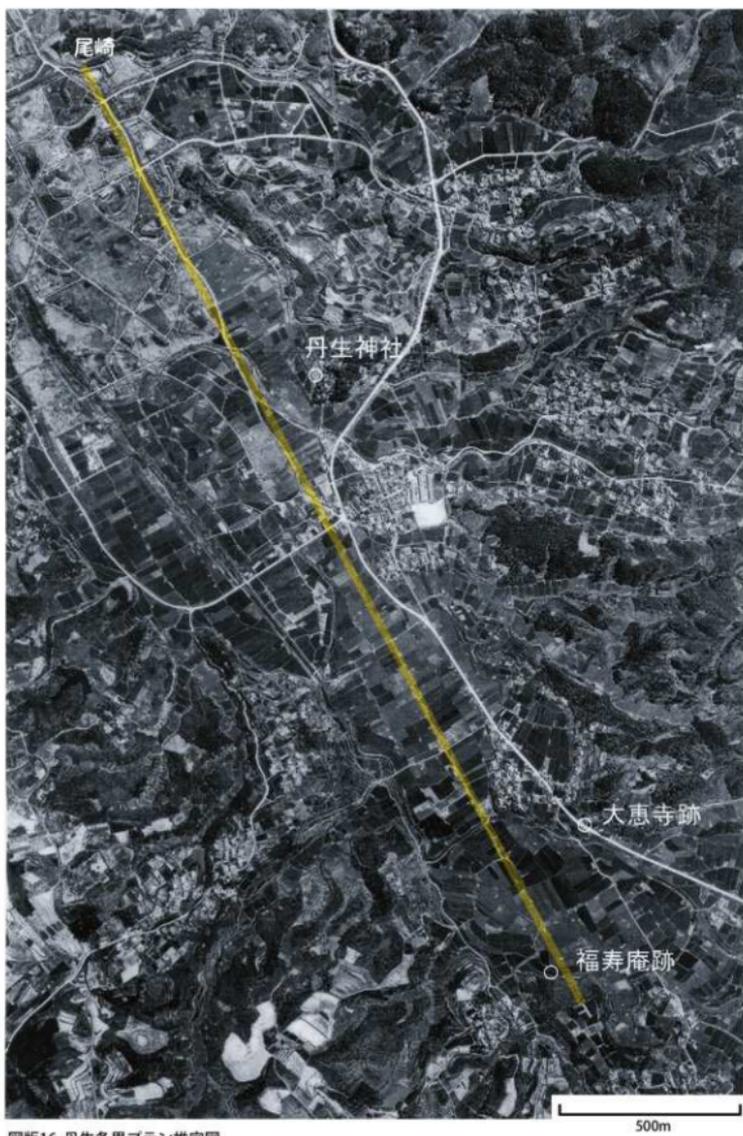
本調査の実施された大分市丹川地区は、古代の丹生郷の地域に属する。丹生川流域から大野川にかけては、海部郡の佐井郷、丹生郷、佐加郷などが複雑に入り組み所在していた。この地域は、海部郡支配の中心的な場所であり、丹生川と大野川の間挟まれた丘陵部には、古墳群が存在し、中でもその先端に位置する亀塚古墳は、大分県最大級の前方後円墳である。古墳の眼下にある丹生川河口部の坂ノ市の町は古くから、古代の豊後国に所在する官営の津ともいべき坂門津の候補地として注目されてきた。また、近年、道路建設などによって、亀塚に隣接する城原地区では、2箇所、7世紀前半から後半と7世紀後半から8世紀の官衛の遺跡が発見され、郡衛説や戌などの国境防衛施設、港閘施設などが唱えられ、この地域重要性がより注目されてきている。

「佐井」や「佐加」という語は、境界を示す地名であり、『豊後国風土記』では、「佐尉の郷部の東にあり、この郷の旧の名は酒井なりき。今は佐尉の郷と謂うは、訛れるなり」とあり、本来は「サカイ」であったという。瀬戸内海の出入口は、北は関門海峡、南は、豊後水道であり、この地域は、古くからヤマト国家の西の境界のひとつと意識されてきた。「サカイ」の地名もそこから発生したとみてよいだろう。その意味で、上記のような遺跡の存在があったのも当然肯けるのである。

一方、丹生郷は、『豊後国風土記』に「丹生の郷部の西にあり、昔の人、この山の沙をとりて朱沙に該(あ)てき。因りて丹生の郷」とあり、朱沙の産地から付けられた地名であるといわれている。『続日本紀』では、文武天皇2年(698)9月に豊後国から真朱が献上されたこととあり、ことは断定できないが、豊後国に朱の産地であったことは間違いない。しかし、丹生川には高度に水銀を含む土壌があり、赤迫などの地名もあるが、未だ水銀朱の鉱床の発見はない。

丹生郷の範囲は、中世の丹生荘の範囲、丹生川の中流から上流、さらに、宮河内地区に比定されるが、白杵地域の丹生島や大人島などの地名から、白杵もその範囲に含むことが指摘されている。郷には、丹生駅も存在しており、交通上の要衝であった。駅の場所も大野川の左岸に比定する説、右岸に比定する説、白杵方面に比定する説などがあり、郷域の比定とともに諸説がある。大野川の渡河点は毛井—宮河内ラインが有力であり、郷内の宮河内付近が交通の要衝であったとみられる。

しかし、郷の生産面での拠点、丹生神社があり、条里遺構がみられる丹生・丹川地区がその中心であったことは動かないと考えられる。丹生川流域の条里は、古い航空写真から見ると、図版16のように、野間の台地の端、「堀ノ内」の丘陵の端(字福寿庵の上)から、屋山の丘陵の先端「尾崎」を目標に基準線が引かれたことは間違いない。おそらく、丘陵の先端に目標を立て、それを基準に見通し線を引き、旗や松明などを使い、地上に縄を張って線を引きいたと考えられる。この基準線を基軸に横の区割を引きいたと考えられる。この範囲が、丹生郷の中心的条里の範囲であったとみられるのである。堀ノ内の下の福寿庵の発掘では、古代の建物址が出ているが、条里プランとの関係も注目する必要がある。



図版16 丹生桑里プラン推定図

## 2 中世の丹生荘

荘園制の時代の丹生郷については史料が極めて少ない。中世史料の初見は、宇佐宮仮殿地判指図である。本図は、元暦元年（1184）の緒方惟榮の宇佐宮焼き討ち後の仮殿造営にかかるもので、豊後国のすべての荘園・公領の造営負担が記載されている。丹生郷も「北生江垣九十間内、(中略)三間丹生庄」「外殿一字三間各八尺(中略)」「中一間」□生庄」「三殿御前糞五丈二尺内、(中略)一丈五寸 丹生庄」など「丹生庄」と見え、12世紀末には、公領ではなく、荘園として立券されていたことがわかる。

これまでの研究では、平安末期ごろまでに、古代の丹生郷は北部が丹生荘と南部の白杵荘に二分され、白杵荘の成立が12世紀半ばとすれば、丹生荘もその時期に遡るだろうといわれている（『豊後国荘園公領史料集成六 豊後国 佐賀郷・丹生荘・白杵荘・佐伯荘・柴山村史料』解説）。

弘安8年（1285）の豊後国大田文には、次のように田数、領主の記載が見られる。

丹生庄百五十町

領家 高倉宰相家

地頭 大友兵庫頭入道殿

荘園としての公田数は150町である。渡辺澄夫氏は自身所蔵の文禄2年（1593）の豊後国海邊郡丹生荘御検地帳写を基に丹生荘の範囲を比定している（同前）。それによれば、現在の大分市の鶴崎地区の宮内、広内、坂ノ市地区の丹川、丹生、一木、久土、佐野の範囲である。

領家の高倉宰相家は宰相すなわち参議を務めた高倉（藤原）茂道家（弘安8年段階は従二位、前参議）を指すといわれている。高倉流は茂道の4代前の重通に始まるが、重通の妹宗子は関白藤原忠通の妻（北政所）で皇嘉門院（聖子）の母であった。皇嘉門院は崇徳天皇の皇后で大治4年（1129）に入内して女御となり、翌年皇后となった。永治元年（1141）、近衛天皇の即位とともに皇太后に上り、久安6年（1150）に院号宣下により皇嘉門院を号す。伯父である重通は大治5年（1130）、中宮権亮となり、皇嘉門院の側近となる（『尊卑分脈』「公卿補任」）。

丹生荘は白杵・戸次荘に隣接し、南部の宮内は両荘を繋ぐ位置にある。皇嘉門院領には、白杵・戸次荘が入れられており、これは、治承4年（1180）5月11日に九条兼実の子息良通に譲られ、九条家領となる。ここからは推測が入るが、丹生荘はもともと白杵・戸次荘とともに丹生郷を構成しており、両方とも皇嘉門院領に入っており、それが後に皇嘉門院の伯父である高倉家に入ったと考えられるのである。

地頭は、大友兵庫頭入道すなわち大友頼泰である。地頭職は没官領に設定されたと考えられ、丹生荘の隣郷佐賀郷や白杵・戸次荘は、源義経に与同し、流罪となった緒方惟榮の兄弟佐賀惟憲、白杵惟隆が郷司、庄司を務めた所で、当然所領は没官となった。また、白杵・戸次荘との密接な関係を考えても、大友領となった丹生荘は豊後大神氏の白杵氏または佐賀氏の所領であった可能性は極めて高い。丹川の野辺田遺跡（第9地点）で平安末の住居址が出ているが、白杵の古園の遺物と共通性があることも注目される。

丹生荘は貞治3年（1364）の大友氏時所領所職注進状、永徳3年（1383）の大友親世所領所職注進状に見え、その後も、一貫して大友惣領家の所領であった。丹川の堀ノ内地名の一角、字原（第13地点）を今回発掘した。ここでは、14世紀前半から中頃の館に伴うと思われる遺構が出土しているが、大友直轄領の支配にかかわる拠点の可能性が高い。臨濟禪の寺院として、14世紀半ばに浄土寺や15世紀代に大恵寺が建てられたのもこのような大友惣領家の膝下の場所であったからに他ならない。

室町期以降は大友氏の有力家臣齊藤氏が丹生神社の近くに屋敷を構え、諸家臣に配分されていた知行地は齊藤氏のもとに集中し、大友直轄領としての性格は多く変化する。

### 3 雲鶴山大恵寺

丹川の字に大恵寺という地名がある。ここには、応永25年(1418)に大友親世の死去により大友家家督を継いだ大友親善が創建したという大恵寺という大寺院があったという。

#### ① 大恵寺について記述された史料と現在の状況

かつて、この大恵寺址のシイコウに建てられていた大恵寺址石碑(天明5年、大願主富来基左衛門実照・図版17)が下久所の富来和徳氏の家(妙秋庵跡)の裏庭に建っている。その銘文によれば、「豊後国丹生郷貞邑雲鶴山大恵寺」は、大友家の開基の大伽藍であった。寺の南北に「地紫菴」と「清湖菴」二坊があり、境内には、妙(妙)秋菴、梅林菴、長福寺、福寿菴の四坊があった。寺は、天竜寺の獨芳清曇和尚を開基として繁栄したが、元龜年間に耶穌の徒のために灰燼に帰したという。このとき、仏舍利・阿弥陀尊像は灰燼を免れ、富来家に伝えられ、誕生仏一軀は某人が尊崇しているとある(『丹生村史』)。

また、宝永6年(1709)に富来津右衛門実隆によって記された雲鶴山大會寺妙紫庵仏舍利縁起によれば、大會寺(大恵寺)の霊地の広さは、三段余畝で東に鶴山があり、南は27間(48.6m)にわたって、一丈(3m)の土手が築かれていた。西の長さは、47間(88.6m)あり、横18間(32.4m)は大竹藪であり、その外に川があった。北は、18間(32.4m)、高さ2間(3.6m)の築山・花畠があり、その内は屏であった。

南に大門があり、本堂は南向き、北南に内陣・外陣・後殿があり、合わせて10間(18m)、東西は縁とともに12間(21.6m)、畳敷は160枚敷で、本尊は、阿弥陀・観音・勢至菩薩の三尊であった。大門を入ると、右に五重塔舍利塔があり、左に鐘撞堂、5間4面の大仏釈迦堂があった。寺領は、鶴見村・鉄輪・石垣別府辺の所々にあり、門前・門外には、二老清香菴、徳禅坊慈氏菴があった。開山から372年を経た元龜3年(1572)に切支丹のため、本堂伽藍が焼失したが、阿弥陀如来像、黄金の舍利塔、観音菩薩・勢至菩薩は、妙紫菴に移した。これによって、大會寺の宝物は妙紫菴(妙秋庵と同じか)の家督富来氏に相続されることになった。

図版17：大恵寺石碑銘



同上 碑文

延宝8年(1680)に、大門の敷石、南の27間の土手、古木の松などが掘り崩され、また、久所村の庄左衛門が西の47間の大竹山の土手を崩して新畠とし、敷石・焼瓦などを川に投棄した。鬼瓦銘文には、「文明庚寅稔三月日」(文明2年、1470)とあった(以上『丹生村史』)。

これら地元へ伝えられた二つの史料を元に現地を調査を行うことにした。地元史料では、大恵寺の境内は、本堂のある字大恵寺の区画に本堂、五重塔(舍利塔)、鐘撞堂、釈迦堂があり、南の門前に清湖庵、北の門外には、地紫庵という構内坊があったと記されている。現在、シイコウの通称地名は字大恵寺の中に残り、北側の地紫庵は文禄検地帳の「ちし」の地名に当たると考えられるが、現在はその名は確かめられない。しかし、検地帳の記載からすると、門前から移ってきた三浦彰夫氏宅の南の水田・畠区画がそれに当たるとみられる。

境内の四坊のうち、梅林庵、妙秋庵、長福寺は、下久所の部落の中に地名や屋号としてその跡が残る。梅林庵は、屋号梅林、富来伝家とその本家(空き家)をいい、妙秋庵は、この村の庄屋を務めた富来家の屋敷にあった。庄屋を務めた富来本家は富来力氏のとき家を離れ、その子息富来隆氏(元大分大学教授)は家に戻らず、現在分家の富来和徳氏の家となっている(図版21)。

長福寺は下久所の東の端の字名であり、大恵寺本堂から東北へ350mほどの尾根上の平地にあった。下久所の天満社には、八幡社が合祀されているが、この八幡社は元は長福寺にあったという。また、西の宮の前田家には、明治に天満社に合祀した恵比寿社の石祠とともに五輪塔や無縫塔が置かれている。無縫塔は室町期のもものとみられ、前田家が耕作している長福寺の畠からもってきた可能性が高い。

福寿庵の字は、大恵寺本堂から西北へ300mほどの三世尾の台地の下に位置している。平成16年からの大分市教育委員会の発掘で、古代の建物跡と中世の寺院跡と思われる遺構(第4地点)が検出され、中世の遺構には、小皿と銭を埋めた地鎮祭の跡と思われる遺構が発見された。地鎮祭の時期は15世紀後半ともいわれるが、建物跡はその少し前の15世紀中葉には存在しており、大恵寺建立の時期を確定するのに重要な遺跡となっている。

福寿庵跡の上の台地はその南側に堀の内の字を残し、台地の西下の宗角寺から大恵寺を結ぶライン上には、古市、門前、松原の字が残る。ここには、明治大正のころまで、家が10軒以上あり、集落を形成していた。

門前には、吉田氏が管理する一間四方の堂宇(釈迦堂)があり、大恵寺の石碑にいう誕生仏が安置され朝夕礼拝し、4月8日には花祭りを行ってきた。しかし、吉田氏が明治の始めに福岡に転出する際に隣の富来新平宅にこれを託し、新平は灌仏祭を怠りなくしてきたが、のち亡失したという(『丹生村史』)。富来新平の子孫になる富来光雄氏の妻の話によれば、一夜の宿を貸した僧侶が誕生仏を持ち去り、その後小さな誕生仏が置かれていたという。現在はその誕生仏を祀っている。



図版18：無縫塔



図版19：誕生仏

## ② 大恵寺の創建の謎

『豊後国志』によれば、嘉慶元年（1387）に大友親著が「玉菴居士」と号して、府内に「天貌山大慧寺」を創建し、開祖として獨芳清曇を招いたが、後に寺を海部郡丹生に移した。これにより、大慧寺は府内と丹生に併存することになったが、明応2年（1493）に大友義右が修飾を加え、南禅才伯禪師を住持として、大智寺と改めたという。

しかし、当時の古文書では、府内大智寺はその建立以来大智寺を称していたことは間違いない。獨芳清曇が万寿寺住持となったのは応安6年（1373）のことであり、その後、「大慧寺」を開いたことになる。年未詳であるが、3月10日付の獨芳清曇書状では、清曇は、田原一族が大智寺領として武蔵郷内得永以下の所々済物御公事を寄進したことに感謝している（入江文書、笠和郷88）。この史料から、府内「大慧寺」ははじめから大智寺と称していたとみられる。明德元年（1390）には、清曇は他界するが、その永の別れに際し、遺書を書き、袈裟一条を「大檀那玉菴居士」（大友親著）に譲っており、親著が若くから禪に興味をもち、清曇に帰依し、「玉菴居士」を号していたことがわかる。

これらの事実から、獨芳清曇が玉菴居士（大友親著）を檀那として府内大智寺を開いたことは間違いないが、獨芳清曇は開山の3年後には他界しており、丹生の大慧寺を獨芳清曇が府内から移し創建したとする『豊後国志』の説は成り立たない。



図版20：親著墓



図版 21

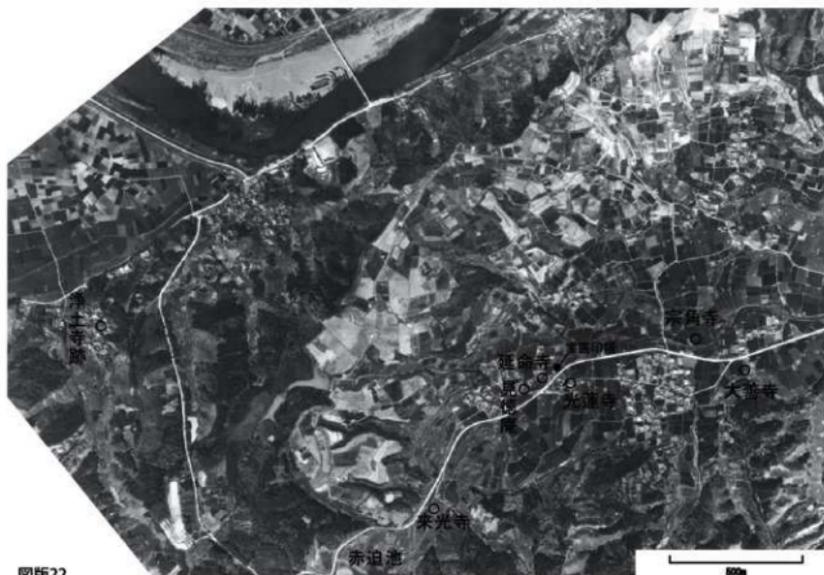
それでは、丹生の「大恵寺」は、いつ建立されたのであろうか。「松野大友系図」によれば、応永25年（1418）に親世から大友家の家督を受け継ぎ、応永年中に海部郡久所村の野地山に伽藍を建て、山号を雲鶴山、寺号を大恵寺と称したという。

また、本堂には、阿弥陀如来が安置され、五重塔には、舍利塔が納められていたというが、「松野大友系図」では、大友能直所持の承久4年（1222）3月に刻まれた舍利塔（仏舍利三粒入）と阿弥陀像（長1尺8寸）を寺の什物として五層塔を営み、ここに安置したという。雲鶴山大會寺妙葉庵仏舍利縁起では、寺の始まりを建久9年（1198）に置いており、大恵寺の前身の寺院が存在していたことを暗示させている。

大友初代の能直の時代、いわゆる阿弥陀の教えを説く宗派が盛んであり、大友家には能直やその妻尼深妙をはじめ、阿弥陀信仰に傾倒する人が多かった。大恵寺は禅宗の一般寺院のように本堂に釈迦如来を安置するのではなく、阿弥陀三尊を安置している。その意味で、大恵寺の前身の寺院として阿弥陀系の寺院があり、大友親著は初代大友能直の関係したこの浄土系寺院を後に禅宗に改宗し、大恵寺ができたと推測される。丹生・丹川地区には、大恵寺の塔頭6箇所以外にも延命寺、光蓮寺、来光寺、宗角寺、見徳庵、大善寺、誓願寺、堂銘寺など廃寺になった寺が8箇所もある。宮内地区にも、浄土寺、福浄寺などの2箇所の寺院地名と九六位山の寺院がある。丹生郷内にも、もともとかなりの規模をもった天台系もしくは、浄土系の寺院が存在していたのではなかろうか。

### ③ 浄土寺と大恵寺

2008年の暮の最後の調査において、丹川地区の南端の延命寺の集落の下で笠が壊れた宝篋印塔を確認した。塔身に四方仏を彫りこみ、正確な割り付けで作られた塔は石造物の宝庫大分県でも秀逸のものである。時期は鎌倉期から南北朝期のものであろう。その塔の脇に銘文の彫られた石造物の破片が置かれていた。銘文には「貞〇



図版22

(治)丁未七月念二□(日)とあった。最初は宝篋印塔の一部とも考えたが、本学の大学院後期博士課程の三谷敏平氏の指摘で、八角形の無縫塔の竿一部であることが判明した。それは、宝陀寺の<sup>ごみだてつ</sup>悟菴智徹の無縫塔の竿の形状と大きさは同一といえるものであった。特に蓮華座の突起を一面おきにつけた特徴とその蓮華座の形状はまったく同じであった。しかも、注目すべきは、そこに刻まれた銘文の年月日は悟菴智徹の遷化の日であった(図版23・24)。これは単なる偶然であろうか。



図版23 延命寺集落下無縫塔竿部断片



図版24 宝陀寺悟菴智徹の無縫塔竿部

延命寺の集落の隣は浄土寺の集落である。この集落には、かつて臨濟宗寺院浄土寺があった。この寺は、浄土寺集落の入口、天満社の向いの村井家のあたりにあったといわれているが、現在はまったく痕跡もとどめていない。ただ、その鐘銘は『東海一瀛集』(中蔵円月の詩文集)に収録されている。失われた梵鐘は五山の名僧で府内万寿寺、鎌倉万寿寺、京都万寿寺、建仁寺、等持寺、龍興寺などの住持を務めた名僧中蔵円月(1300～1375)の作であった(丹生荘8)。

中蔵円月は、鎌倉末期の正中元年(1324)、豊後に来訪し、禪に熱心な大友貞宗(直菴具簡)を「吉津亀」(杵築)の館に訪ね、万寿寺で貞宗の師でもある<sup>ねんたけしよつ</sup>關提正具に会っている。貞宗が元弘3年(1333)12月3日、京都で死去したときもこれに従っていた。以後も豊後に幾度か来訪し、暦応2年(1339)には、大友氏時の招きで、大友氏が地頭職をもつ上野国利根荘の吉祥寺の開山和尚となった。この寺の長老即宗は大友貞宗の子息、氏時の兄弟であった。さらに、文和2年(1353)には府内の蔭山万寿寺の住持となるなど大友氏ときわめて深い関係をもつ僧僧であった(『大分歴史事典』P425、『大分県史』中世編1六章 小泊立矢)。

丹生荘浄土寺鐘銘によれば、中蔵円月は、国東田原の寶陀寺の鐘銘を作った後、浄土寺の鐘銘を求められ、これを次のような理由から作ったとある。

余既作寶陀寺鐘銘、叙事不備、後浄土寺亦求焉、辞不可、田原之寶陀、丹生之浄土、不廻同於豊城為隣村、寔為兄弟所建也、東叟日公之於浄土、悟菴徹公之寶陀、皆開山創業者也、二公者為自開族弟、且於法門亦同業、自開有斯二弟、猶如優棲頗蝶之有伽耶那提、三迦葉波、偕仏之徒也、自開諱正聰、為實際鼻祖也、三師偕為弘印之徒、故予於蔭山、以三迦葉比之、自開住世不久可惜、二師無恙、振起其道也必矣、鐘者為器也堅、宣勸功德傳之永々、且夫三師者、皆重淵沈黙、待扣而発、則洪韻驚群、亦鐘是類也、故予不辭、敢為銘、銘曰、有扣惟應、厥鳴孔揚、聲聞于天、殷兮嗶兮、

この鐘の年季は不明であるが、寶陀寺は観応2年(1351)に悟菴智徹を開山として開かれる。梵鐘は開山の時期に造られた可能性が高い。とすれば、浄土寺の鐘の鑄造はそれより後の時期になる。中蔵円月が銘を引き受けた理由を要約すると、田原の寶陀寺と丹生の浄土寺は府内の寺院ではなく周辺の寺である。寔に兄弟として建立した<sup>みづのうらふ</sup>東叟正日は浄土寺において、悟菴智徹は寶陀寺において、開山創業者である。二人は實際寺(安岐)を開いた<sup>いんげん</sup>自開正聰の族弟であり、法門においての同業である。三人は釈迦の16人の弟子の一人摩訶迦葉波のように釈迦入滅後の仏教指導者である。故に、私は万寿寺においてこの三人を比べれば、自開は長生きできず惜しいが(自開は貞和5年・1349に死去)、二人は、必ずや恙無くその道を振るい起こすであろうと述べて、寶陀寺

の鐘銘を作ったからには浄土寺の鐘銘は断れないと記している。東叟正日と悟菴智徹は、「為兄弟所建也」とか、自開正聰の「族弟」と記すことから、三人は、一族ないし、本当の兄弟と考えられる。『豊鐘善鳴録』では、悟菴も自開も豊後万寿寺を開いた直翁智留の弟子と共に近江の人といわれている。

その意味で、浄土寺の隣接地の延命寺（浄土寺の塔頭力）の地内において、悟菴智徹の無縫塔の一部と思われる供養の墓石を発見した意義は大きい。おそらく、悟菴智徹の死後、寶陀寺の墓塔と同じものが浄土寺側にも造られたと考えられる。これは兄弟と思われる東叟正日自身がその関係者による造立ではなからうか。

国東の悟菴智徹は、万寿寺の首座を務める一方（文和4年6月18日付万寿寺首座智徹等連署書状 / 大友文書大分県史料26）、寶陀寺を拠点に、盛福寺（大田村）、徳勝寺（宇佐市）、吉弘の永楽寺（国東市）、真玉の真玉寺（豊後高田市）などを開き、この地域の臨済宗教線の展開に大きな役割を果たした（『宇佐国東の寺院と文化財』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1990年、『大分歴史事典』p 433 1990年）。一方、東叟正日は實際寺の自開正聰の跡を継ぎ（『豊鐘善鳴録』）周辺への教線展開を図ったと考えられるが、その業績はほとんど伝わっていない。しかし、中展円月が期待したように、浄土寺がこの地域の臨済宗の一大拠点として創建されたことが明らかである。寶陀寺と府内大智寺は十刹に次ぐ諸山の寺院に列したが、浄土寺は諸山に列することなく、15世紀以降は、その名を見ることができなくなる。それに代わるように丹生郷の大恵寺（大慧寺）が登場してくる。

大友宗家領である丹生郷では、浄土寺において禅宗がはじまり、それを受けて大恵寺が創建されたのである。

これまでの考察で、獨芳清曇によって開山された府内の大智寺とは別に丹生の大恵寺が創建されたことは明確になった。しかし、大智寺のように初期の史料が大恵寺にはない。大恵寺の存在を示す、最古の記録は、次の天文19年（1550）3月28日の大友義鎮安堵状である。

大恵寺住持職之事、任 到明寺殿御判之旨、不可在相違候、殊一宮職之事、是又可全事務状、如件、  
天文十九年三月廿八日 源 義鎮 在判

堅藤喝食

この史料で大友義鎮は、到明寺殿すなわち義隆の安堵に任せて大恵寺の住持職と一宮職を堅藤喝食に安堵しており、大友家の家督がこの寺院の住持職を安堵する寺院として機能していたことがわかる。堅藤喝食がどのような人物かは明らかではないが、「喝食」とは、禅宗寺院で学問のために寺に預けられた未得度の有髮の稚児、食事の給仕に当たる役割をする者である。大友氏の一門氏や有力氏族の子弟の可能性が高い。

ここで問題となるのが、大恵寺の住持職とセットになっている一宮職である。一宮職とは何であろうか。この



図版25 宮河内火振の阿蘇神社

地域のご宮は丹生荘の鎮守である丹生大明神（佐野の丹生原）のことを指す。大恵寺境内の中には、塔頭の長福寺に八幡社、西の宮に恵比寿、古政所に天満社が祀られていた。これらは大恵寺の境内社というべきものである。当初、これらを一宮として大恵寺住持が祭祀を執行していたのではないかと考えた。しかし、2008年の最後の補足調査で、宮河内の阿蘇神社（火振神社）を一宮と称し、三宮は毛井、または屋山にあったことが判明した。丹生荘では阿蘇神社を一宮、丹生神社を二宮、毛井の毛井社または屋山の日枝神社を三宮と称したのである。

すでに述べてきたように、宮河内には、南北朝期に東叟正日が府内万寿寺の末寺として浄土寺を開いた。この地は、府内から大野川を渡り、山を越えれば白杵方面、南に下れば、戸次方面と古来より交通上の要衝であった。大野川の渡しは毛井と宮河内の間を渡った。古代の駅路もこのあたりを通り、丹生駅の一つの推定地でもある。浄土寺もこのような要衝の場所に建立されたのである。おそらく、田原の寶院寺が田染へ越える峠の入口にあった清水寺を前身の寺院としたように、浄土寺も白杵へ越える入口にあった前身の寺院を禪宗化して建てられた可能性が高い。本来、丹生荘鎮守である丹生神社が一宮にならずに、宮河内の阿蘇神社が一宮に編成されたのは、ここが大夫氏の豊後支配にとってもいかに重要拠点であったかを端的に示している。丹生神社の由来縁起によれば、阿蘇神社は、応永元年（1394）に大夫親世によって勧請されたといわれる。親世の時期は、府内の整備や荘郷の政所体制が始まった時期であり、大夫直轄領でも支配体制の再編が進められたと考えられる。

大夫氏は、ここを拠点にこの地域の臨濟禪の展開を企図したのであろう。丹川地区が大恵寺の境内であったように、もともと宮河内地区も浄土寺の境内地であったと思われる。一宮阿蘇社も本来、浄土寺の隣の阿蘇入の集落にあったといわれ、浄土寺と一宮は一体的なものであったとみられる。しかし、残念ながら中蔵月月の期待のように浄土寺は発展しなかったようである。そのため、本来、浄土寺住持職に付せられても不思議ではない「一宮職」が大恵寺住持職に付せられるようになったのではなからうか。

文禄2年（1593）の丹生荘検地帳によれば、大恵寺やその塔頭の妙秋庵は名請人として見え、大恵寺は、「みうけん」「くわ原」「みわノか道」「のりノ平」「のち」「どうあんてん」「老屋」「大恵寺」などの場所に、妙秋庵は、「いのしり」「にしみや」「平田」「のち」「ひわし」「岡ノ下」などの場所に水田・畑を所持しており、元龜3年（1572）のキリシタンによる襲撃の火災以後も大恵寺とその塔頭妙秋庵はしばらく機能していた。しかし、この検地帳の宮河内村に分を見ても、「上土寺」「しょうとうし」（浄土寺カ）の地名はあるが、名請人としての浄土寺の名はなくすでに寺として機能していた形跡はない。

天正12年（1584）ころの12月8日付の浦上宗鑑書状では、「大善寺・浄土寺」への日差の公米（大夫宗家の直轄領の年貢）を日出辻間の辻間統直へ津出し、そこから府内沖浜へ運送することを辻間統直に依頼している。この浄土寺が丹生の浄土寺とは断言できないが、大夫氏の管轄下にある寺院で、大善寺の地名も丹川にあることから、その可能性は高い。従って、史料に見えないからといって、直に浄土寺が早くに廃寺になったとは断言できない。

一方、戦国時代、府内生石に文龜元年（1501）に浄土宗の浄土寺が開かれている。この寺は、前年の明応9年（1500）に満善（1526年に筑後善導寺の14世となる）が遠江国から来訪し、毛井に開いたが、一年で生石に移ったとある（『蓮門精舎日記』/『大分県の地名』）。毛井は宮河内の隣村で宮河内の中にも「中毛井」の地名があることから、この寺は、宮河内の浄土寺の場所に開いた寺院であると思われる。とすれば、すでに禪寺としての浄土寺は廃絶していたと考えられ、浦上宗鑑書状に見える「浄土寺」は生石の浄土寺とみたほうがよいであろう。

これはあくまでも推測となるが、東叟正日によって開山された浄土寺は早くに衰退し、一旦、浄土宗の浄土寺として再興されたが、それはわずか1年で生石に移転し、文禄2年までには完全に廃寺になったといえる。しかし、寺は存続していたとはいえ、堅藤町食に大恵寺の住持職と一宮職がセットで安堵されたことを考えると、この地域における臨濟禪の拠点として機能はかなり早くに大恵寺に移っていたといえる。その大恵寺も文禄2年まで命脈を保ったが、江戸時代に入ると、寺の機能を停止し、大恵寺の什物を引き継いだ妙秋庵も庄屋屋敷となった。おそらく、庄屋富来一族は大恵寺の住持の流れの可能性が高い。

#### ④ 大恵寺の創建年代について

ここで、最初の問いかけに戻ろう。大恵寺は、「松野大友系図」では、大友親著によって応永年中に創建されたといわれるが、果たして本当であろうか。応永33年(1426)、子息孝親の起した三角畠の乱で死去し、久所村番匠給に墳墓が営まれたという。戒名は「大慧寺殿玉菴道瑛大禪定門神儀」と付けられた。しかし、永享12年(1440)に出された文書には、「道瑛・持直・親重以下之殞党等」「道瑛・持直・親重、其外殞党等」とあり、永享7年(1435)から8年(36)にかけて戦われた姫岳合戦の殞党として幕府から追討の命が出されている大友持直党として道瑛の名が見える。道瑛は親著の法名であり、少なくとも永享12年までは生存していたことは確かである(志賀文書、阿蘇文書)。姫岳合戦は、幕府に反旗を翻した大友持直と幕府側についた親著の子息親綱、持直の弟親隆の戦いである。このときの親著の動向は明らかでないが、永享12年の文書から見ると、何らかの理由で子息親綱と対立し、持直方についたと考えられ、持直と幕府の対立以後、この渦中に巻き込まれたことは確かである。

したがって、もし、親著自身が大恵寺を創建したとすれば、豊後国中が大混乱となっている姫岳合戦ころとは考えられない。その可能性が高いのは、応永25年の家督相続の前とその後である。家督相続より前に想定すると、親著の館の場所が問題となっている。嘉慶から明徳のころは清曇の弟子として府内に在住していたことは確実であるが、後でも述べるが、応永8年以降は親世の下で、豊後・筑後の守護権を行使しており、府内にいたことは間違い。この間に、丹生の久所の地に大恵寺を設けたということも考えられないわけではないが、その可能性は低い。

もう一つは、家督相続以降の創建の可能性であるが、大友家家督として府内に居住している間は、大智寺でことは足りていたはずである。応永30年(1423)に親著は従兄弟の持直に守護権を渡し、応永32年には出家し道瑛と称し引退する。この家督の相続への不満が子息孝親の三角畠の乱にあったといわれ、もともと、蜀芳清曇に帰依し、玉菴居士の号を得ていたほどの親著としては家督を譲った後、厭世感を強め、終の棲家として大恵寺を創建・整備したという考えである。この仮説からすると、大恵寺の創建期は、応永32年(1425)から永享6年(1434)ころとみられ、松野大友系図の応永年中を信ずれば、応永32年(1425)から35年(1428)のころに絞られるのではなからうか。

さらに、もう一つは、親著の死後、その墓所として建立されたという可能性である。親著(道瑛)は永享12年(1440)まで生きており、その直後に死去したと考えられる。大慧寺殿という位牌名から見ても後継者が姫岳合戦以降の領国の混乱が鎮定された後、建立されたとする考えである。

姫岳合戦は、白杵を中心とする大友持直・親著勢力と府内を中心とする大友親綱・親隆勢力の対立となった。永享8年と推定される閏5月19日の室町幕府上使景臨首座書状によれば、白杵を攻めるため、大内氏の援軍が石州方面から甲冑を付けた兵が200名余到着し、府内万寿寺には、甲冑を付けた兵400名余が入り、敵が千名で攻めても大丈夫だと述べている(田北要太郎文書 大分県史料25)。この戦いでは、府内万寿寺が大友親綱軍の本陣となり、禪宗僧が連絡役として重要な役割を演じていることがわかる。当然、万寿寺の末寺として開かれた浄土寺は白杵と府内の境界に位置し、交通・軍事の要衝として両勢力の争奪の場所となったに違いない。浄土寺は、この戦いで寺院に大きな打撃を被った可能性が高いと考えられる。

これに対して、大恵寺は姫岳合戦後、1440年代以降に建立され、この段階で、この地域の禪宗寺院の拠点寺院であった浄土寺の機能を吸収したとする考えである。今回の圃場整備に伴う発掘調査で、大恵寺の塔頭の一つといわれる福寿庵跡で、地鎮祭のために使用されたと思われる大量の土器は15世紀の後半ものと判断された。また、建物跡は15世紀半ば～16世紀前半に何回か建替が行われたことが確認された。現在のところ三番目の創建期説がもっとも妥当性をもつとも思われる。

#### 4 大友親著の人物像

大友親著は大友氏継の子息であり、その母は大内義弘の娘であった。叔父親世の養子となり、応永25年(1418)の親世の死去により、大友家の家督を相続したという。既に述べたように、親著は、嘉慶元年(1387)は、万寿寺の住持として府内にいた獨芳清曇和尚を招いて、大智寺を府内に創建し、深く清曇和尚に帰依し、玉菴居士の号を与えられている。清曇と親著の関係は並々ならぬものであり、死去に先立って玉菴居士すなわち大友親著に次のような遺書を書き残している(大智寺文書)。

老僧春末患病、聖藥無効、遠別在近、仍通其意、師資義教、莫忘外護、袈裟一條、以可 充家寶也、不宜、  
明德元年八月六日  
興聖清曇 (花押)

大檀那玉菴居士座前

この遺書では、病を受け、回復の見込みがないと悟った清曇は自分と心を通わせ、師弟関係となった親著の外護が忘れられないとして、袈裟一条を形見として送るから家宝としなさいと記している。現在、大智寺には、獨芳清曇の頂相と開基大友親著の画像が保管されているが、親著の姿は若い青年の姿の像と思われる。清曇に帰依したときの親著の年齢は不明であるが、母が大内義弘(1356～99)の娘とすれば、どんなに母の結婚が早くても十代半ばの若い青年である。母が義弘の娘であるかも含め検討の余地はあるが、老僧と若い青年の絆は特別なものであったといえる。獨芳清曇は父氏継のときに府内万寿寺に招かれ、氏継も清曇に深く帰依し、法名を「獨芳清鏡」と名乗っている。父子ともに清曇の檀那として清曇を厚くもてなし、これが清曇の深い絆となっていたと考えられる。後に親著が丹生に大慧寺を創建する孟蘭もすべてここにあったとみてよいだろう。

獨芳清曇の死後、応永7年ころまでの親著の活動は不明であるが、応永8年(1401)10月17日、同9年(1402)12月18日、同11年(1404)12月14日、同13年(1406)12月2日、同14年(1407)2月13日など筑後方面・豊後国内の所領の安堵を行っており、『編年大友史料』を編纂した田北学は、家督譲与はすでに応永8年ころにあったことを指摘している。

応永19年(1412)の付け年号をもつ12月15日の大友親著書状では、由原宮の社僧の訴えを裁許しているが、その中で、「小津留代官職事者、屋形御意として仰付候」とあり、守護の親著とは別に屋形(家督)の親世の御意が問題となっていることが明らかである(由原文書)。すでに応永8年ころから大友親世は後継者として筑後・豊後の守護権を実質的に親著に委ねていたと考えられるが、北条氏の執権と得宗の関係のように守護権と

図版 26：親著肖像画(大分市大智寺所蔵)

家督権は分離されていたとみるべきであろう。幕府は応永23年(1416)になってようやく公式に豊後・筑後の守護職を大友親著に認めた。さらに、翌年大友親著の申請で本領・新恩の所々を安堵し、応永25年(1418)の親世の他界によって、家督はようやく親著の手に入ることになった。

家督を完全に手にした親著の目立った事蹟としては、大内盛見による宇佐宮造営に協力したことである。応永27年(1420)、宇佐宮の三殿とその東脇殿と東湯殿の造進を申し出て、律僧五室真助、木村親公・田原藏人親幸、このほか浦部(国東・速見郡)の人々を動員してこの造営に当たられた(到津文書)。このことから親著の時代、基本的な内家との関係は良好であったことが窺える。また、応永27年10月と応永28年正月の二度、親著は阿蘇惟郷と一味同心の盟約を結んであり、肥後国とも安定的関係を築くなど、周辺の国とは融和政策を行った。

応永30年(1423)、親著は、幕府の命で家督を持直に譲り、7月5日、足利義持は大友持直を豊後・筑後の守護職に補任する(大友家文書録所収文書)。持直は大内盛見の九州進出に警戒し、大友家の独自路線を進める強攻派であり、この家督譲与には動揺が走った。応永30年ころの田北藏人・田北六郎親増宛の大友親著書状には、この相続に関係した在地の動揺が見えている。これに対して、親著は丁寧に書状を認め、「府出すると聞いて待っていたが、遅れているので大変心配している。聞くところによると、いろいろな雑説が飛び交っている。今のような情勢では雑説もやむを得ないが、以前とはかわらなくあなたをないがしろにすることはない。是非府出して対面したい。由原・松坂八幡大菩薩に誓って、等閑することはない。御身といい、御知行分といい、おろそかにすることはない。このことは持直方にも書状で申してあるので、心配はいらない」というような趣旨で田北家の二人の動揺を抑えている。また、同日付けの書状が持直から田北藏人・同六郎に出され、「一切等閑の儀あるべからず候」と念押しをしている。この書状からも、親著が気配りの人であることが十分に窺える。

応永30年(1423)には守護職を持直に譲ったが、応永32年(1425)ころまで、親著は国人への安堵を行っており、家督権はまだ親著の手にあったと思われる。年未詳であるが、応永32年ころの文書と思われる11月18日付の野上大和守宛預状では、道瑛の法名で文書を発給している(大友家文書録所収文書)。しかし、結果として、この動揺は長子孝親の三角畠の乱に発展するのである。親著は、この乱に巻き込まれ、孝親の館の近い古国府で討たれたという俗説が生まれた。これも三角畠の乱以降は、しばらく、その動向がわからないところから生まれたのであろう。百鬼夜行の政界で生きることが親著には向いてはいなかったと思われ、若き日に清量が開眼してくれた禪の世界を目指し、応永32年ころには出家したと思われる。そのころ、親著は、隠棲地として丹生の地に趣いた可能性が高い。

しかし、情勢はこのような隠遁生活を長く許してはくれなかった。大内盛見は宇佐造営にかこつけて豊前に在国することが頻繁となり、永享元年(1429)には、足利義教から筑前の幕府料所代官に任命され、筑後への進出を本格化させた。このことが大友持直との全面対決となり、永享3年(1431)6月、筑前国伊都郡において、大内盛見と大友持直は衝突。盛見戦死という事態になった。これに対して、幕府は永享5年、追討軍を派遣し、持直軍を破り、豊後国守護に大友親綱を補任したのである。この際、持直は国を追われ、親著入道道瑛も持直と行動を共にした。その年の暮れ、大友持直は国衆の支持もあって豊後国に帰国し、道瑛も帰国した。これに対して、親綱は豊前に没落し、父子敵対ということになった(『満濟准后日記』)。

永享7年(1435)には、持直方は白杵の南の姫岳に籠もり、これを幕府軍が攻撃するが、豊後国衆の多くが、持直方に付いたこともあり、永享8年(1436)までこれを攻め落とすことはできなかった。しかも、持直・道瑛は姫岳を逃れ、永享12年(1440)にも幕府は持直・道瑛・親重の追討を九州の国人に命じている(阿蘇文書・志賀文書)。

これ以降、道瑛の動向は知られないが、すでにかかなり高齢となっており、永享12年ころに亡くなったと考えられる。

大友親著は父子対立のまま、豊後以外の場所で亡くなったと思われるが、親著の遺骸がいつ久所に葬られたかは不明である。父と対立した親綱は永享11年(1439)に家督を持直の弟親隆に譲り、さらに、文安元年(1444)には、突如親隆は娘を妻とすることを条件に幕府に抵抗してきた親重(親繁)に大友家の家督を譲った。そこには、

永享の乱による影響があったと考えられる。永享元年、足利義教が赤松満祐によって殺害され、大内持世もそれに巻き込まれ死亡すると、持直党の勢力が復活し、親隆と親綱は領国を追われ、肥後に避難したようである（志賀文書）。不利に陥った親隆は、娘を親繁に嫁がすことで、妥協を図ったとみられる。ここに、大友家の両統の対立は融和の方向へ踏み出した。したがって、1444年以降、大恵寺の創建もしくは改修・整備もこの親繁の時期に進められる可能性があったことを指摘しておきたい。その意味で、大恵寺址で出土した文明2年の銘のある鬼瓦に注目した。この時期は、家督を譲ってはいないが、親繁が存在している時期であり、大恵寺の改修が行われたことを示唆している。この親繁以後、大友家督の両統対立は終わり、親著の系統が嫡流として繁栄してゆくことになるのである。

## 5 丹生荘と齊藤氏

丹生の佐野には、齊藤重実の館跡といわれる「御屋鋪」という場所がある。齊藤氏は大友家代々の重臣であり、その本拠地が丹生荘であった。「御屋鋪」の近く、丹生原には、丹生荘の鎮守丹生大明神があるが、この宮は二ノ宮と呼ばれている。社殿では、建久7年（1196）に大友能直が豊後下向の折、佐井郷大在の沖で大風に遭い船が沈没するところを丹生大明神の霊異によって救われ、そのことに感謝し、建久8年に社殿を造営したという。近世から近代は、宮は丹生にとどまらず、大在、小佐井、宮河内、種具、高田にいたるまで氏子をもつ大社であったという。佐野は条里水田が広がる丹生荘の生産の中心であった。

齊藤美濃守著利は大友親綱の重臣であり、幕府への使者として親隆に豊後国守護、筑前国守護を大内持世とすることを申し入れた人物である（大友家文書録）。かれは、大友持直からも、大友親綱からも所領を預け置かれた人物であり、大友家きっての重臣であり、

「著利」の一字は「親著」の諱の一字を拝領したものであり、親著の代からの重臣であったと思われる。

著利の後は、子息鎮実にその跡職が譲られ、大友親繁の安堵を受け、その所領はさらに繁実、長実へ伝えられた。長実のとき、永正16年（1519）の朽網親満の乱で戦功を挙げ、丹生荘の20貫、大野荘の5貫の地が預け置かれ、丹生荘内にまとまった領地をもち加判衆として大友家の重臣の位置をさらに不動にした。しかも、長実は、津久見美作守、田口藏人、小佐井大和らとともに長子義鎮の側近となった。

天文19年（1550）2月、八郎（入田親誠の嫡腹）の家督擁立を諫めた播磨守長実は小佐井大和とともに義鑑によって斬り殺された。これに危機を察した津久見、田口らが府内の大友館に侵入し、義鑑と八郎とその母を刺殺した。これが二階崩れの変である。義鑑の後継ぎをめぐる混乱であった。義鑑に討ち取られた長実の子息鎮実は大友義鎮の命を受けて、戸次鑑連とともにこの事件の背後にあった入田丹後守親誠を討ち滅ぼした（大友家文書録）。この変の直後の3月15日に義鎮は齊藤鎮実と親父播磨守長実の一跡を安堵した（丹生荘44）。また、3月28日には堅藤喝食に対して、「大恵寺住持職」と「一宮職」を安堵した（丹生荘45）。このことから、この二つの安堵が二階崩れの変の事後処理であったことは明白である。事件の当事者での子息であり、事件の解決の功績のあった齊藤鎮実に直ちに安堵を行い在地の動揺を抑えるねらいがあったと思われる。

しかし、義鑑の側近の肅清はその後も続いた。天文22年閏正月4日、義鑑の側近であった一万田鑑相とそ



図版27 丹生神社

の弟宗像鑑久と高崎一類が、謀反を企てたとして上意で討ち果された。この事件は府内の町を混乱に陥れた（『大分県史』中世編Ⅲ）。同年と推定される閏正月4日の大友義鎮書状では、「丹生庄種々風説申散之由、聞及由候、誠曲事候、如存知其方之事、毛頭無等閑候、諸神八幡茂照覽、彌不可有隔心候、早々至庄内申遣、堅可申被相鎖事、專一候」とあるように、種々の風説が飛び交い、在地に動揺が走ったため、義鎮は鎮実に対して、決してあなたを疎かにしないとして、神かけて隔心がないことを庄内に伝え、事態を鎮めるように専らつとめると述べている（丹生荘46）。大友義鎮の家督相続の混乱はしばらく続いたのである。

齊藤氏と大恵寺（大恵寺）の関係はわからない。住持である堅藤喝食は齊藤氏の一族か他氏であるかはわからないが、すでに述べたように大恵寺は当時、臨済宗浄土寺の機能を吸収し、その住持は丹生荘の一宮の宮河内の阿蘇神社を掌握しており、この寺は、大友宗家の拠点であったとみられ、これもまたこの地域の動揺を抑える措置であったことは間違いない。

齊藤氏は、本拠地としての丹生荘に家臣団を編成していた。生え抜きの在地領主と思われる丹生氏は、被官ではないが、与力として常に齊藤氏とともに戦いに参陣した（丹生荘30・60）。丹生の岡の集落の領主、岡村氏は齊藤氏の被官であり、現在も齊藤氏から与えられた預置き状や名字状を所持している（丹生荘47・48・50）。

## むすびにかえて

丹川地区での圃場整備に伴う調査は、発掘の面でも、文献史料、村落遺跡調査の面でも大分の古代中世の新しい部分を掘り起こした。特にこれまで謎に包まれていた大友時代の臨済禅の実像を解明する大きな手がかりを与えてくれたことは大きな成果であった。大分市市街地では、発掘によって、万寿寺や大友屋敷など、府内の都市構造が明らかにされつつある。今回の最大の成果は、その府内の都市を築いた時期の府内周辺の様相が明らかにされ、大友氏の鎌倉末から室町時代の支配構造が宗教政策の面でも見えてきたことである。

（以上文責飯沼）

〔追記〕本調査には調査当時、別府大学大学院に在籍していた笠岡総一・石倉太介・野村智史・古沢恒平の四氏に協力をいただいた。また、大分市文化財課の五十川雄也・山本哲也の二氏から地図や発掘情報の提供を受けた。記して感謝したい。

## 第18章 大分市丹川地区における圃場整備事業の展開と地域社会

中山 昭剛 (別府大学)

### I はじめに

#### 1. 問題の所在と研究目的

農業の近代化を巡る本格的な動きは、1961(昭和35)年から実施された農業構造改善事業(農構)からといえる。この事業は農業基本法に基づく施策として実施され、圃場整備事業の実行が大きな柱となっていた。

しかし、圃場整備は換言すればこれまでの耕地区画を白紙に戻し、耕地を再配分(換地)するもので、耕作者にとってみれば、再配分された耕地から従前の収益が確保できるかどうかは生活基盤を揺るがす大きな問題となる。石田政昭(1999)は三重県三雲町(当時)のある地区で生じた換地紛争の顛末を取り上げている。このケースでは、換地後の農地への用水不足に対する懸念、水路と農地との位置関係の逆転といった不満が生じた経緯を言及している。その結果、換地委員会は紛糾し、換地委員の全員交代と換地の見直しを図られたが、地域間の遺恨が長期にわたって残り、地域社会に大きな波紋を投げかけたとしている。同様のケースは全国各地で起こったとしても不思議ではあるまい。

一方で、都市近郊農村では圃場整備による農村社会の変質を取り上げた論考も見られる。新井鎮久(1994)は埼玉県内の農業集落を取り上げ、水田基盤整備事業により大型機械が導入され、その結果省力経営が達成されたが、余剰労働力の多くは農業外の産業に流出するなど、農村社会が変容していく経緯を追っている。そして、農業構造改善事業の効果が反映されていないと強調する。また、生井貞行他(1986)は横浜市郊外の農業集落を取り上げ、圃場整備事業は米の生産調整や市街化の進展による耕作放棄や荒地化の対策として実施されたはずであるが、開発ブームにより農地の買収が進み地権者の移動が相次いだため、水利慣行が瓦解するとともに残土廃棄地への転用も進み、農業環境の悪化を招いたと論じている。

以上のように、圃場整備事業(換地)を巡る従来の研究は、換地によって農村社会の秩序と農業環境の悪化を招いたとする視点から論じられたものが多い。また、これらの論考は高度経済成長下における圃場整備事業の状況を分析したもので、当時の世相を背景として問題提起がなされている。

さて、今回取り上げる大分市丹川地区は、正しく今日圃場整備事業が進められている地域で、先行研究で示された論考とは社会背景が大きく異なっている。さらに、今日では圃場整備事業自体が稀な事例と言えよう。したがって、現在の農業を取り巻く環境を背景として、圃場整備が地域社会に与えるインパクトを検討する機会がほとんどないことを鑑みると、今回の調査研究の意義は高いものと言える。

このような背景を鑑み、本研究は現在の農業事情および農業を取り巻く環境のもとで実施されている圃場整備事業について、実施される背景と地域社会に与えるインパクトを明らかにすることを目的とする。研究の方法は、まず、事例地域について全国的に圃場整備が進んでいた1970年当時と現在の状況を比較考察し、圃場整備事業を巡る今日的な課題を提起する。次いで、その課題について検討を加える。

#### 2. 調査地の概要

調査事例地域である大分市丹川地区は大分市中心部から東におよそ13kmに位置する。また、北方におよそ6kmには新産業都市として開発された鶴崎地区が立地する(図1)。

圃場整備事業の対象地区は「野間」「延命寺」「誓願寺」「上久所」「下久所」の5集落となっている。これら集落は農業集落カードによれば農業集落区分はいずれも「都市近郊農村」に区分されている。丹生川によって運ばれた粘土質土壌で育まれた米は「丹川米」と呼ばれ、古くから近在の間では良質の米として知られてきたという。最近10年間の人口・世帯数の推移をみると、人口は45と漸増傾向であるが、世帯数は50戸減少している(表1)。

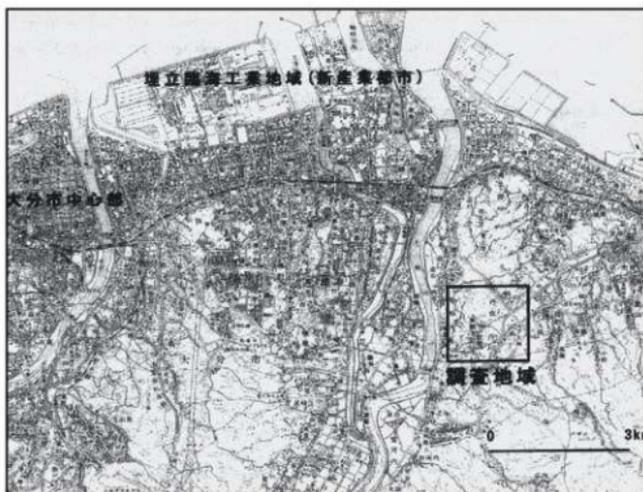


図1 事例調査地位位置図

注) 国土地理院5万分の1地形図「大分」(平成8年部分修正)より作成

表1 丹川地区の世帯数・人口の推移 (1998・2008年)

集落名	項目名	1998年	2008年	増減
野間	世帯数 (戸)	178	138	-40
	人口 (人)	50	52	+2
延命寺	世帯数 (戸)	189	200	+11
	人口 (人)	61	72	+9
上久所	世帯数 (戸)	244	222	-22
	人口 (人)	66	73	+7
下久所	世帯数 (戸)	183	184	+1
	人口 (人)	50	77	+27

(注) 大分市統計書より筆者作成

## II 農業を取り巻く状況の比較— 1970年と2000年—

### 1. 農家の推移

農家の推移をみると、1970年当時はいずれの集落も農家率80%程度以上を占める純農村といえる状況であった。現在の農家数は戸数のおよそ半数を占めるにすぎない(表2)。

次に、農家構成の推移をみていく。4集落共通の傾向としては第1種兼業農家の激減である。1970年には合計44戸(27.0%)存在したが、今日では僅か4戸(0.7%)に過ぎない(表3)。

表2 丹川地区の農家の推移(1970年～2000年)

集落名	項目名	1970年	1980年	1990年	2000年
野間	総戸数(戸)	36	41	45	43
	農家数(戸)(率%)	28(77.8)	23(56.1)	21(46.7)	20(46.5)
延命寺	総戸数(戸)	63	61	63	60
	農家数(戸)(率%)	52(82.5)	45(73.8)	39(61.9)	37(61.7)
上久所	総戸数(戸)	60	60	57	59
	農家数(戸)(率%)	49(81.7)	43(71.7)	27(47.4)	29(49.2)
下久所	総戸数(戸)	37	40	44	48
	農家数(戸)(率%)	34(91.9)	28(70.0)	25(56.8)	20(41.2)

(注) 農業集落カード2000年版より筆者作成/( )は各集落における農家率

表3 集落別農家構成の推移(1970年～2000年)

(戸)

集落名	項目名	1970年	1980年	1990年	2000年
野間	農家数	28	23	21	14
	専業農家	0	2	3	1
	1種兼業	16	6	0	3
	2種兼業	12	15	18	10
延命寺	農家数	52	45	39	25
	専業農家	2	4	6	7
	1種兼業	9	0	1	1
	2種兼業	41	41	32	17
上久所	農家数	49	43	27	14
	専業農家	2	6	3	5
	1種兼業	12	2	3	-
	2種兼業	35	35	21	9
下久所	農家数	34	28	25	13
	専業農家	3	1	5	1
	1種兼業	7	3	3	-
	2種兼業	24	24	17	12

(注) 農業集落カード2000年版より筆者作成/2000年の数値は販売農家数である

第2種兼業農家の農家総数に占める比率は1970年当時の68.7%、総戸数に占める割合も58.3%を占め、世帯の多くは第2種兼業農家が占めていたという状況であった。現在では総農家数に占める割合は45.3%、総戸数に占める割合は22.9%となり、第2種兼業農家は調査地域における標準的な農家タイプとは必ずしも言えない状況下にある。

その反面、1970年当時は4集落合わせて7戸に過ぎなかった専業農家は現在では14戸になっている。しかも4集落平均の農家率が83.5%から49.9%に低下している状況のもとのことである。特に延命寺集落と上久所集落において専業農家が新たに形成されている。

## 2. 農業就業者の推移

農業就業者の推移をみると、各集落男女ともに農業就労者数の激減と高齢化傾向で一致している(表4)。調査地区全体の農業就労者数の推移をみると、1970年当時は男性就業者96名、女性就業者202名であったが、2000年になると男性39名で1970年当時の41%に過ぎず、女性に至っては51名と1/4に激減している。また、野間集落を除く3集落は男性就業者の大半は高齢者が占めている。

表4 集落別集落別農業就労者の年齢構成の推移(1970年～2000年) (人)

集落	年代 年	男				女					
		総数	<39	40-59	60-64	65-	総数	<39	40-59	60-64	65-
野間	1970	20	5	9	2	4	33	10	18	2	3
	1980	17	3	4	—	10	20	6	5	6	3
	1990	8	—	2	—	6	22	4	6	4	8
	2000	11	1	4	—	6	8	—	5	—	3
延命寺	1970	32	12	2	5	13	72	30	26	5	11
	1980	13	—	3	1	9	25	3	15	2	5
	1990	11	1	1	1	8	12	1	4	3	4
	2000	12	1	—	4	7	19	1	4	4	10
上久所	1970	31	15	6	4	6	62	25	28	5	4
	1980	18	2	3	2	11	41	8	14	8	11
	1990	18	1	1	4	10	24	4	9	4	7
	2000	11	1	2	—	8	14	1	3	4	6
下久所	1970	13	2	2	1	8	37	13	12	5	7
	1980	14	3	4	—	7	29	6	14	3	6
	1990	15	3	2	2	8	18	2	3	4	9
	2000	5	—	—	1	4	11	—	2	3	6

(注) 農業集落カード2000年版より筆者作成 / 2000年の数値は販売農家数である

地区全体の農業従業者数の推移をみると、まず1970年から1980年の10年間で男性は96名から62名、女性は204名から115名となっており、とりわけ女性の従業者が大幅に減少している。数字上は男性従業者の方が減少率は低いが、年齢別にみると39歳未満の男性従業者数は1970年の34名から10年後には僅か8名まで減少している。この間の60歳以上の従業者数は64名から62名と大きく変化はしていないことから、この間で担い手が一気に減少したことになる。39歳未満の男性従業者の推移はその後大きく変化していないので、当地区における男性農業従業者の年齢構成はこの期間でほぼ形づくられていたといえよう。つまり、1980年以降の男性農業従業者の減少はそのまま高齢従業者の減少ともいえる。

一方、女性農業従業者は、1970年から1980年の10年間で39歳未満の従業者は78名から23名、40歳～59歳の従業者は84名から48名へとこちらも大幅に減少している。さらにその後の10年間をみると、前者は23名から11名へと後者は48名から22名へと引き続き大幅な減少を示している。

農業従業者の高齢化は女性で深刻な状況といえる。1970年当時は30歳代以下の従業者は77名比率にして38.1%占めていたが、2000年では地区全体で僅か2名に過ぎない。現在では担い手の中心となっている40・50歳代についても、1970年当時には84名41.6%を占めていたのであるが、2000年では14名17.3%に低下している。

男性従業者についても、1970年当時既に兼業化が進行し農外就業の担い手となっていたと考えられるが、それでも30歳代以下の担い手は34名35.4%を数えていた。これに40・50歳代を加えると53名55.2%と半数を占めていたのである。これが2000年になると50歳代以下の担い手は4集落合わせても9名に過ぎない。

農業従業者に占める65歳以上の割合は2000年では男性78.9%で、1970年当時の32.3%と比べるとその比率は2.4倍になっている。女性に至っては51.9%で、これは1970年当時の12.4%と比べるとさらに大幅な上昇を示している。

### 3. 営農の推移

ここでは調査地域の営農状況について1970年当時と比較していきたい。先ず各集落における総耕地面積および田の面積と田を所有する農家数の推移を見ていきたい(表5)。

表5 集落別営農の推移

集落	年	耕地総面積	一戸当面積	田の面積	田の面積率	田所有家数率
野間	1970	1790 a	63.9 a	1570 a	87.7 %	100 %
	2000	1233 a	61.7 a	1102 a	89.4 %	95.0 %
延命寺	1970	3400 a	65.4 a	2210 a	65.0 %	92.3 %
	2000	1539 a	41.6 a	1276 a	82.9 %	97.3 %
上久所	1970	2680 a	54.7 a	2270 a	84.7 %	100 %
	2000	2055 a	70.9 a	1080 a	52.6 %	96.6 %
下久所	1970	2160 a	63.5 a	1880 a	87.0 %	100 %
	2000	970 a	48.5 a	869 a	89.6 %	100 %

2000年版より筆者作成

対象地域内の総農地面積は、1970年の10,030aが2000年には5,797aと約42%減少している。その内田の総面積は7,660aから4,327aと43%の減少を示す。このことから対象地域においては農地の減少は田(稲作)のみならず、農作物全体にわたって減少したものと考えられる。

これを集落別にみていくと、延命寺集落ならびに下久所集落の農地減少が際立っていることがわかる。両集落ともに総農地面積および稲作面積の減少率は1970年の45%程度の水準にまでになっている。これは、一つに農家数の激減が背景にあると思われる。延命寺集落は1970年の104戸が2000年には31戸へと70%減少している。一方下久所集落においても1970年の50戸から2000年には16戸へと激減している。その一方で、延命寺集落は農地面積と農家数の減少が著しい反面、稲作地の減少率は43%にとどまっているのに対して、下久所集落は稲作地の減少率も他と同様54%を示し対照的な状況となっている。

また、上久所集落は耕地の総面積の減少率は76.7%に留まっているのに対して、稲作地の減少率は52%に及ぶ。さらに田(稲作地)の耕地率も84.7%から52.6%となり、田の耕地率が90%近い数値を示す他の集落との違いが際立つ。

こうしてみると、営農環境は1970年当時には各集落の差はほとんど認められなかったといえるが、2000年になると集落ごとに違いが明確に認められるようになっていく。

次に営業規模の変化についてみると、2000年には対象地区全体の自給的規模の農家が40戸におよび総農家数106戸の37.7%を占めている(表6)。

この統計上の自給的規模というのは、1970年当時のデータの0.3a未満の零細農家に該当する。1970年当時の30a未満の農家は30戸で、これは総農家数の15.5%を占めるに過ぎない。このことは営農規模の零細化が急激に進んだことを物語っている。さらに、0.5a未満の農家まで広げてみると、1970年当時は全体で67戸34.2%であったが、2000年には68戸と戸数的には変化していないが、農家数全体が減少しているため、その割合は64.2%とさらに増大する。一方、0.5a以上の農家数は1970年当時は95戸58.3%を占めていたが、2000年には38戸35.8%になっている。また、統計上のことではあるが30年間の農家の減少数はそのまま0.5a以上の農家数の減少ということになる。

表6 営農規模の変化

集落	自給的	-0.3	0.3-0.5	0.5-1.0	1.0-2.0	2.0-5.0	5.0-	農家総数
野間	1970	/	5	5	14	4	-	28
	2000	6	/	4	6	4	-	20
延命寺	1970	/	8	15	22	4	3	52
	2000	12	/	15	8	2	-	37
上久所	1970	/	16	11	15	7	-	49
	2000	15	/	4	6	3	1	29
下久所	1970	/	1	7	23	3	-	34
	2000	7	/	5	6	2	-	20

(注) 農業集落カード2000年版より筆者作成

### Ⅲ 圃場整備事業の展開と農地の変容

#### 1. 圃場整備事業の概要

現在実施されている圃場整備事業は2003（平成16）年から2010（平成22）年までの工期が7年におよぶ事業である。事業は3工区に区分され、事業対象面積は52haであるが施工後の総耕地面積は45haになる予定である。また、対象農家は124戸であるが換地対象となる地権者は176名にのぼる。当事業は当初は担い手農家への農地集積を目指していたが、個人営農の継続を希望する農家が増えたため、30a区画の圃場として整備する面積が全体の60%以上を占める結果となった。費用負担は国負担が50%、大分県負担40%（別件事業を含む）、残り10%を大分市と地元農家が折半する予定である（表7、図2）。

当事業を機にこれまでの個人完結型経営の営農形態を法人組織化することが検討され農作業は法人の作業部会が実施することになった。農作業はオペレーターと呼ばれる担当者が大型機械を導入して行う（図3）。

しかし、作業の移動に際し一般道路を走行することになるため「大型特殊運転免許証」取得者による運転が必要となる。したがって、現時点においては事業完了とともにオペレーター制度が運用され見通しは立っていない。

さらに法人化が運用されると、将来的には農作業はオペレーターが行うため農地所有者は出資金拠出という形で法人を支えることになる。また、法人組織によって農産物の販売も行われるため、その収益から配当金を受け取ることもなる。その一方で、農業の継続を希望すると「個人部門」に区分され、法人から農地を借用するということになる。

表7

	2004年度 H16年度	2005年度 H17年度	2006年度 H18年度	2007年度 H19年度	2008年度 H20年度	2009年度 H21年度	2010年度 H22年度
1工区	14ha 着工	→ 完了 / 作付		→ 完了 / 作付			
2工区	換地	10ha 着工		→ 完了 / 作付			
3工区a			10ha 着工		→ 完了 / 作付		
事業計画	組合設立			利用権設定	法人化		
	土地利用調整			1工区登記 2工区登記			

（注）大分市資料および聞き取り調査より筆者作成

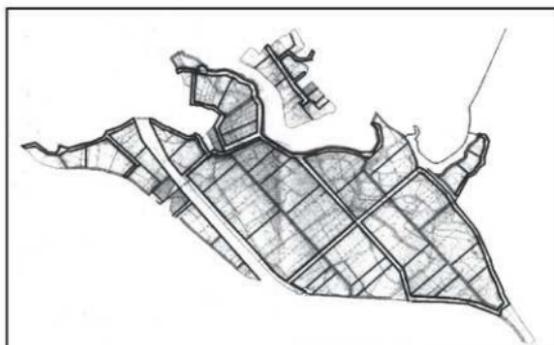


図2 圃場整備事業第1工区概要

注) 大分市資料および聞き取り調査により作成

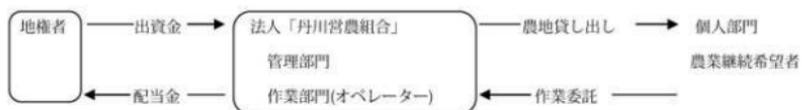


図3 圃場整備後の営農組織

注) 大分市資料および聞き取り調査より筆者作成

## 2. 圃場整備事業当初の農地の状況

丹川地区は前述のとおり古くから「米どころ」として知られており、今日でも『丹川米』は60kg(一俵)あたり1万8,000円程度で取引されているという。この地域は丹川によって運搬されてきた米作に適した粘土(シルト)質の土壌が場所によっては3m以上堆積している。

このように、旧来より品質の高い米を産出してきただけに、担い手の激減と高齢化といった問題を内包しつつも圃場整備も実施せず今日に至った。同様の事業計画はこれまでも何度か持ち上がってきたようであるが、結局いよいよ動きが取れなくなった今日になって事業を受け入れたといえよう。

その一方では、質の高い米づくりを目指して地区外在住者が当地で営農をするケースもみられる。中にはおよそ20年以上も白杵市から通って耕作を展開している農家もある。

その他大分市内の鶴岡地区から2名、松岡地区からも1名が14～15年前から野内を買収して米づくりに取り組んでいるという。こうした地区外在住者の営農規模は50a程度の零細なものが多いが、中には5haにおよぶ大規模営農を展開している例もある(図4)。

この地域の水利体系をみると、「昭和井路」「栗熊井路」「赤迫井路」の3水利系統の受益地域となっている。昭和井路の受益地区の一部は背後の段丘崖の不透水層(砂利)から湧き出る水脈を利用している。しかし、圃場整備完了時には再び井路からのポンプアップで用水を確保する予定である。しかし、事業が着工した2005(平成17)年時点においては水利権の決定の行方および水利組合の対応についてはまだ着手されていなかった。圃場整備事業に伴って水利系統は当然大きな変化を余儀なくさよう。用水の配分と権利、そして水利組織体系に関しては未着手のまま事業が動き出した。

また、圃場整備に伴う法人化は各農家にも大きな影響を与えている。例えば、この事業対象農家は対象農地で使用するための農業用機械類に総額3億円の額を投資してきたという。これは、高度経済成長期以降急速に進んだ兼業化によって、農作業は週末に集中的に実施する必要性が生じたため大型機械の導入が必要となり大きな負担となった。この背景には、地域社会全体で兼業が進んだため、各農家ともに週末に農作業をすることになったため労力と動力を共有し合うことが困難になったことがある。これが、法人化によって機械類は当然法人所有となり、その購入費用も7,000万円程度になるという。その結果、各農家は法人の立ち上げをにらんで機械の更新を見合わせている所が多いという。

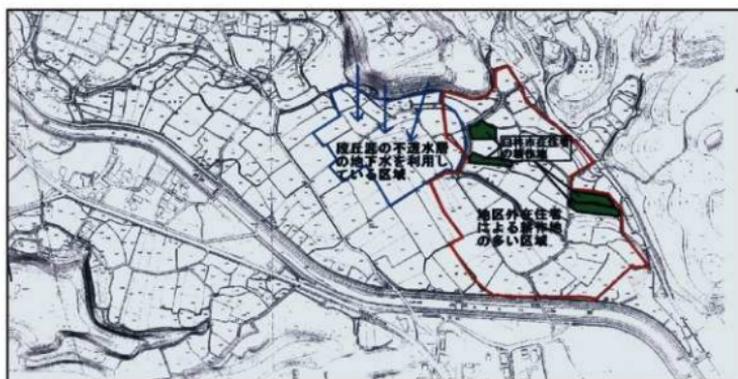


図4 農地の現況図

(注) 現地観察および聞き取り調査より作成

### 3. 圃場整備事業着手時の換地の状況

ここでは、圃場整備事業に伴い地域社会はどのような対応を取ってきたのか、とりわけ換地という農業生産者にとって困難な問題に対してどのような手順を踏んだのであろうか、1工区を事例にみていきたい。

1工区の対象面積22haは事業全体の52%、地権者数も全地権者の43%を占める当事業最大の工区である。1工区内14haは2006年春から作付けが始まっているが、本調査は作付けを半年後に控えた2005年の冬に聞き取り調査を行っている。

表8 1工区完了半年前に担い手予定農家(2005年)

番号	希望営農形態	希望・計画内容	所在地
①	酪農	稲作・飼料作付け用として2haを計画、将来的には3～4haまで規模拡大が可能	地区内
②	水稻・麦	現在は兼業であるが、圃場整備後は専業としたい 営農規模は最低でも12ha程度を希望	地区内
③		希望する営農規模は0.5～1.0ha程度果樹と野菜生産を目指す	地区外 →市内大在地区

(注 大分市農政課資料および換地委員会関係者からの聞き取りにより筆者作成)

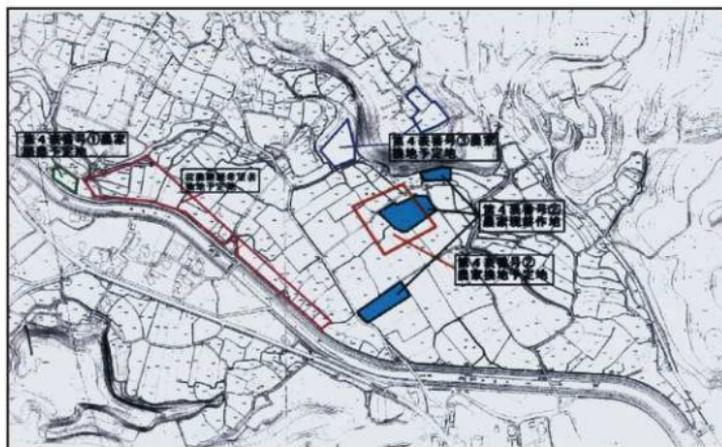


図5 換地の現況図

(注) 現地観察および聞き取り調査より作成

2005年暮れの時点で1工区の圃場で担い手となるのが決まっていたのは3農家であった(表8)。

圃場整備後の担い手の希望者を募るにあたり、換地委員会では工期完了時に60歳未満という年齢制限を設けている。また、法人組織のもとで営農するのか個人経営で実施するのかについても希望調査をしている。①の農家は地区内で酪農を行っていた認定農家であるが、新たに稲と飼料生産を目指して参加を決めたという。30歳代半ばの息子と60歳代前半の父親での営農を予定している。②の農家は当時妻(認定農業者)が花卉栽培を主として行っていたが、56歳(当時)の夫が専業農家となる予定であった。工区内に3か所の耕作地を所有していたが1工区のほぼ中央に換地することが計画されていた(図5)。当初は個人経営を予定していたが、法人組織のもとで行うことも検討していた。③の農家は市内大在地区在住の新規参入希望者である。耕作する農地もほぼ決定していた。

また、整備対象農地の所有者で当面営農の継続を希望する農家に対しては、所有耕地面積に照らし合わせて換地される計画であった。その場所は整備区域の最も外側の区域が予定されていた。これは、営農継続希望者が所有する既存の耕地面積が小規模であることと、いずれの希望者も後継者がいないことによる対する措置であった。

#### IV. 今後の展望～まとめに代えて～

丹川地区圃場整備事業は第1工区が終了し、2006年春から新しい耕地での作付が始まっている。しかし、圃場整備による地域社会の変容を詳しく検証する状況までには至っていない。本格的な検証と分析は今後の課題となる。

当地区は高度経済成長期の申し子ともいえる「新産業都市」として開発された、鶴崎地区の臨海工業地域に近接するため、農業に従事していた地域住民の多くが工業労働力として流出する環境下にあった。よって、元来ならば農業の合理化を目指していち早く圃場整備事業に取り組んでも不思議ではない状況下にあったといえよう。

しかし、「新産業都市」の策定後40年を経た今日、ようやく圃場整備事業に着手することとなった。その背景は『農業従事者の高齢化』という一点にあった。確かに今回の分析によって、農業従事者の高齢化と従事者そのものの減少というよりも壊滅に近い状況が明らかになった。しかし、農業従事者の構成は1970年から1980年の10年間で、今日とほぼ同様の状況ができ上がっていたことも明らかになった。

では、なぜ20年以上も前に今日とほぼ同様の状況が出来上がっていたのにも関わらず、圃場整備事業がなされてこなかったのであろうか。考えられる点として、1970年当時既に専業農家率は低かったことを勘案すると、いわゆる「家族総出」で農作業に取り組んでいたのではないかと考えられる。よって今日になってこれが機能しなくなったことが挙げられよう。今回はその検証にまでは及ばなかったが、聞き取り調査によってこのことを示唆する証言も得ている。家族労働の変容と圃場整備事業の導入の関係性については今後の課題となろう。

次に、対象地域の社会構造の変化も明らかになった。つまり、1970年当時は当地区4集落ともに、営農環境はほぼ同じ状況にあったといえる。しかし、今日になって集落間の営農環境に少しずつ違いが生じてきている。中でも耕地および稲作地(田)面積の推移に集落間の違いが浮き彫りになった。つまり、農業を継続するかしないかという選択の段階において地域内に温度差が生じたともいえよう。これはどうすれば地域社会の在り方までもが大きく変容する要素ともいえる。今後企業的営農手法という全く新しい営農方法を取り入れる地域社会にとっては注視しなければならない要素ともいえよう。

さて、圃場整備事業の施行で換地は最も大きな問題といえる。これまでの圃場整備事業に伴う換地を巡る地域社会の動向については多くの研究がなされ、本稿においても取り上げてきた。当地区においては先行研究で明らかになったような事態に陥っているのか、その検証はやはり今後の課題となる。今回の聞き取り調査でも折りに触れてこの問題についての言及を試みたが、事業自体が現在進行形という状況下においては、地域住民の立場も考慮して深く掘り下げることは出来なかった。この点については、事業が完遂し地域社会がある程度落ち着いてから検証していきたい。加えて、圃場整備前後の農業経済構造の比較についても、事業全体が落ち着きそして生

産性が安定してからの分析となろう。さらに、水利権と水利慣行の行方についても検証しなければならない。この両者は伝統的な農村社会における地域構成の基盤をなしていたものであり、これらが圃場整備事業によってどのような立場に置かれ、また機能的にはどのように変化したのだろうか。

今回の報告は、圃場整備事業にともなう遺跡調査事業の一環として行った調査報告であった。そのため、調査の性格上圃場整備事業の完成前に実施することが求められたため、「圃場整備事業と地域社会」というテーマに照らし合わせると、調査時期がいささか早すぎたことは否めない。以上列挙した課題点の検証・検討は、本来ならばこれからが佳境を迎えるべきものであろう。

今回の調査は、今日実施されている圃場整備事業を対象とする貴重なものといえる。何よりもこれまでの圃場整備事業とは農業・農村を取り巻く環境が大きく異なる状況下における整備事業である。このような貴重な機会を頂いたことに心より感謝し、列挙した課題に取り組むことの意義の大きさを噛みしめて、継続的に調査をしなければならない。

#### 【文献】

新井鎮久(1985):「近郊外縁水田農村と構造改善事業効果の限界」『近郊農業地域論—地域論的・経営論的接近—』大明堂、167-180。

石田正昭(1999):「換地前争の社会的分析:ある集落の経験」『農家行動の社会経済分析』大明堂、170-200。

生井貞行・原田敏治・松沢正・山崎憲治(1987):「都市化地域における農家経営と農地保全—横浜市鶴居・東本郷地区と小机地区を事例として—」地理学評論 60-5、301-322。

#### 【注】

1 データは大分市HPによる

2 公表されている農業集落カードによる。

3 自給の規模とは、営農規模が30a以下であって、年間の農産物販売代金が50万円未満の農家を指す。

## 第19章 自然科学分析調査

ハリノ・サーヴェイ株式会社

### 丹生川坂ノ市条里跡出土遺物の自然科学分析調査

はじめに

丹生川坂ノ市条里跡では、中世の墓坑とみられる土坑（第4地点S-1265）内の植物遺体を含む覆土中から、多数の古銭が出土しており、その中には表面に植物繊維のような物質が付着しているものもある。また、このほかに赤色顔料と思われる赤色物質や、白色の塊状物質が含まれる土壌も確認されている。

今回の分析調査では、古銭の表面に付着した繊維状物質について、実体顕微鏡による観察を実施する。また、古銭が出土した周囲の土壌を水洗選別し、検出される種実や木材等の植物遺体について同定を実施する。さらに赤色顔料についてはX線回折分析を実施して由来物質を特定するとともに、白色の塊状物質については骨片の可能性があったことから、土壌から抽出したうえで骨同定を実施する。なお、有機物が付着していた古銭1点については、その付着状態を記録保存するために、保存処理も同時に行った。

#### I. 古銭の観察

##### 1. 試料

試料は、出土した古銭3点（試料2,3,5）である。このうち、試料5は、保存処理試料であり、処理前に観察記録を行った。

##### 2. 分析方法

古銭の表面に付着している繊維状物質について、双眼実体顕微鏡を用いて10-100倍程度で観察を実施する。

##### 3. 結果・考察

###### (1) 試料2

古銭は4片に割れている。最も大きな破片に繊維状の物質、2番目に大きな破片に膜状の物質が認められる。また、最も小さな破片では、破片の下部に膜状物質があり、さらにその下に繊維状物質が認められる。繊維状物質は、木片等の植物遺体由来と考えられるが、保存が悪く種類は不明である。

最も小さな破片の観察結果から、膜状物質と繊維状物質が何らかの構造を持っていた可能性がある。

###### (2) 試料3

古銭は2片に割れている。大きな破片に膜状物質、小さな破片に繊維状物質が認められる。いずれも試料2で認められたものと同じ物質と考えられる。膜状物質については、試料2よりも保存状態が良い。後述する試料4に認められた葉のようにも見えるが、葉脈等の構造が全く観察できないため、物質の由来等は不明である。

###### (3) 試料5

古銭は一部破損しているが、完形に近い。片面に繊維状物質が膜状に付着している。微細な繊維が多数集まって膜状を呈している様子が見られるが、編んでいるような構造は見られない。似たような構造を有する繊維物質として、和紙の可能性が挙げられるが、特定には至らなかった。

#### II. 土壌試料の植物遺体分析

##### 1. 試料

試料は、中央部木質の1点（試料4）である。土壌中には古銭が含まれている。土壌は、50cc(35.49g)を採取した。

##### 2. 分析方法

試料を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察

し、種実、葉などの植物遺体や古銭を抽出する。抽出された種実、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑との対照から、種類と部位を同定する。また、植物の茎・材等と思われる試料は、剃刀で横断面・放射断面・接線断面の切片を作成し、ガム・クロラールで封入してプレパラートとした後、生物顕微鏡で組織観察を行い、種類を同定する。

なお、分析後の植物遺体は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して返却する。

### 3. 結果

結果を表1に示す。草本のイネ科の果実1個、ホタルイ属の果実1個と、広葉樹の破片11個以上、植物の茎・木材のような植物片20個以上、古銭(完形6個、破片5個以上)が抽出された。また、古銭完形1点の表面に広葉樹の葉片が付着していた。広葉樹の葉は淡灰褐色、基部が確認される葉片の長さは3.7cm、最大幅は破片頂部で2cm程度。基部は楔形で葉縁は全縁。主脈と側脈が確認されたが種類の特定には至らなかった。なお、植物の茎や木材のように見える植物遺体は、いずれも同一と思われることから、3点を抽出して樹種同定を実施した。その結果、全てイネ科の稈に同定された。

以下に、本分析で同定された種実の形態的特徴等を記す。

#### ・イネ科(Gramineae)

##### <果実>

淡黄褐色、半挟卵形で背面は丸みがあり腹面は扁平。長さ3mm、径2mm程度。果皮表面には微細な網目模様縦列する。

##### <稈>

いずれも繊維質であり、触っただけで繊維方向に裂けるような状態。横断面は保存が悪く切片が作成できず、微細な破片が数点採取できたのみである。これらの破片は、楕円形の繊維細胞の集合体であった。放射断面・接線断面では、軸方向組織のみで放射組織が認められない。軸方向組織は、長い繊維細胞と短冊型の柔細胞が認められる。

以上の特徴から、イネ科の稈と考えられる。繊維が比較強いことから、タケ亜科の可能性がある。・ホタルイ属(Scirpus) カヤツリグサ科

果実が抽出された。黒褐色、片凸レンズ状の広倒卵体。長さ2mm、径1.7mm程度。頂部は尖る。背面はやや高く正中線上に稜がある。基部は切形で、逆刺を持つ髯状の腕を欠損する。果皮表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

### 4. 考察

イネ科、ホタルイ属などの草本種実、開けた場所に草地を形成する人里植物に属する分類群であり、本遺跡の周囲に生育していた可能性がある。植物遺体の中にタケ亜科と考えられるイネ科の稈が含まれていることから、木質化するタケ・ササ類も周囲に生育していた可能性がある。また、古銭の中には、広葉樹の葉が付着しているものが認められたことから、周辺には何らかの広葉樹も生育していたことが推定される。

表1. 微細植物片分析結果

分類群	部位	状態	試料No.4	備考
イネ科	果実		1	
ホタルイ属	果実		1	
広葉樹	葉	破片(基部)	1	
		破片(部位不明)	>10	
イネ科の稈		破片	>20	
古銭		完形	6	1点の表面に広葉樹の葉片付着
		破片	>5	
分析量			50cc(35.49g)	

### Ⅲ. 赤色顔料のX線回折分析

#### 1. 試料

試料は、出土した赤色顔料1点(試料5)である。

#### 2. 分析方法

分離した赤色顔料を105℃で乾燥し、メノウ乳鉢で微粉砕した後、無反射試料板に充填し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製 MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu (K $\alpha$ )	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite 湾曲	Receiving Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning Speed：2° /min
Current：40Ma	Scanning Mode：連続法
Detector：S C	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：2～45°

#### 3. 結果

X線回折図を図1に示す。試料5の赤色顔料から検出された鉱物は、赤鉄鉱(hematite)のほか、石英(quartz)、灰長石(anorthite)、カオリナイト(kaolinite)である。

#### 4. 考察

赤色を呈する代表的な顔料鉱物にはベンガラ(赤鉄鉱; hematite[ $\alpha$ -Fe $2O_3$ ])のほか、水銀朱(辰砂; cinnabar[HgS])、鉛丹(鉛丹; minium[Pb $3O_4$ ])などがあるが、今回の試料5から検出された赤色顔料には赤鉄鉱(hematite)の存在が確認されたが、その他に赤色を呈する鉱物は確認できなかった。そのため、赤色顔料は、赤鉄鉱を原材料とするベンガラと考えられる。同時に検出された石英や長石などの鉱物は、土壌や岩石中に見られる一般的な造岩鉱物であることから、覆土等の土壌に由来した鉱物と考えられる。

ベンガラには天然の赤鉄鉱を利用する場合のほか、含水水酸化鉄を焼成して得られる赤鉄鉱を利用する場合がある。また、赤鉄鉱にはパイプ状構造をなすものと、非パイプ状(塊状、球状、不定形など)構造のものがあり、前者については沼沢地などにおいて鉄バクテリアが生成する含水水酸化鉄(いわゆる高師小僧)が出発物質であることが判明している(岡田, 1997; 織幡・沢田, 1997)。このような背景から、ベンガラ材料の産出地は無数に存在することとなり、材料産出地を言及することは困難である。

### Ⅳ. 白色物質の観察

#### 1. 試料

試料は、試料7(NSJ-4 S-1265 E-5)の1試料である。乾固した状態と湿性の状態の2種類がある。

#### 2. 分析方法

試料を実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴を捉える。

#### 3. 結果・考察

観察した結果、試料は薄い白色を呈する物質で、繊維質状の構造を示す(右写真)。この白色物質は、骨とし

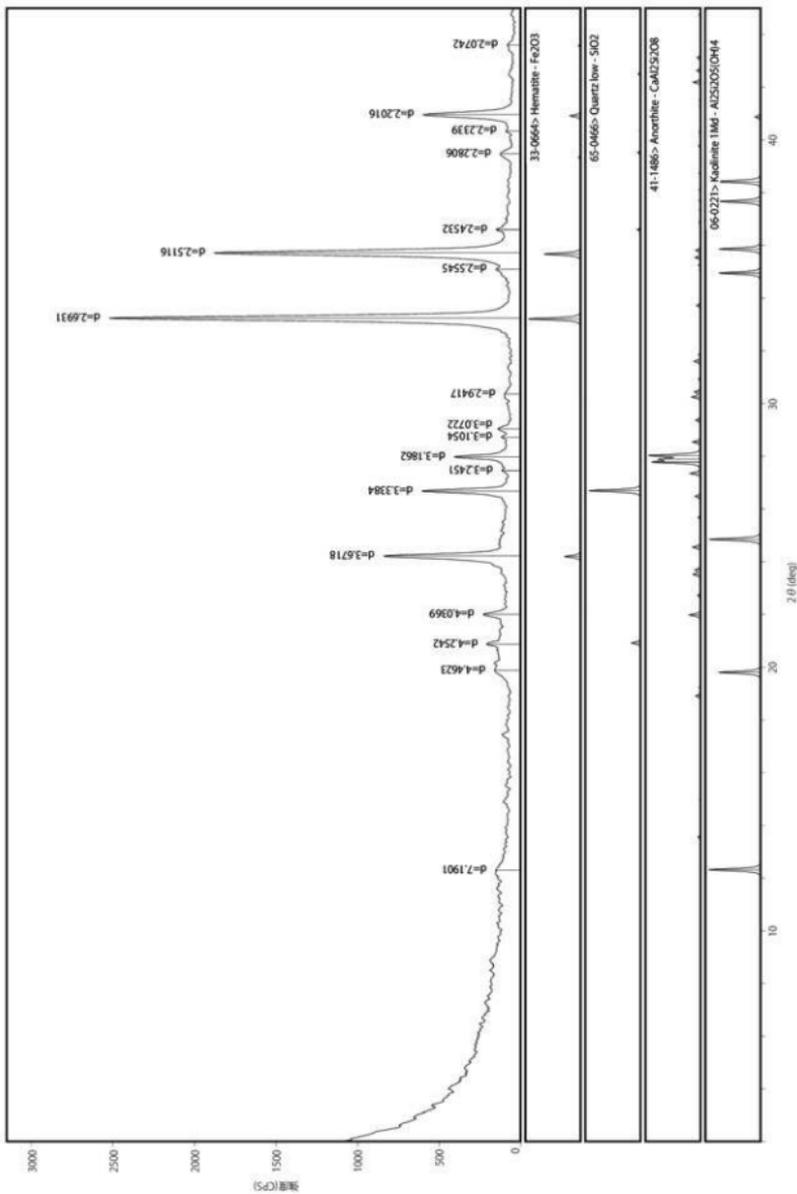


図 1. 赤色顔料の X 線回折図

ての形質や構造を観察することができないため、骨と断定することができない。  
この白色物質の素材について明らかにするためには、灰像組織の観察やX線回折  
による検討がのぞまれる。



## V. 古銭の保存処理

### 1. 試料

試料は、付着物の分析で和紙の可能性が指摘された試料5 (NSJ4S-1265 銭27) の1点である。周縁部に一部欠損はあるが、完形の銅銭である。銭本体の保存は良好であり、緑青も薄い。本来は銭文(「熙寧原寶」)の見られる面にも有機物が付着していたようであるが、現状ではわずかに薄く付着している状態である。遺物取り上げ後数年経過したため、極度の乾燥をきたして剥落した可能性もある。一方銭文のない裏面には、比較的広範囲に付着物がとどまっており、微細なクラックがわずかに入っているものの固着した状態であった。

### 2. 方法

今回の試料は銭本体の保存が良好であったので、裏面を中心にした有機質付着物の付着状態を保存することを優先して、保存処理作業を実施することにした。また、作業中に付着物が剥落する危険があったため、表面のクリーニングは最小限にとどめた。作業工程は以下の通りである。

- 1) 処理前の状態観察を行い、写真を撮影する。
- 2) クリーニング後にアクリル樹脂の含浸を行い、自然乾燥させる。
- 3) 経過観察後に処理後写真の撮影を行う。
- 4) 脱酸素剤(三菱ガス化学株式会社製 R P 剤)とともにシーラーバックへ封入する。

### 3. 結果

保存処理を終えた古銭は、経過観察後脱酸素剤(R P 剤)にインジケーターとなる錠剤(封入時はピンク色。内部に酸素が進入すると速やかに紫色に変色します。)を添えてシーラーバックに封入しました。

この状態で蓋つき容器などに収納して保管されることが望ましいのですが、封入を解いて実測等を実施する場合は、事前によく手を洗い乾燥させた上でふれるようにして下さい。また、作業終了後は速やかに上記脱酸素剤もしくは同等品(シリカゲル使用でも可)とともにシーラーで封入し、保管下さい。薬剤の性質上、保管中は出来るだけ水分や塩分(手指の汗などを含む)有機溶媒(アセトン等)との接触・直射日光・極端な高温を避けて下さい。

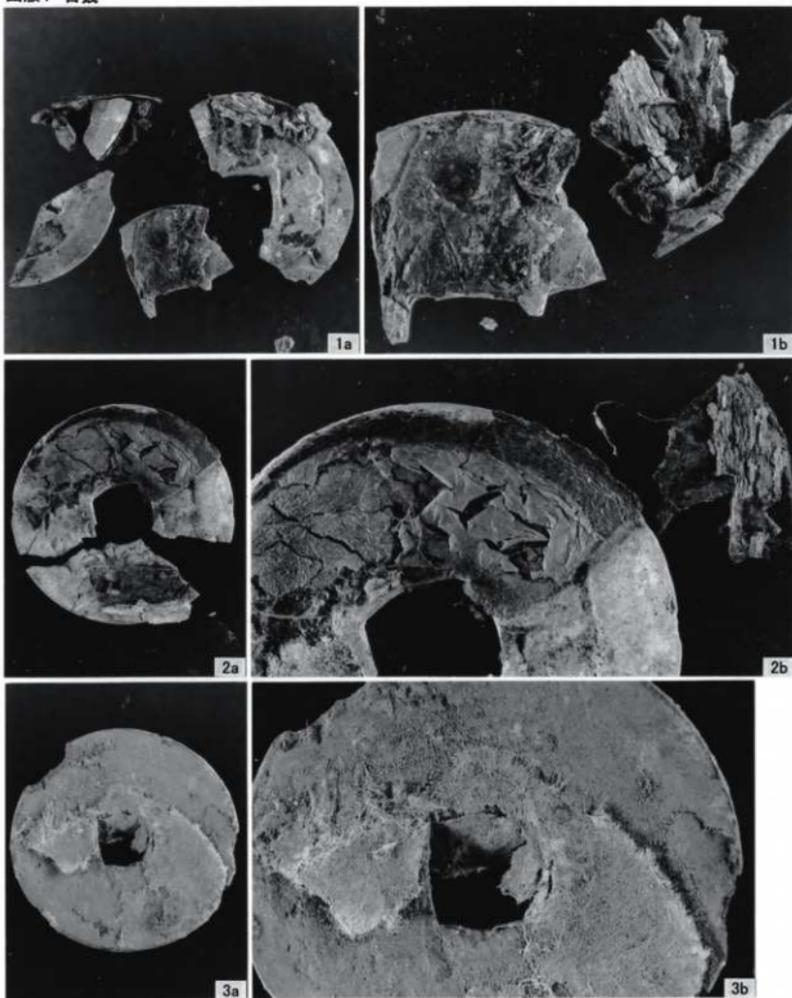
なお、付着している有機物を合成樹脂で固化させてはありますが、取り上げ後の極度の乾燥を経ているため、脆弱で剥落しやすい状態であることに変わりありません。取り扱いの際には、表面を強くこすったり、強い力で圧迫する、あるいは鋭利なもので突くなどの行為は絶対に避けて下さい。

なお、定期的に状態観察を行い、気になる症状が発生した場合は至急ご連絡下さい。

### 引用文献

- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.  
中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.  
岡田 文男,1997,パイプ状ベンガラ粒子の復元,日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,38-39.  
織幡 順子・沢田 正昭,1997,酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究,日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,76-77.

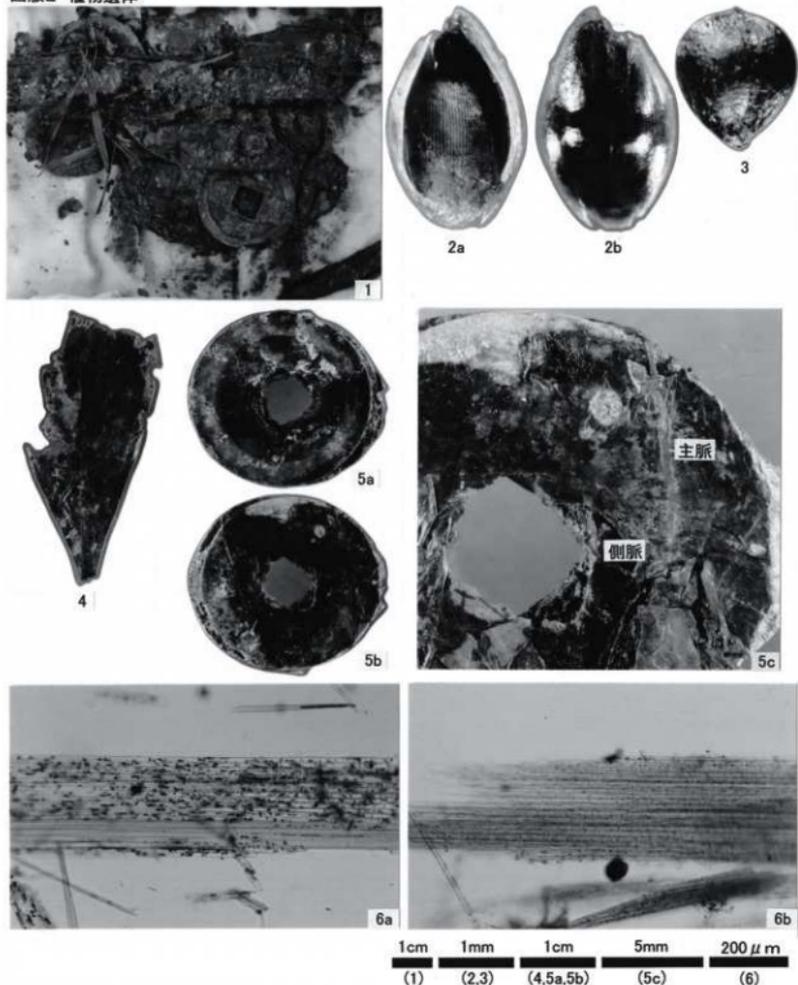
図版1 古銭



- 1a . 古銭概観(試料2)  
1b . 付着物拡大部(試料2)  
2a . 古銭概観(試料3)  
2b . 付着物拡大部(試料3)  
3a . 古銭概観(試料5)  
3b . 付着物拡大部(試料5)

1cm 1cm  
(1a-3a) (1b-3b)

図版2 植物遺体



1. 分析前概観(試料4)  
 3. ホタルイ属 果実(試料4)  
 5. 広葉樹の葉(試料4)

2. イネ科 果実(試料4)  
 4. 広葉樹 葉(試料4)  
 6. イネ科の稈(試料4) a:放射断面,b:接線断面

圖版 3 保存處理試料



處理前 表面



處理後 表面



處理前 裏面



處理後 裏面

## 丹生川坂ノ市条里跡(第4・6・9・10地点)の自然科学分析

はじめに

大分市丹生川坂ノ市条里跡第9地点の発掘調査では、弥生時代あるいは中世の遺構や遺物が検出された。この中には、炭化物の認められる遺構、トイレの可能性が指摘される遺構などが見られた。出土した炭化物などの有機物類には、当時の食糧資源や燃料材など当時の古環境や生活を解明する上で有効な情報が得られることが期待された。

そこで、食糧資源、燃料材、遺構の用途や内容物に関する自然科学分析調査を実施した。このうち、食糧資源に関する調査では、植物珪酸体分析と微細物分析、燃料材に関する調査では植物珪酸体分析と炭化材同定、遺構の用途に関する調査では珪藻分析と寄生虫卵分析(特にトイレの可能性の検討)、遺構の内容物に関する調査では土壌理化学分析を行った。

## 1. 試料

分析試料の詳細を表1に示す。

食糧資源に関する調査では、弥生時代中・後期とされるNSJ10SH1 竪穴建物跡中央部の炉跡より採取された試料番号1および15世紀とされる土坑第6地点SK510より採取された試料番号5を用いる。前者では、イネ属をはじめとする栽培植物の痕跡の有無に注目する。後者は、発掘調査所見により儀式などで使用したかわらけを一括廃棄した可能性が指摘されており、栽培植物などの混入について検討する。

燃料材に関する調査では、15世紀とされる土坑第6地点SK520より採取された炭充填層(試料番号3と4)を用いる。

この土坑の床面は赤く焼けており、燃料材が燃焼した後の炭で充填されている。今回は、燃料材として利用された草本類の有無や木材の種類について検討する。

遺構の用途に関する調査では、12～13世紀とされる土坑第9地点S-155の最下層より採取された試料番号2および15世紀とされる備前焼の埋裏第6地点S-525の2層より採取された試料番号7を用いる。前者は、発

表1. 分析試料

試料番号	遺構	年代	目的	分析項目					
				D	寄	Po	CW	微細	土理
1	NSJ10SH1 炉跡 (竪穴建物跡中央部)	弥生時代 中期	食糧資源の有無を 確認			●		●	
2	NSJ9S-155 (最下層)	12～13世紀	遺構の用途検討 (特にトイレの可能性)	●	●				
3	NSJ6S-520	15世紀	燃料材に関する検討			●			
4	同上	同上	燃料材に関する検討				●		
5	NSJ6S-510 埋土2下層	15世紀	食糧資源の有無を 確認			●			
6	NSJ6S-510 埋土1下層	同上	遺構の内容物確認 (特に墓の可能性)						●
7	備前焼の埋裏 NSJ6S-525 (J19 2層)	15世紀	遺構の用途検討 (貯蔵施設やトイレ)	●	●				
9	NSJ4S-500 1層西側	14～15世紀	遺構の内容物確認 (特に墓の可能性)						●
10	NSJ4S-600 1層一括	14～15世紀	遺構の内容物確認 (特に墓の可能性)						●

分析項目 D:珪藻分析、寄:寄生虫卵分析、Po:植物珪酸体分析、CW:炭化材同定、  
微細:微細物分析、土理:土壌理化学分析

掘調査所見によりトイレや井戸などに利用された可能性が指摘されている。後者は、発掘調査所見によりトイレや貯蔵施設に利用された可能性が指摘されている。いずれの試料についても、人糞に由来する寄生虫卵の有無あるいは水の存在を示唆する珪藻化石の有無に注目する。

遺構の内容物に関する調査では、15世紀とされる土坑第6地点SK510の埋土1下層より採取された試料番号5、14～15世紀とされる土坑第4地点SK500の1層西側より採取された試料番号9、同時期とされる土坑第4地点SK600 1層一括より採取された試料番号10を用いる。これらの遺構には、発掘調査所見より墓の可能性が指摘されていることから、人体など動物遺体由来する理化学成分(特にリン酸成分)の残留状況に注目する。

## 2. 分析方法

### (1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレパラートで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)、渡辺(2005)、小林ほか(2006)などを参照し、分類体系はRound, Crawford & Mann(1990)に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は柳沢(2000)に従う。同定結果は、中心類(Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae)と羽状類(Pennate diatoms)に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類(Araphid pennate diatoms; 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae)と有縦溝羽状珪藻類(Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae)に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については、Vos & de Wolf(1993)を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe(1974)に従い、真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性が異地性を判断する目安として、完形殻の出現率を求める。

堆積環境の解析にあたり、真塩性種～中塩性種については小杉(1988)、貧塩性種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性についてはAsai & Watanabe(1995)、渡辺(2005)の環境指標種を参考とする。

### (2) 寄生虫卵分析

試料10ccを正確に秤り取る。これについて水酸化カリウムによる肥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての寄生虫卵と花粉・胞子化石について同定・計数する。

結果は、寄生虫卵については堆積物1ccあたりに含まれる寄生虫卵の個数、花粉・胞子化石については同定および計数結果の一覧表として表示する。

### (3) 植物珪酸体分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壤中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、植物遺体や植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い(例えば、バリノ・サーヴェイ株式会社,1993)。そのため、珪化組織片の産状により当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

調査した試料は、いずれも炭化物と土壌が混在していたことから、以下の方法により珪化組織片や植物珪酸体の濃集と分離を試みた。

湿重 5g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。鏡しやすいた濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された分類群とその個数の一覧表で示す。また、検出された珪化組織片や植物珪酸体の出現傾向から燃料材について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化した。その際、出現率は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

#### (4) 炭化材同定

炭化材を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴などについては、鳥地・伊東（1982）および Wheeler 他（1998）を参考にする。

#### (5) 微細物分析

試料 200cc(438.1g) を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材などの植物質遺物を抽出する。

#### (6) 土壌理化学分析

調査項目として、リン酸含量と腐植含量の測定を選択した。リン酸成分は動物の体組織や骨に多く含まれ、土壌中に固定されやすい性質を持つ。そのため、遺体が埋納されるとリン酸の富化が認められる場合があり、遺体埋納の痕跡を推定できる。なおリン酸の供給源としては、動物遺体の他に植物体がある。植物由来のリン酸成分が供給された場合、リン酸含量よりも腐植含量が高くなる。植物体の影響を調べるために土壌中の腐植含量を測定することで遺体埋納について検証できる場合がある（例えば、中根・馬場, 1995; ハリノ・サーヴェイ株式会社, 1999 など）。この点を考慮し、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-パナドモリブデン酸比色法、腐植含量はチューリン法（土壌養分測定法委員会, 1981, 土壌標準分析・測定法委員会, 1986）による測定を行う。

以下に各項目の操作工程を示す。

##### ・リン酸含量

試料を風乾後、軽く粉砕して 2.00mm の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5 時間）により測定する。

風乾細土試料 1.00 g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）約 5ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 5mg/g）を求める。

##### ・腐植含量

風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mm のふるいを全通させる（粉砕土試料）。

粉砕土試料 0.100 ~ 0.500 g を 100ml 三角フラスコに正確に秤量し、0.4N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃ の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニールアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第 1 鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org C 乾土%）を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量（%）を算出する。

表2. 珪藻化石の生態性区分と環境指標種群

	塩分濃度に対する区分	Lowey(1974)による
海水生種	強塩性種	塩分濃度40.0‰以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種(海水生種)	塩分濃度40.0 ~ 30.0‰に生育する種
汽水生種	中塩性種(汽水生種)	塩分濃度30.0 ~ 0.5‰に生育する種
淡水生種	弱塩性種(淡水生種)	塩分濃度0.5‰以下に生育する種
	淡水生種の生態性区分	
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩強塩性種	少量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
	真酸性種	pH7.0以下に生育し、特にpH5.5以下の酸性水域で最も良く生育する種
pH	好酸性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以下の水域で最も良く生育する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以上の水域で最も良く生育する種
	真アルカリ性種	pH7.0以上に生育し、特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
Hustedt (1937-38) による	真アルカリ性種	pH7.0以上に生育し、特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
流水	真止水性種	止水域のみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域のみ生育する種
Hustedt (1937-38) による	真流水性種	流水域のみ生育する種

主に海水域での指標種群(小杉,1988による)	
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35‰の外洋水中で浮遊生活するもの
内湾指標種群(B)	塩分濃度35 ~ 26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35 ~ 12‰の海域で海藻(翠)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12 ~ 4‰の汽水域で海藻(翠)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35 ~ 26‰の砂底の礫に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26 ~ 5‰の砂底の礫に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水泥質干潟指標種群(E1)	30 ~ 12‰の間隙性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12 ~ 2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水底生種群(F)	2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊性種群(G)	塩分濃度2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊性種群(H)	塩分濃度20 ~ 2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群
主に淡水域での指標種群(安藤,1990による)	
上流性河川指標種群(I)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中～下流性河川指標種群(K)	河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流性河川指標種群(L)	最下流部の三角洲の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢湿地指標種群(N)	湖沼における浮遊性種としても沼沢湿地の付着性種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢湿地付着性種群(O)	沼りも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の現れることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
高層湿原指標種群(P)	ミズケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群(Q)	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域での指標種群(伊藤・堀内1991による)	
陸生珪藻A群(A)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生珪藻B群(B)	陸生珪藻A群に隣伴し、陸域にも水中にも生育する種群
未区分陸生珪藻(R)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明なもの

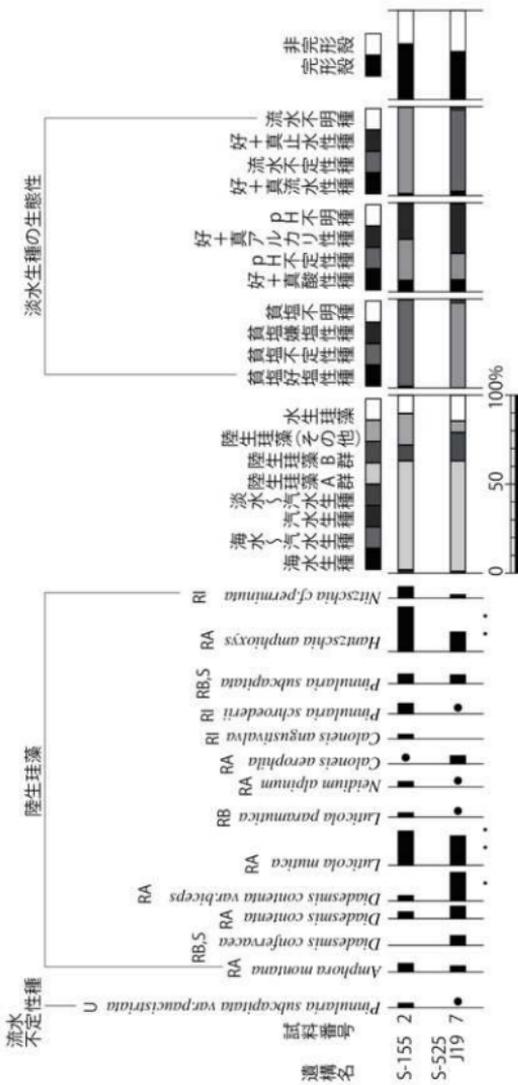


図1. 主要珪藻化石群集  
 海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満の産出を示す。  
 (S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種, RA:陸生珪藻A群, RB:陸生珪藻B群, RI:未区分陸生珪藻)

表3. 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境	S-155	S-525
	塩分	pH	流水	指標種	最下層	J19 2層
Bacillariophyta (珪藻植物門)						
Centric Diatoms (中心型珪藻類)						
Aulacoseira nipponica (Skvortzov)Tuji	Ogh-unk	al-il	l-ph	M,T	-	1
Thalassiosira lacustris (Grun.)Hasle	Meh				-	2
Araphid Pennate Diatoms(無縱溝羽狀珪藻類)						
Staurosira venter (Ehren.)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	1
Raphid Pennate Diatoms(有縱溝羽狀珪藻類)						
Monoraphid Pennate Diatoms(單縱溝羽狀珪藻類)						
Karayevia clevei (Grun.)Round et Bukhtiyarova	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1
Lemnicola hungarica (Grunow)Round & Basson	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1
Planothidium lanceolatum (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	1
Cocconeis euglypta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	2
Cocconeis placentula Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	2
Biraphid Pennate Diatoms(雙縱溝羽狀珪藻類)						
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	10	7
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	1
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzov	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1
Encyonema silesiacum (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-
Placoneis elginensis (Greg.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	1	-
Placoneis elginensis var. neglecta (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1
Gomphonema angustivalva Reichardt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	1
Gomphonema christensenii Lowe et Kociolek	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	1
Gomphonema lagenula Kuetzing	Ogh-ind	ind	r-ph	S	-	1
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1
Reimeria sinuata (W.Greg.)Kociolek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	2
Eolimna tantula (Hust.)	Ogh-ind	ind	r-ph	RI,U	1	-
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	3	-
Navicula gibbula Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	3
Gyrosigma scalpoides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-
Stauroneis borrichii (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	4	3
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1
Stauroneis thermicola (Petersen)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-
Diademsis confervacea Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	-	11
Diademsis contenta (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	8	14
Diademsis contenta var. biceps (Arnott ex Grunow )Hamilton	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	6	32
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	39	33
Luticola paramutica (Bock)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RB	5	3
Luticola plausibilis (Hustedt ex Simonsen)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind		-	1
Luticola ventricosa (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	1	-
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	6	3
Neidium septentrionale Cleve-Euler	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	ac-bi	ind	RA,S	1	9
Caloneis angustivalva Boye P.	Ogh-ind	ind	ind	RI	5	-
Diatomella balfouriana (W.Smith)Greville	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-
Pinnularia anglica Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind	T	-	1
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	3
Pinnularia brauniana (Grun.)Mills	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P,U	-	1
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	3
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	12	2
Pinnularia sinistra Krammer	Ogh-ind	ac-bi	ind	S	2	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	11	10
Pinnularia subcapitata var. paucistriata (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	5	2

表3.のつづき

種 類	生態性			環境 指標種	S-155 最下層	S-525 J192層
	塩分	pH	流水		2	7
管縦溝類						
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	51	22
Hantzschia amphioxys var. capitata O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA	3	1
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	2	1
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	-	1
Nitzschia parvuloides Cholnoky	Ogh-ind	ind	ind	U	2	2
Nitzschia cf. perminuta (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	al-il	ind	Ri,U	13	4
Tryblionella debilis Arnott	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	2
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1	-
翼管縦溝類						
Surirella minuta Brebisson	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	3	-
短縦溝類						
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ind	ind	U	-	1
Eunotia minor (Kuetz.)Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	-	1
Eunotia praeurupta var. bidens (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	f-ph	RB,O,T	-	1
海水生種					0	0
海水～汽水生種					0	0
汽水生種					0	2
淡水～汽水生種					4	0
淡水生種					199	198
珪藻化石総数					203	200

## 凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性

Meh : 汽水生種

Ogh-Meh : 淡水～汽水生種

Ogh-hil : 貧塩好塩性種

Ogh-ind : 貧塩不定性種

Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種

Ogh-unk : 貧塩不明種

pH : 水素イオン濃度に対する適応性

al-bi : 真アルカリ性種

al-il : 好アルカリ性種

ind : pH不定性種

ac-il : 好酸性種

ac-bi : 真酸性種

unk : pH不明種

C.R. : 流水に対する適応性

l-bi : 真止水性種

l-ph : 好止水性種

ind : 流水不定性種

r-ph : 好流水性種

r-bi : 真流水性種

unk : 流水不明種

## 環境指標種群

K:中～下流性河川指標種, M:湖沼浮遊性種, O:沼沢湿地付着生種 (安藤, 1990)

S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)

R:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, Ri:未区分、伊藤・堀内, 1991)

種 類	S-155	S-525
	最下層	J192層
試料番号	2	7
寄生虫卵		
寄生虫卵(個/cc)	0	0
木本花粉		
ニレ属-ケヤキ属	1	1
草本花粉		
イネ科	2	-
不明花粉	-	1
シダ類胞子		
シダ類胞子	8	4
合 計		
木本花粉	1	1
草本花粉	2	0
不明花粉	0	1
シダ類胞子	8	4
総計(不明を除く)	11	5

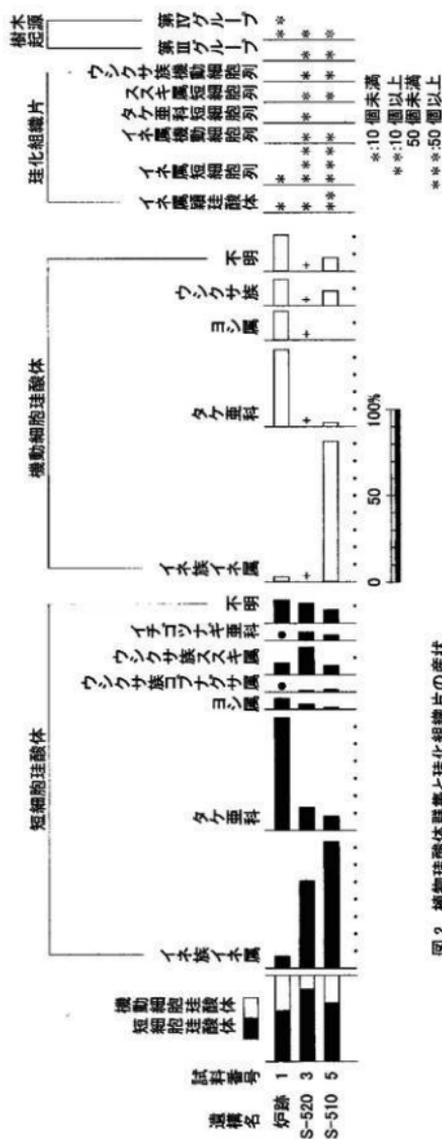


図2. 植物珪酸体群集と珪化組織片の産状  
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉部機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は100個未満の試料で検出された分類群を示す。また、珪化組織片と樹木起源珪酸体の産状を\*で示す。

### 3. 結果

#### (1) 珪藻分析

珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表2に示す。また、今回の分析結果を表3、図1に示す。いずれの試料も珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は60%以上であり、化石の保存状態も比較的良い。産出分類群数は、合計で28属58分類群である。

以下に、試料別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

試料番号2と7では、いずれも陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が、85%前後と優占することを特徴とする。ただし、産出割合に違いが見られる。

試料番号2は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群のHantzschia amphioxysが約25%と優占し、同じく陸生珪藻A群のLuticola muticaが約20%産出する。これに付随して、陸生珪藻A群のAmphora montana, Diademsis contenta, Diademsis contenta var. biceps, それにNidium alpinumなどを伴う。

試料番号7は、陸生珪藻A群のDiademsis contenta var. biceps, Luticola muticaがそれぞれ約17%産出し、同じく陸生珪藻A群のHantzschia amphioxys, Diademsis contenta, Caloneis aerophila, 水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群のDiademsis confervacea, Pinnularia subcapitataなどを伴う。後述した陸生珪藻B群の2種は、有機汚濁の進んだ富栄養水域にも生育する好汚濁性種でもある。

#### (2) 寄生虫卵分析

結果を表4に示す。

土坑覆土の試料番号2および糞内土壌の試料番号7からは、いずれも寄生虫卵が検出されない。

なお、花粉化石が検出される。試料番号2ではニレ属一ケヤキ属とイネ科、試料番号7ではニレ属一ケヤキ属が検出されるものの、その検出個数はそれぞれ1-2個体のみである。

表5. 植物珪酸体分析結果

種 類	試料番号	炉跡		S-510 埋土2
		1	3	
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属		14	152	193
タケ亜科		132	39	21
ヨシ属		13	9	3
ウシクサ族コブナグサ属		1	3	4
ウシクサ族ススキ属		14	48	14
イチゴツナギ亜科		2	14	8
不明キビ型		14	29	10
不明ヒゲシバ型		4	2	3
不明ダンチク型		9	3	7
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属		4	18	104
タケ亜科		64	11	3
ヨシ属		24	4	-
ウシクサ族		22	6	11
不明		30	19	10
合 計				
イネ科葉部短細胞珪酸体		203	299	263
イネ科葉身機動細胞珪酸体		144	58	128
総 計		347	357	391
珪化組織片				
イネ属穎珪酸体		8	6	14
イネ属短細胞列		7	59	103
イネ属機動細胞列		-	1	4
タケ亜科短細胞列		-	3	-
ススキ属短細胞列		-	10	2
ウシクサ族機動細胞列		-	2	1
樹木起源珪酸体				
第IIIグループ		-	3	5
第IVグループ		14	5	7

表6. 土壌理化学分析結果

試料番号	遺構	土性	土色	腐植含量 (%)	P2O5 (mg/g)	備考
6	NSJ65-510 埋土1下層	LIC	10YR3/2 黒褐	0.80	3.79	土器片が少量に混入
9	NSJ45-500 1層西側	LIC	10YR3/2 黒褐	0.69	1.90	
10	NSJ45-600 1層一括	LIC	10YR3/2 黒褐	0.84	1.45	

(1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖 (農林省農林水産技術会議監修, 1967) による。

(2) 土性: 土壌調査ハンドブック (ペドロジスト懇談会編, 1984) の野外土性による。

LIC: 軽粘土 (粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%)

### (3) 植物珪酸体分析

結果を表5、図2に示す。

試料番号1(炉跡)では、珪化組織片として栽培植物であるイネ属の糊殻に形成される珪酸体、葉部に形成される短細胞列が検出される。この他に単体の植物珪酸体も認められ、タケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。また、樹木起源珪酸体の第IVグループ(近藤・ピアスン,1981)も検出される。

試料番号3(S-520)では、珪化組織片としてイネ属の由来する珪酸体、短細胞列、機動細胞列が検出され、短細胞列の産出が目立つ。また、タケ亜科やススキ属の短細胞列、ウシクサ族の機動細胞列も認められる。この他、ヨシ属やコブナグサ属、イチゴツナギ亜科なども認められる。樹木起源珪酸体では、第IVグループとともに第IIIグループ(近藤・ピアスン,1981)も検出される。

試料番号5(S-510埋土2)でも、イネ属に由来する珪化組織片(珪酸体、短細胞列、機動細胞列)、ススキ属の短細胞列、ウシクサ族の機動細胞列が検出される。この中では、イネ属短細胞列の産出が目立つ。また、イネ属の機動細胞珪酸体の検出個数も多い。この他にタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、コブナグサ属、イチゴツナギ亜科、樹木起源珪酸体の第IIIグループや第IVグループも認められる。

### (4) 炭化材同定

炭化材は、広葉樹のクスノキ科に同定される。以下に、解剖学的特徴などを記す。

・クスノキ科(Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

### (5) 微生物分析

同定可能な種実数は、確認されない。最大2.5mm角程度の炭化材3個(0.01g未満)が検出されるものの、樹種同定が可能な大きさ(約4mm角以上)ではなかったため、樹種の特定には至らない。

### (6) 土壌理化学分析

結果を表6に示す。

試料番号6,9,10の腐植含量は1%以下である。一方、リン酸含量は試料番号6で3.79P 20 5mg/g、試料番号9と10で1.49~1.90P 20 5mg/gである。

## 4. 考察

### (1) 食糧資源に関する検討

弥生時代中・後期のNSJ10SH1 堅穴建物跡で検出された炉跡では、栽培植物を含めて同定可能な種実が認められなかった。ただし、栽培植物であるイネ属の糊殻や葉部に由来した珪化組織片が検出された。そのため、弥生時代中期には、イネ属が栽培植物のひとつであったと考えられる。

15世紀の土坑第6地点SK510でも、埋土2からイネ属の糊殻や葉部に由来した珪化組織片が検出され、イネ属の機動細胞珪酸体の検出個数が多かった。このため、15世紀にもイネ属が栽培されていたと考えられる。なお、大分市下都遺跡群第51次調査区の自然科学分析結果(パリオ・サーヴェイ株式会社,2005MS)などによれば、古代~中世に本遺跡周辺でイネやマメ類が植物質食糧として利用されていたと推定されている。

ところで、弥生時代中期の炉跡や15世紀の土坑第6地点SK510ではタケ亜科やヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などの植物珪酸体が検出された。これより、弥生時代中期や15世紀にはこれらのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。また樹木起源の植物珪酸体も検出され、15世紀の土坑第6地点SK520でクスノキ科の炭化材が見られたことから、当該期に周辺ではクスノキ科などの樹木が生育していたことも想定される。

## (2) 燃料材に関する検討

15世紀の土坑第6地点SK520では、炭充填層から珪化組織片としてイネ属、タケ亜科、ススキ属などの珪化組織片が認められた。この炭充填層が燃料材の痕跡であれば、15世紀には燃料材のひとつとして、これらのイネ科植物が利用されていたと思われる。

また炭化材の樹種同定結果から、少なくともクスノキ科が利用されていることが明らかとなった。クスノキ科には、暖温帯性常緑広葉樹林を構成するクスノキ、ヤブニッケイ、タブノキなど、林床に生育する落葉広葉樹のクロモジ属などのように様々な種類が含まれ、材質も比較的重硬な種類から軽い材質のものまで含まれる。

なお、イネ属はコメの収穫後その植物体が容易に入手できる。また、タケ亜科やススキ属は、集落の周辺に成育する種類が多い。さらに、クスノキ科は現在でも本地域で普通にみられる樹木である。これらのことから、当該期には周辺で容易に入手可能な植物体を燃料材として利用していたことがうかがえる。

なお上記のとおり、弥生時代中・後期のNSJ10SH1 竪穴建物跡跡(試料番号1)ではイネ属の珪化組織片が検出されており、収穫後の植物体を燃料材として利用していたと思われる。

## (3) 遺構の用途に関する検討

12～13世紀の土坑第9地点SK155 最下層(試料番号2)および15世紀の備前焼埋裏について、トイレ遺構の可能性を検証するために寄生虫卵分析を実施した。

寄生虫は、それに感染した中間宿主、あるいは寄生虫卵に汚染されたものなどを摂取することで、終宿主(ヒト)に感染する。寄生虫卵は普通の土壌中にも含まれるが、糞便などの堆積物で多産する調査事例も報告されている(例えば金原・金原,1992,1993;金原ほか,1995など)。今回の土坑覆土および埋裏内を埋積する土壌からは、寄生虫卵が全く検出されなかった。

また、これらの試料からは花粉化石が検出されたものの、いずれの花粉化石も保存状態が悪く、花粉外膜が破損し、溶解しているものが多く認められた。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が常に酸化状態にあるような場合には、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。珪藻分析の結果をみると陸生珪藻が優占することから、土坑内・埋裏内は好氣的環境下にさらされていたことが想定される。したがって、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子がその後の経年変化により分解し、消失した可能性がある。また、寄生虫卵の分解に対する抵抗性は、花粉と同程度とされる(黒崎ほか,1993)。これより、堆積物中に寄生虫卵が取り込まれていたとすれば、花粉と同様に分解の影響を受けると推測され、堆積後の経年変化により分解し、消失した可能性も想定される。そのため、寄生虫卵の産状からトイレ遺構の可能性を検討することは難しい。

ところで、15世紀の備前焼埋裏では、有機汚濁の進んだ腐水域に耐性のある好汚濁性種が産出している。

また、水生珪藻に相当する種も好汚濁性種に相当するものが多かった。これより、埋裏内へ有機汚濁の進んだ水が混入した可能性がある。そのため、珪藻化石の産状からはトイレと限定できないものの、生活廃水の流入やゴミ穴からの水の浸潤、有機汚濁の進む農耕地等からの水や土壌が流入した可能性がある。この点については、埋裏内を埋積する土壌について化学成分(特にリン酸成分)の残留状態を調べるとともに、埋裏の産状や他の遺構との位置関係などを含めて検討することが望まれる。

一方、土坑第9地点SK155では有機汚濁の進んだ腐水域に耐性のある好汚濁性種とともに、一般水域から普通に産出する水生珪藻も伴っている。この産状を見る限り、土坑の用途としてトイレあるいは川などからの水を溜める施設の可能性が想定されるが、今のところ特定することは困難である。今後さらに、埋土について化学成分の残留状況調査や考古学的所見を含めて検討する必要がある。

なお、いずれの土壌試料からも、陸生珪藻の優占する珪藻化石群集が検出された。土坑や埋裏内部の土壌が周囲から流入してきたものと考えれば、これらの遺構の周囲は乾いた(好氣的)環境であったと思われる。

## (4) 遺構の内容物に関する検討

今回調査対象とした、15世紀の土坑第6地点SK510、14～15世紀の土坑第4地点SK500および第4地点

SK600では、腐植含量が1%以下だったことから、いずれも基本的に有機物の集積量は少ない土壌と言える。またリン酸含量は、土坑第6地点SK510で3.79P2O5mg/g、土坑第4地点SK500および第4地点SK600で1.49～1.90P2O5mg/gであった。土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが(Bowen,1979、Bolt・Bruggenwert,1980、川崎ほか,1991、天野ほか,1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P2O5mg/g程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では5.5P2O5mg/g(川崎ほか,1991)という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では、骨片などが認められる土壌では6.0P2O5mg/gを超える場合が多い。

これらの事例を考慮すれば、土坑第4地点SK500および第4地点SK600のリン酸含量は上述の天然賦存量の範囲内にあるとすることができる。すなわち、ヒトを含む動物遺体成分の特徴的な富化は認められず、今回の結果を見る限りこれらの遺構が墓坑である可能性を支持することは難しい。

一方、土坑第6地点SK510については、腐植含量が低い中で天然賦存量を超えるリン酸成分が検出されていることから、何らかの動物質の混入物が考えられる。ただし、かわらけが一括廃棄されている点、前述のようにイネ属やススキ属などの珪化組織片が検出された点を考慮すれば、かわらけと共に動物由来の成分(油脂など)や稲藁やこれを用いた製品等が廃棄された可能性もある。そのため、一概に墓坑とも考えにくく、他の用途も考慮する必要がある。

#### 引用文献

- 天野 洋司・太田 健・草場 敬・中井 信,1991,中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量,土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,農林水産省農林水産技術会議事務局編,28-36.
- 安藤 一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用,東北地理,42,73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.
- Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M.,1976,SOILCHEMISTRY.[岩田 進午・三輪 春太郎・井上 隆弘・岡 捷行(訳),1980,土壌の化学,学会出版センター,309p.]
- Bowen,H.J.M.,1979,Environmental Chemistry of Elements.[浅見 輝男・茅野 充男(訳),1983,環境無機化学,元素の循環と生化学,博友社,297p.]
- 土壌標準分析・測定法委員会編,1986,土壌標準分析・測定法,博友社,354p.
- 土壌養分測定法委員会編,1981,土壌養分分析法,養賢堂,440p.
- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類,埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
- Hustedt, F.,1937-1939,Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java., Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie, Supplement,15:131-177,15:187-295,15:393-506,15:638-790,16:1-155,16:274-394.
- 伊藤 良永・堀内 誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用,珪藻学会誌,6,23-45.
- 金原 正明・金原 正子,1992,花粉分析および寄生虫,藤原京跡の便所遺構-右京七条一坊西北坪一,奈良国立文化財研究所,12-15.
- 金原 正明・金原 正子,1993,史跡松江城二ノ丸番所跡 SK-04 内堆積土の分析,史跡松江城発掘調査報告書,松江市委教区委員会,51-56.
- 金原 正明・金原 正子・中村 亮仁,1995,大宮坊跡(副跡)における自然科学的分析,史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ,石川県鹿島町教育委員会,51-70.

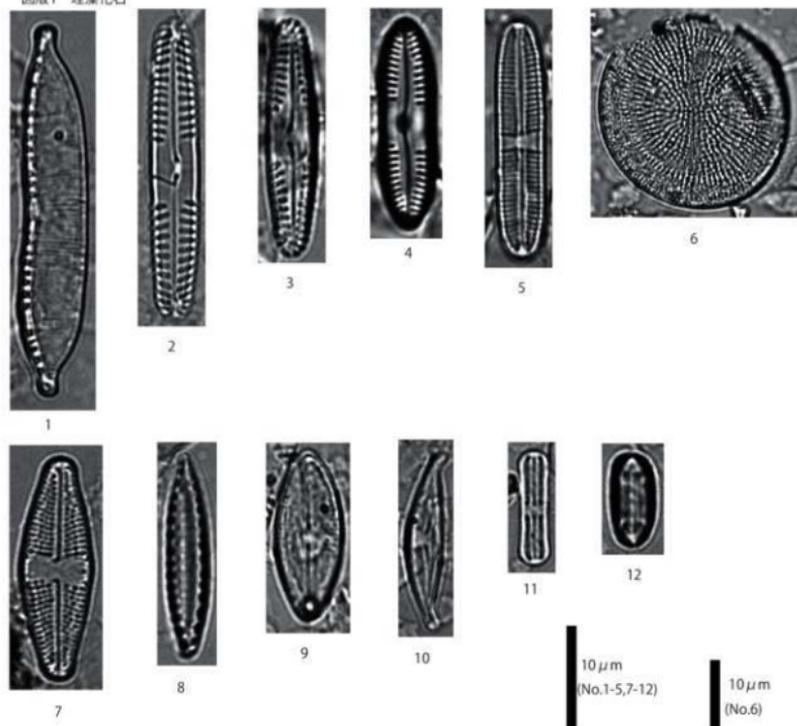
- 川崎 弘・吉田 滂・井上 恒久,1991,九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量・土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発,農林水産省農林水産技術会議事務局編,23-27.
- 近藤 鎌三,2004,植物ケイ酸体研究,ペドロジスト,48,46-64.
- 近藤 鎌三・ピアスン 友子,1981,樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について,帯広畜産大学研究報告,12,217-229.
- 小杉 正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用,第四紀研究,27,1-20.
- 小林 弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五,2006,小林弘珪藻図鑑,第1巻,内田老鶴園,531p.
- Krammer, K.,1992,PINNULARIA,eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnantheaceae,Kritische Ergänzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.
- 黒崎 直・松井 章・金原 正明・金原 正子,1993,糞堆積物の分析 一特に寄生虫卵分析について一,日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集,日本文化財科学会,115-115.
- Lowe, R.L.,1974,Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- Round, F.E., Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990,The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- Vos, P.C. & H. de Wolf,1993,Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands: methodological aspects.Hydrobiologica,269/270,285-296.
- 三宅 尚・中越 信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態,植生史研究,6,15-30.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.
- 中村 純,1967,花粉分析,古今書院,232p.
- 中根 秀二・馬場 健司,1995,周溝内における埋葬位置について,「北区埋蔵文化財調査報告第16集 豊島馬場遺跡(本文編)」,東京都北区教育委員会生涯学習推進課,314-325.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,1993,自然科学分析からみた人々の生活(1),慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」,慶應義塾,347-370.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,1999,豊島馬場遺跡の自然科学分析,「北区埋蔵文化財調査報告第25集 豊島馬場遺跡Ⅱ」,東京都北区教育委員会生涯学習推進課,312-331.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,2005MS,下部遺跡群出土炭化種子同定・土壌分析作業委託報告,5p.
- ペドロジスト懇談会編,1984,土壌調査ハンドブック,博友社,156p.
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- 徳永 重元・山内 輝子,1971,花粉・胞子,化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.
- 渡辺仁治・浅井 一視・大塚 泰介・辻 彰洋・伯耆 晶子,2005,淡水珪藻生態図鑑,内田老鶴園,666p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(編).1998, 広葉樹材の識別 I AWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東

隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

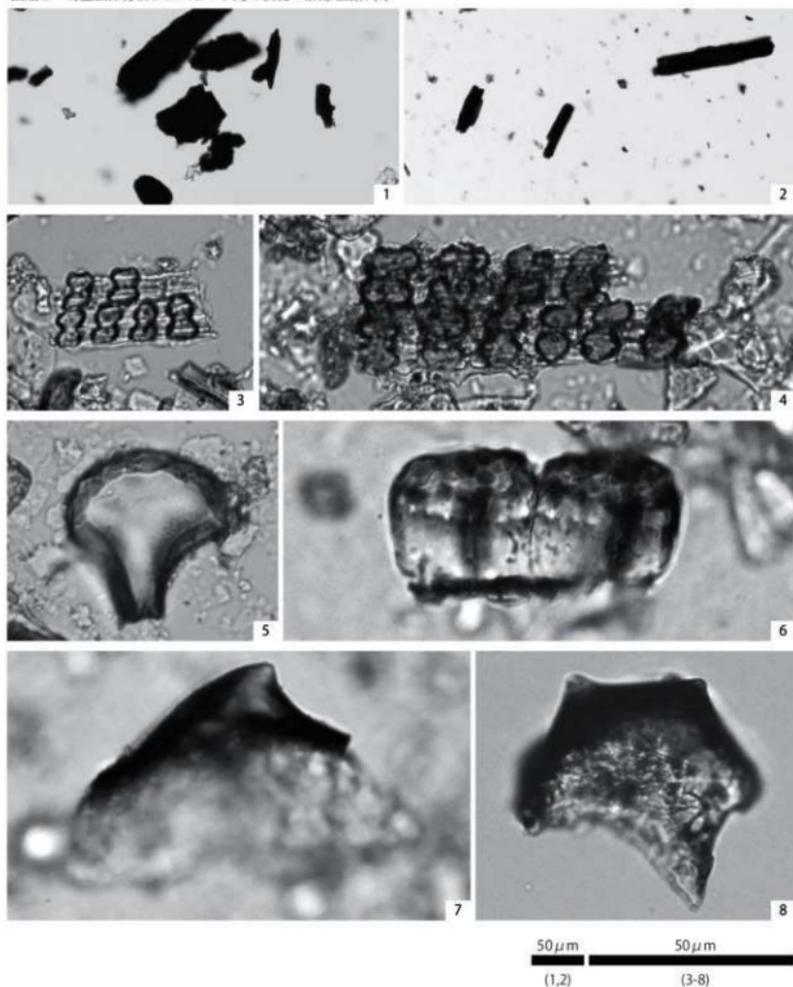
柳沢 幸夫, 2000, II -1-3-2-(5) 計数・同定, 化石の研究法—採集から最新の解析法まで—, 化石研究会, 共立出版株式会社, 49-50.

図版1 珪藻化石



1. *Hantzschia amphioxys* (Ehren.) Grunow(2:5-155)
2. *Pinnularia sinistra* Krammer(2:5-155)
3. *Pinnularia subcapitata* Gregory(2:5-155)
4. *Pinnularia schroederii* (Hust.) Krammer(2:5-155)
5. *Caloneis angustivalva* Boye P.(2:5-155)
6. *Thalassiosira lacustris* (Grun.) Hasle(7:5-525 J19)
7. *Luticola mutica* (Kuetz.) D.G.Mann(2:5-155)
8. *Nitzschia cf. perminuta* (Grun.) Peragallo(2:5-155)
9. *Diademsis confervacea* Kuetzing(7:5-525 J19)
10. *Amphora montana* Krasske(7:5-525 J19)
11. *Diademsis contenta* var. *biceps* (Arnott ex Grunow) Hamilton(7:5-525 J19)
12. *Diademsis contenta* (Grun. ex Van Heurck) D.G.Mann(7:5-525 J19)

図版2 寄生虫卵分析プレパラート内の状況・植物珪酸体(1)



1. プレパラート内の状況(2,5-155)

3. イネ属短細胞列(3,5-520)

5. イネ属機動細胞珪酸体(3,5-520)

7. イネ属珪酸体(1;炉跡)

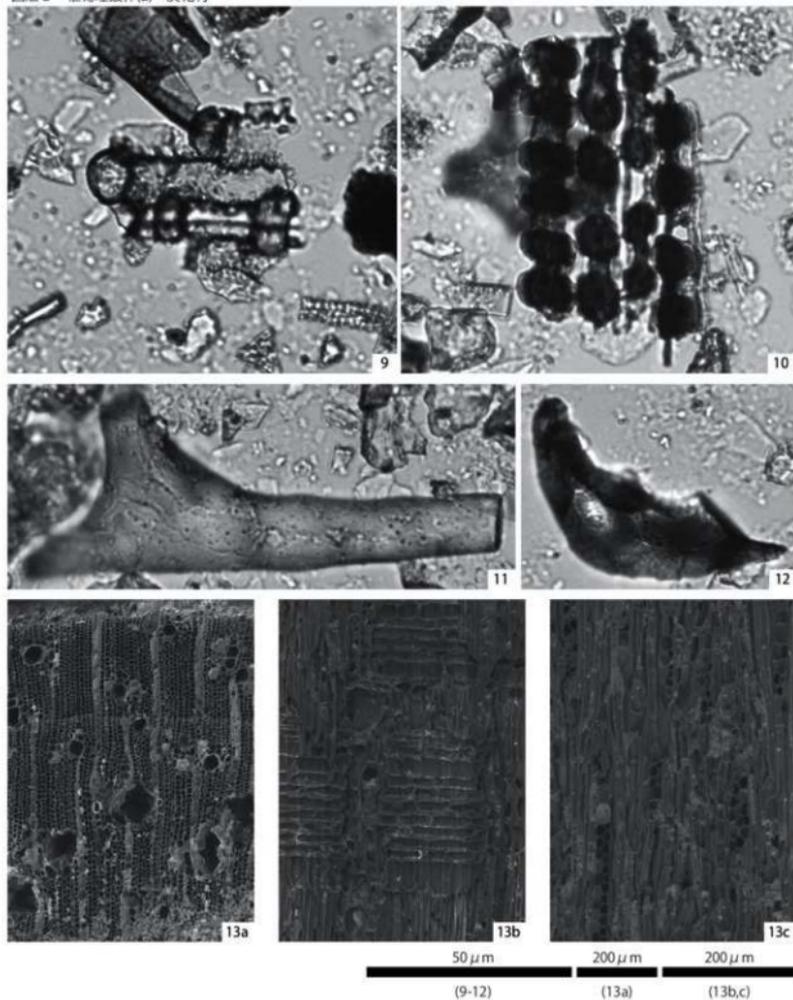
2. プレパラート内の状況(7,5-525 J19)

4. イネ属短細胞列(5,5-510)

6. イネ属機動細胞列(5,5-510)

8. イネ属珪酸体(5,5-510)

図版3 植物珪酸体(2)・炭化材



9. タケ亜科短細胞列(3,S-520)

11. 樹木起源珪酸体第Ⅲグループ(5,S-510)

13. クスノキ科 (4,S-520) a:木口 ,b:柱目 ,c:板目

10. ススキ属短細胞列(3,S-520)

12. 樹木起源珪酸体第Ⅳグループ(3,S-520)

# 遺物觀察表



遺構名	R番号	種類	形状	基礎 (cm) は元元				成層	調査及び発掘		構成	敷土(石材)	色調	備考	
				口径/最大長	高さ/最大幅	底径/最大厚	直径		厚さ(φ)	外面					内面
NSJ T71	001	土器類	器坪	3.0-	1.5-	つまみ 厚2.5	—	—	ロウロ	ナテ後丁等なナテ、取り出し	ナテ	良好	礫砂、赤色粘土、黒色粘土、金部	灰色	
NSJ T83	002	陶器	鉢	21.2-	7.4-	9.2	—	—	ロウロ	白粘土、ハケ瓦器具による高台、焼成不良、底面は黒くへらつた後ナテ	白粘土、ハケ瓦高台	良好	礫砂、赤土	(内) 赤色 (外) 黒灰色	磨理破口8代
NSJ T90 X層	003	土器類	鉢	(24.0)	9.1-	—	—	—	粘土積み上げ	へらつた後ナテ、ナテ、ナテハケ(単位5~6本)	黒いナテ、へらつた後丁等なナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石	(内) 灰褐色 (外) 黒褐色	反転度元、磨理から古代の遺物か?
NSJ T78 SI	004	土器類	瓶	—	17-	8.1	—	—	粘土積み上げ	ナテ、取り出し高台(ココナテ) 底面ココナテ	磨理悪い	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤色 (外) 黒褐色	10c前後の土器類、黒色土器
NSJ T90 X層	005	瓦石?	—	8.4-	4.2-	1.4	0.60	—	—	磨理良好(または良種の面土)	磨理良好	—	焼石、金部	(内) 赤色 (外) 黒褐色	
NSJ T90 X層	006	土器類	皿or杯	—	20-	(7.2)	—	—	粘土積み上げ	ナテ後丁等なナテ、ナテ、底面ナテ後丁等なナテ	ナテ後丁等なナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部、金部	(内) 赤茶褐色 (外) 赤褐色	反転度元
NSJ T90 X層	007	土器類	黒 甕	—	5.0-	—	—	—	粘土積み上げ	ナテ、ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤色 (外) 赤褐色	
NSJ T90 X層	008	土器類	杯	—	17-	(6.8)	—	—	ロウロ	ナテ後丁等なナテ、底面へらつた後ナテ	ナテ後丁等なナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	取り出しの可能性あり
NSJ T90 X層	009	土器類	杯	—	20-	(7.0)	—	—	ロウロ	ナテ後丁等なナテ、底面白粘土後丁等なナテ	白粘土後丁等なナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	
NSJ T90 S4	010	土器類	瓶	—	20-	(7.0)	—	—	ロウロ	白粘土後丁等なナテ、取り出し高台(白粘土後ミダ) 底面白粘土後ミダ	白粘土後丁等なナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T90 X層	011	土器類	杯	—	22-	(6.8)	—	—	ロウロ	白粘土後ナテ、底面ナテ	白粘土ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、金部、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T90 X層	012	土器類	杯	—	15-	(7.0)	—	—	ロウロ	白粘土後ナテ、底面ナテ後焼成良好、外側に磨理あり	白粘土後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、焼石、石灰、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T90 X層	013	土器類	蓋	(28.0)	3.2-	—	—	—	ロウロ	白粘土後丁等なナテ	白粘土後丁等なナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T90 X層	014	土器類	杯	—	24-	(6.8)	—	—	ロウロ	白粘土後丁等なナテ、底面ナテ	白粘土後丁等なナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T90 X層	015	土器類	皿or杯	—	15-	(7.4)	—	—	ロウロ	白粘土後ナテ	白粘土後ナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T90 X層	016	土器類	杯	—	12-	(8.2)	—	—	ロウロ	磨理あり、白粘土後ナテ、底面ナテ	白粘土後ナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T90 X層	017	土器類	瓶	—	25-	(8.0)	—	—	ロウロ	白粘土後ナテ、磨理悪い、底面ナテ	白粘土後ナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T90 X層	018	黒色土器A類	瓶	—	3.5-	—	—	—	ロウロ/粘土積み上げ	白粘土後ナテ、取り出し高台	白粘土後丁等なナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T91 14-a層	019	土器類	杯	—	14-	(6.4)	—	—	ロウロ	白粘土へらミナテ、底面白粘土へらミナテ	白粘土へらミナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T90 S6	020	土器類	高台付土皿	11.2	2.3	7.4	—	—	ロウロ	白粘土後ナテ	白粘土後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	磨理あり
NSJ T90 X層	021	土器類	鉢	(30.0)	9.5-	—	—	—	ロウロ/粘土積み上げ	白粘土後丁等なナテ、白粘土後丁等なナテ(ハケ瓦高台)	白粘土後丁等なナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T90 X層	022	土器類	瓶	—	6.3-	(16.0)	—	—	粘土積み上げ	白粘土後丁等なナテ、白粘土後丁等なナテ(ココナテ磨理あり)	白粘土後丁等なナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T91 14-a層	023	土器類	杯	(13.2)	3.2-	—	—	—	ロウロ	白粘土後ナテ、白粘土後ナテ、白粘土後ナテ	白粘土後ナテ、白粘土後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T91 S1	024	瓦器類	器坪	—	14-	—	—	—	ロウロ	白粘土ナテ	白粘土後ナテ、白粘土ナテ	良好	赤色粘土、石灰	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	
NSJ T91 20-X層	025	瓦器類	器坪	(16.0)	19-	—	—	—	ロウロ	白粘土後丁等なナテ	白粘土後丁等なナテ	良好	礫砂、石灰	青灰色	反転度元
NSJ T91 12-a層	026	瓦器類	瓶	—	20-	(10.0)	—	—	ロウロ	白粘土ナテ、白粘土後ナテ、白粘土後ナテ	白粘土ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T91 S1	027	土器類	杯	(16.0)	3.6-	—	—	—	ロウロ	白粘土後ナテ	白粘土後ミダ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T91 東11-12層	028	土器類	器坪	(12.0)	13-	—	—	—	ロウロ	白粘土後ナテ、磨理多少あり	白粘土後ナテ、磨理多少あり	良好	赤色粘土(9) 黒色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T91 12層	029	土器類	杯	—	17-	(6.4)	—	—	ロウロ	白粘土後ナテ、底面白粘土へらつた後ナテ、磨理多少あり	白粘土後ナテ	良好	赤色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T91 S1	030	土器類	杯	(15.0)	2.6-	—	—	—	ロウロ	白粘土後ナテ、ミダ手編みあり	白粘土後ナテ、ミダ手編みあり	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T91 12層	031	土器類	杯	—	13-	(7.6)	—	—	ロウロ	白粘土へらミナテ、底面白粘土へらミナテ、磨理あり	白粘土後ナテ、ミダ手編みあり	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元
NSJ T91 12層	032	土器類	瓶	—	17-	(6.2)	—	—	ロウロ	白粘土後ナテ、底面ナテ、磨理あり	ナテ後ミダ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、焼石、金部	(内) 赤褐色 (外) 黒褐色	反転度元

産地名	区番号	種別	銘柄	法量 (cm <sup>3</sup> ) 法元					成形	調剤及び調剤		焼成	敷土(石屑)	色調	備考
				口径/最大径	底径/最大径	底径/最大径	孔径	重量(g)		外面	内面				
NSJ T102 03	03	土師器	甕	(16.0)	42-	—	—	—	粘土組み上げ	ヨコナテ、ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、良石、陶質石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T101 04	04	土師器	甕	(15.0)	40-	—	—	—	ロウロ(粘土)組み上げ	ヨコナテ後ナテ、ヨコナテ	ヨコナテ、目焼ナテ、目焼ナテ後ナテ	良好	赤色粘土、良石、陶質石、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転焼成
NSJ T101 05	05	美濃器	部付	(17.0)	22-	—	—	—	ロウロ	底面: 目焼ヘウツリ後ナテ、目焼ナテ後ナテ	目焼ナテ後ナテ、目焼ナテ	良好	黒色粘土、赤色粘土、石灰、良石、陶質石、雲母	(内) 灰白色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T102 14 06	06	土師器	甕	(21.0)	100-	—	—	—	粘土組み上げ	ヨコナテ後ナテ、目焼ナテ後ナテ、目焼ナテ後ナテ、ナテ	付着物が多い	良好	赤色粘土、良石、陶質石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T105 03	03	土師器	杯	—	25-	(7.8)	—	—	ロウロ(粘土)組み上げ	ヨコナテ、底面: ナテ、取り付け、付着物あり	ナテ、厚減りあり	良好	赤色粘土、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T102 14 08	08	土師器	甕	(16.0)	72-	—	—	—	粘土組み上げ	ナテ、口縁部と外面の薄減りあり	ナテ、付着物多少あり	良	赤色粘土、黒色粘土、石灰、良石、陶質石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T102 12 09	09	土師器	瓶(肥子)	—	75-	—	—	—	粘土組み上げ、平口	コビササエ後ナテ、ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、石灰、陶質石、良石、雲母	(内) 黄褐色 (外) 黄白色	反転焼成
NSJ T101 14 04	04	土師器	鉢	(30.2)	33-	—	—	—	粘土組み上げ	ヨコナテ、ナテ	目焼ナテ後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、良石、陶質石、雲母	(内) 黄褐色 (外) 灰白色	反転焼成
NSJ T102 14 04	04	土師器	杯	—	14-	(6.6)	—	—	ロウロ	ナテ、底面: 目焼ヘウツリ後ナテ	ナテ、目焼ナテ	良	赤色粘土、赤色粘土、石灰、良石、陶質石、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転焼成
NSJ T102 14 04	04	美濃器	甕	—	15-	(9.6)	—	—	ロウロ	目焼ナテ、目焼ナテ後ナテ、底面: 目焼ヘウツリ後ナテ、目焼ナテ、高減り有り	目焼ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、良石、陶質石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T102 14 04	04	黒色土師器	甕	—	28-	(8.8)	—	—	ロウロ	目焼ナテ後ナテ、底面: ロウロ(粘土)組み上げ後ナテ	ナテ	良好	黒色粘土、石灰、良石、陶質石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T100 04	04	土師器	杯	—	13-	(8.6)	—	—	ロウロ	底面: ロウロ(粘土)組み上げ後ナテ	不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土(多) 雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転焼成
NSJ T105 04	04	土師器	甕	(30.8)	66-	—	—	—	粘土組み上げ	コビササエ後ナテ、目焼ナテ後ナテ	目焼ナテ、不定方向ナテ	良好	黒色粘土、石灰、良石、陶質石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T105 04	04	土師器	杯	—	12-	(5.8)	—	—	ロウロ	ナテ、底面: ナテ	ナテ、付着物あり	良好	良石(少) 雲母	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	反転焼成
NSJ T105 04	04	土師器	杯	—	30-	(7.0)	—	—	ロウロ	ナテ、底面: ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、良石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T105 04	04	土師器	杯	—	28-	(6.6)	—	—	ロウロ	ナテ、底面: ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、陶質石、黄褐色	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T105 04	04	土師器	杯	—	23-	(6.6)	—	—	ロウロ	ナテ、底面: ナテ	ナテ	良	赤色粘土、石灰、陶質石、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転焼成
NSJ T105 03	03	土師器	杯	(12.0)	32-	9.2	—	—	ロウロ	ナテ、厚減りあり、底面: 目焼ヘウツリ後ナテ	ナテ、ヨコナテ、不定方向ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T105 05	05	土師器	杯	12.4	2.4	6.8	—	—	ロウロ	ナテ、ヨコナテ、底面: 目焼ナテ後ナテ	ナテ、ヨコナテ、目焼ナテ後ナテ	良好	赤色粘土、赤色粘土(多)、黒色粘土、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T105 05	05	土師器	杯	(11.8)	2.9	(8.8)	—	—	ロウロ	ナテ、底面: ロウロ(粘土)組み上げ後ナテ	ナテ、ヨコナテ	良好	赤色粘土(多) 黒色粘土、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	—	23-	23-	—	—	ロウロ	ナテ、ナテ、底面: ロウロ(粘土)組み上げ後ナテ	ナテ、目焼ナテ後ナテ	良好	赤色粘土、赤色粘土、良石(少) 雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	(12.2)	33-	(8.8)	—	—	ロウロ	ナテ、ヨコナテ、底面: 目焼ナテ後ナテ	ナテ、ヨコナテ後ナテ	良好	赤色粘土、赤色粘土、良石、陶質石、雲母、金雲母(少)	(内) 褐色 (外) 褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	—	30-	(8.0)	—	—	ロウロ	目焼ナテ後ナテ、ナテ、底面: 目焼ヘウツリ後ナテ	ナテ、目焼ナテ後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、良石(少) 雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	—	16-	(7.8)	—	—	ロウロ	ナテ、ヨコナテ、底面: ロウロ(粘土)組み上げ後ナテ	目焼ナテ後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、良石、陶質石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	—	30	(8.6)	—	—	ロウロ	ナテ、底面: 目焼ヘウツリ後ナテ	ナテ、ヨコナテ後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、良石、陶質石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	—	09-	8.3-	—	—	ロウロ	ナテ、底面: 目焼ヘウツリ後ナテ	ナテ、目焼ナテ後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、良石、陶質石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	—	29	(8.6)	—	—	ロウロ	厚減りあり、ナテ、ヨコナテ後ナテ、底面: ロウロ(粘土)組み上げ後ナテ	ヨコナテ後ナテ、厚減りあり	良好	赤色粘土、黒色粘土、良石、陶質石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	(10.0)	31	(7.0)	—	—	ロウロ	目焼ナテ後ナテ、ナテ、底面: ロウロ(粘土)組み上げ後ナテ	目焼ナテ後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、良石、陶質石、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	—	25-	(8.2)	—	—	ロウロ	ナテ、底面: 目焼ヘウツリ後ナテ、付着物あり	ヨコナテ後ナテ、目焼ナテ後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、良石、陶質石、雲母	(内) 褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	—	28	(8.6)	—	—	ロウロ	ヨコナテ後ナテ、ナテ、底面: ロウロ(粘土)組み上げ後ナテ	目焼ナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、良石、陶質石、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	—	3.2	(8.6)	—	—	ロウロ	ヨコナテ(後ナテ)、工具ナテの付ナテ、底面: ロウロ(粘土)組み上げ後ナテ	ヨコナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、良石、陶質石、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	(12.0)	2.9	(8.4)	—	—	ロウロ	ヨコナテ後ナテ、ナテ、底面: ロウロ(粘土)組み上げ後ナテ	ヨコナテ後ナテ、目焼ナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、陶質石、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	(10.8)	2.9	(8.0)	—	—	ロウロ	ヨコナテ後ナテ、ナテ、底面: 目焼ヘウツリ後ナテ	ヨコナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石灰、陶質石、雲母	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	—	13-	7.7-	—	—	ロウロ	目焼ナテ、底面: 目焼ヘウツリ後ナテ	目焼ナテ	良好	赤色粘土(多)、黒色粘土、陶質石	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成
NSJ T106 03	03	土師器	杯	(15.4)	3.2	(12.0)	—	—	ロウロ	目焼ナテ、底面: 目焼ヘウツリ後ナテ	目焼ナテ、不定方向ナテ、目焼ナテ後ナテ	良好	赤色粘土(多) 黒色粘土(少) 陶質石、雲母(少)	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	反転焼成

選標名	頁番号	種別	形種	経路 (cm) 以上規定			選別	調整及び換算		選成	製上(石材)	色調	備考		
				口径/最大径	高さ/最大幅	底径/最大厚		質量 (kg)	外径					内径	
NS J T06 SI	069	土師貫土器	杯	—	08・	(78)	—	—	ロウロ	口縁ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	口縁ナデ、不定方向ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色(多)	黄褐色	反転産元
NS J T06 SI	070	土師貫土器	釜	—	48・	—	—	—	粘土結晶トビ	ヘラケズリ、コナナデ、取付部分無ナデ	コナナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	
NS J T06 SI	071	土師貫	杯	—	08・	55・	—	—	ロウロ	コナナデ、底径10cmヘラケ	ナデ(横溝無し)	良好	赤色粘土(多)、黄褐色、白色	赤色	
NS J T06 SI	072	土師貫土器	杯	2.5・	3.4	10・	—	—	ロウロ	コナナデ、底径10cm未満のナデ	コナナデ	良好	赤色粘土(多)、黄褐色、白色	黄褐色	
NS J T06 SI	073	土師貫土器	杯	2.0・	3.2	10・	—	—	ロウロ	コナナデ、底径10cm未満のナデ	コナナデ	良好	赤色粘土(多)、黄褐色、白色	黄褐色	
NS J T06 SI	074	土師貫土器	杯	(15.2)	31	(11.4)	—	—	ロウロ	コナナデ、ケズリ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ、不定方向ナデ	良好	赤色粘土(多)、黄褐色、白色	黄褐色	反転産元
NS J T06 SI	075	土師貫土器	杯	—	2.0・	(9.0)	—	—	ロウロ	コナナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ、不定方向ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色	黄褐色	反転産元
NS J T06 SI	076	土師貫土器	杯	—	2.4・	(9.6)	—	—	ロウロ	コナナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ、不定方向ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色	黄褐色	反転産元
NS J T06 SI	077	土師貫土器 (小) 杯	—	1.5・	(7.0)	—	—	—	ロウロ	コナナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色	黄褐色	反転産元
NS J T06 SI	078	土師貫土器	杯	—	08.0	30・	—	—	ロウロ	コナナデ、ヘラケズリ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ	良好	赤色粘土(多)、黄褐色	黄褐色	反転産元
NS J T06 SI	079	土師貫土器	杯	(11.2)	31	(7.4)	—	—	ロウロ	コナナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ、ナデ	良好	赤色粘土(多)、黄褐色	赤色	反転産元
NS J T06 SI	080	土師貫土器	杯	(12.8)	31	(9.4)	—	—	ロウロ	コナナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ、不定方向ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	
NS J T06 SI	081	土師貫土器	杯	—	1.4・	(8.6)	—	—	ロウロ	工具ナデ後ナデ、ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	赤色	反転産元
NS J T06 SI	082	土師貫土器	杯	—	2.9	03・	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ	コナナデ後ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色、白色	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	
NS J T06 SI	083	土師貫土器	皿	(6.4)	1.4	(5.4)	—	—	ロウロ	口縁ナデ後ナデ、底径10cm未満の浅ナデ、茶褐色の付着物	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色	赤色	反転産元
NS J T06 SI	084	土師貫土器	杯	—	2.4・	(9.0)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、底径10cm未満の浅ナデ、茶褐色の付着物	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	赤色	反転産元
NS J T06 SI	085	土師貫土器	杯	—	1.1・	(7.2)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、底径10cm未満の浅ナデ、茶褐色の付着物	ナデ、茶褐色の付着物	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	
NS J T06 SI	086	土師貫土器	皿	(7.8)	1.2	(6.0)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	黒色粘土、石系、黄褐色	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	
NS J T06 SI	087	土師貫土器	皿	(8.4)	1.5	(6.2)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	黒色粘土、石系、黄褐色	赤色	反転産元
NS J T06 SI	088	土師貫土器	皿	(7.6)	1.2	(7.0)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、茶褐色の付着物、底径10cm未満の浅ナデ	口縁ナデ後ナデ、ナデ、茶褐色の付着物	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色、白色	赤色	反転産元
NS J T06 SI	089	土師貫土器	皿	(9.0)	1.2	(8.2)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、茶褐色の付着物、底径10cm未満の浅ナデ	口縁ナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	赤色	反転産元
NS J T06 SI	090	土師貫土器	皿	(8.2)	1.0	(7.6)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	黄白色	反転産元
NS J T06 SI	091	土師貫土器	皿	(7.2)	1.3	(5.4)	—	—	ロウロ	ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	黄褐色	反転産元
NS J T06 SI	092	土師貫土器	皿	(8.8)	1.2	(8.0)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、茶褐色の付着物、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色、白色	赤色	反転産元
NS J T06 SI	093	土師貫土器	皿	(7.0)	1.3	(6.4)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色、白色	赤色	反転産元
NS J T06 SI	094	土師貫土器	皿	(6.4)	1.2	(6.0)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色、白色	赤色	反転産元
NS J T06 SI	095	土師貫土器	皿	(8.4)	1.2	(8.0)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色、白色	黄白色	反転産元
NS J T06 SI	096	土師貫土器	皿	(8.6)	1.2	(8.0)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色、白色	赤色	反転産元
NS J T06 SI	097	土師貫土器	皿	—	1.5	16・	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黄褐色、白色	赤色	
NS J T06 SI	098	土師貫土器	杯	—	2.9	—	—	—	ロウロ	口縁ナデ後ナデ、ナデ、茶褐色の付着物、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ、茶褐色の付着物	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	
NS J T06 SI	099	土師貫土器	皿	(7.8)	1.1	(6.6)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、茶褐色の付着物、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ、茶褐色の付着物	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	
NS J T06 SI	100	土師貫土器	皿	—	1.3	—	—	—	ロウロ	ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	
NS J T06 SI	101	土師貫土器	皿	(6.6)	1.0	(5.4)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、茶褐色の付着物、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ、茶褐色の付着物	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	
NS J T06 SI	102	土師貫土器	皿	—	1.1	1.4・	—	—	ロウロ	ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	
NS J T06 SI	103	土師貫土器	皿	(8.2)	1.0	(7.0)	—	—	ロウロ	コナナデ後ナデ、ナデ、底径10cm未満の浅ナデ	コナナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土(多)、黒色粘土、石系、黄褐色、白色	赤色	反転産元

産地名	区番号	種別	基 種	法量 (cm <sup>3</sup> ) は概元				成 形	測 定 方 法		検 査	取 上 (石種)	色 調	備 考
				口径/最大径	底径/最大径	孔径	重量 (g)		外面	内面				
NSJ T106 SI	104	土師瓦土器	Ⅲ	—	12-	18-	—	ロウロ	3コナテ後十テ、底部コ ロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 黄石、白石、陶石、 雲母	褐色	
NSJ T106 SI	105	土師瓦土器	Ⅲ	(6.0)	16	13.2	—	ロウロ	3コナテ後十テ、ナテ、底 部コロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 黄石、白石、陶石、 雲母	褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	106	土師瓦土器	Ⅲ	—	2.0	1.0-	—	ロウロ	不定方向十テ、ナテ、底 部コロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	褐色	
NSJ T106 SI	107	土師瓦土器	Ⅲ	—	11	11-	—	ロウロ	ナテ、底部コロウロの磨 し後十テ	ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭 (少) 灰石、陶 石、雲母	褐色	
NSJ T106 SI	108	土師瓦土器	Ⅲ	(10.6)	3.5	0.4	—	ロウロ	ナテ、底部コロウロの磨 し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土 (少)、黒色 粘土、石炭、灰石、 雲母	褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	109	土師瓦土器	Ⅲ	—	1.5-	1.7-	—	ロウロ	3コナテ後十テ、底部コ ロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 灰石、白石、雲母	(外) 褐色 (内) 暗褐色	
NSJ T106 SI	110	土師瓦土器	Ⅲ	(7.4)	16	7.6	—	ロウロ	3コナテ後十テ、ナテ、底 部コロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	(外) 褐色 (内) 暗褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	111	土師瓦土器	Ⅲ	—	16-	10-	—	ロウロ	ナテ、底部コロウロの磨 し後十テ	3コナテ後十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 灰石、雲母	褐色	
NSJ T106 SI	112	土師瓦土器	Ⅲ	—	1.5-	0.2	—	ロウロ	ナテ、底部コロウロの磨 し後十テ	3コナテ後十テ、不定 方向十テ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、雲母	褐色	
NSJ T106 SI	113	土師瓦土器	Ⅲ	—	1.0	1.3-	—	ロウロ	3コナテ後十テ、ナテ、底 部コロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 灰石、雲母	褐色	
NSJ T106 SI	114	土師瓦土器	Ⅲ	(11.4)	3.0	0.0	—	ロウロ	3コナテ後十テ、ナテ、底 部コロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 灰石、陶石、雲母	(外) 褐色 (内) 暗褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	115	土師瓦土器	Ⅲ	(7.2)	16	0.4	—	ロウロ	3コナテ後十テ、ナテ、底 部コロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 灰石、雲母	褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	116	土師瓦土器	Ⅲ	(11.0)	3.2-	0.2	—	ロウロ	3コナテ後十テ、底部3目 転車切の	3コナテ後十テ、十テ 後不定方向十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 灰石、陶石、雲母	褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	117	土師瓦土器	Ⅲ	—	3.2	1.0-	—	ロウロ	ナテ、底部コロウロの磨 し後十テ	ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	褐色	
NSJ T106 SI	118	土師瓦土器	Ⅲ	(12.0)	3.2-	0.0	—	ロウロ	不定方向十テ後十テ、ナ テ、底部3目転車切の 後十テ	3コナテ後十テ、不定 方向十テ後十テ、ナ テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	119	土師瓦土器	Ⅲ	—	1.0-	3.0-	—	ロウロ	3コナテ後十テ、底部3目 転車切の	3コナテ後十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 灰石、陶石、雲母	褐色	
NSJ T106 SI	120	土師瓦土器	Ⅲ	—	0.9-	0.8	—	ロウロ	ナテ、底部3目転車切の 後不定方向十テ	不定方向十テ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	121	土師瓦土器	Ⅲ	(6.8)	1.0	0.2	—	ロウロ	3コナテ後十テ、ナテ、底 部コロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、不定 方向十テ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	(外) 褐色 (内) 暗褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	122	土師瓦土器	Ⅲ	—	2.2-	—	—	ロウロ	ナテ、茶色の付着物あ り	ナテ、茶色の付着 物あり	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	褐色	
NSJ T106 SI	123	土師瓦土器	Ⅲ	(7.0)	0.9	6.8	—	ロウロ	3コナテ、ナテ、底部コウ ロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	124	土師瓦土器	Ⅲ	(11.6)	3.5	0.6	—	ロウロ	3コナテ後十テ、ナテ、底 部コロウロの磨し後十テ	ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	125	土師瓦土器	Ⅲ	—	1.2-	1.1-	—	ロウロ	3コナテ後十テ、ナテ、底 部コロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、陶石、雲 母	褐色	
NSJ T106 SI	126	土師瓦土器	Ⅲ	—	2.6	—	—	ロウロ	ナテ	3コナテ後十テ	良好	赤色粘土、灰石、陶石 、雲母	褐色	
NSJ T106 SI	127	土師瓦土器	Ⅲ	(6.7)	1.1	7.4	—	ロウロ	ナテ、底部3目転車切の 後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 灰石、陶石、雲母	褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	128	土師瓦土器	Ⅲ	—	2.9-	1.08	—	ロウロ	不定方向十テ、底部コウ ロウロの磨し後十テ	不定方向十テ、コナ テ後十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、雲 母	褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	129	土師瓦土器	Ⅲ	—	1.2	2.1-	—	ロウロ	3コナテ後十テ、底部コ ロウロの磨し後十テ	ナテ、茶色の付着物あ り	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	(外) 暗褐色 (内) 褐色	
NSJ T106 SI	130	土師瓦土器	Ⅲ	—	2.9-	0.6-	—	ロウロ	3コナテ後十テ、底部コ ロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	褐色	
NSJ T106 SI	131	土師瓦土器	Ⅲ	—	1.2	2.4-	—	ロウロ	3コナテ後十テ、ナテ、底 部コロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 灰石、陶石、雲 母	褐色	
NSJ T106 SI	132	土師瓦土器	Ⅲ	—	1.6-	1.2-	—	ロウロ	3コナテ後十テ、底部3目 転車切の	ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	褐色	
NSJ T106 SI	133	土師瓦土器	Ⅲ	(7.8)	1.1	7.8	—	ロウロ	ナテ、底部コロウロの磨 し後十テ(底オサエ1.9 程度)	ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、陶石、 雲母	褐色	反転陶元
NSJ T106 SI	134	土師瓦土器	Ⅲ	—	1.9-	1.0-	—	ロウロ	ナテ、底部3目転車切の 後十テ	3コナテ後十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、雲母	褐色	
NSJ T106 SI	135	土師瓦土器	Ⅲ	—	1.0-	3.7-	—	ロウロ	3コナテ、底部不定方向 十テ	不定方向十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、雲母	褐色	
NSJ T106 SI	136	土師瓦土器	Ⅲ	—	1.9-	1.2-	—	ロウロ	ナテ、底部コロウロの磨 し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石炭、灰石、雲 母	褐色	
NSJ T106 SI	137	土師瓦土器	Ⅲ	(8.4)	1.1	7.2	—	ロウロ	3コナテ後十テ、ナテ、底 部コロウロの磨し後十テ	3コナテ後十テ、十テ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 灰石、雲母	褐色	反転陶元

選標名	R番号	種類	材種	経路 (cm) 以上規定					説明	調整及び換路		構造	軌上(石材)	色調	備考
				口径/最大径	最高/最大幅	底径/最大巻	孔径	重量 (kg)		外側	内側				
NS J T06 S1	138	土師瓦土器	皿	(7.0)	1.3	(8.6)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、角閃石、雲母	褐色	反転還元
NS J T06 S2	139	土師瓦土器	皿	—	1.1	(26)	—	—	ロウロ	ナテ、底部ロウロ切離し後ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、雲母	褐色	—
NS J T06 S3	140	土師瓦土器	皿	—	1.2	(19)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	ナテ、底部中央部切離し後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、雲母	褐色	—
NS J T06 S4	141	土師瓦土器	杯	—	1.8	(106)	—	—	ロウロ	ナテ、底部中央部切離し後ナテ	ナテ、底部中央部切離し後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、雲母	褐色	反転還元
NS J T06 S5	142	土師瓦土器	杯	—	2.1	(78)	—	—	ロウロ	不定方向ナテ、底部ロウロ切離し後ナテ	不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、角閃石、雲母	褐色	反転還元
NS J T06 S6	143	土師瓦土器	皿	(6.0)	1.0	(58)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、角閃石、雲母	褐色	反転還元
NS J T06 S7	144	土師瓦土器	皿	(7.0)	1.6	(70)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、不定方向ナテ、底部中央部切離し後ナテ	不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、雲母	褐色	反転還元
NS J T06 S8	145	土師瓦土器	皿	—	1.2	(29)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	—
NS J T06 SP1	146	土師瓦土器	皿	7.6	1.4	6.4	—	—	ロウロ	ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、石高、長石、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	完形品
NS J T06 SP2	147	土師瓦土器	杯	12.1	3.1	8.8	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、雲母	褐色	完形品
NS J T06 SP3	148	土師瓦土器	杯	(12.2)	3.0	(8.8)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、角閃石、(9) 雲母	褐色	反転還元
NS J T06 SP9	149	土師瓦土器	杯	(12.2)	3.3	(9.4)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、(9) 雲母	褐色	反転還元
NS J T06 SP11	150	土師瓦土器	杯	(13.2)	3.2	(9.6)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、底部中央部切離し後ナテ	不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、(9) 雲母、(9) 雲母	褐色	反転還元
NS J T06 SP10	151	土師瓦土器	杯	(12.6)	3.7	(10.0)	—	—	ロウロ	ナテ、底部中央部切離し後ナテ	不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、角閃石、(9) 雲母	褐色	反転還元
NS J T06 SP14	152	土師瓦土器	皿	7.8	1.15	6.9	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、(9) 雲母、(9) 雲母	褐色	完形品
NS J T06 SP15	153	土師瓦土器	杯	(13.0)	3.0	(9.6)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、角閃石、雲母	褐色	反転還元
NS J T06 SP5	154	土師瓦土器	杯	—	2.0	13	—	—	ロウロ	ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、(9) 雲母	褐色	—
NS J T06 SP1	155	土師瓦土器	杯	11.8	3.75	9.2	—	—	ロウロ	ナテ、コナナテ後ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、雲母	褐色	底部に底面に空けた厚肉部分あり
NS J T06 SP3	156	土師瓦土器	杯	(12.2)	3.7	(9.0)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、角閃石	褐色	反転還元
NS J T06 SP2	157	土師瓦土器	杯	12.0	3.3	9.0	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、角閃石、長石	褐色	—
NS J T06 SP6	158	土師瓦土器	杯	10.4	3.75	8.2	—	—	ロウロ	ナテ、コナナテ後ナテ、底部中央部切離し後ナテ	ナテ、コナナテ後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、角閃石、長石、雲母	褐色	—
NS J T06 S1	159	黒色土器 A類	杯	—	3.1	(68)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、角閃石、長石、雲母	(内) 褐色 (外) 黒灰色	—
NS J T10	160	土師瓦土器	杯	—	1.1	(70)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、角閃石、長石、雲母	褐色	反転還元
NS J T10	161	黒色土器 A類	瓶	—	1.3	(6.8)	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、量り付付有白、底部不定方向ナテ、ナテ	不定方向ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転還元
NS J 5 S15	162	土師器	杯	—	1.7	2.4	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、雲母	褐色	—
NS J 5 S1	163	土師器	杯	—	3.5	1.2	—	—	ロウロ	不定方向ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	不定方向ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	—
NS J 5 S1	164	土師瓦土器	皿	—	1.7	20	—	—	ロウロ	ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、角閃石、長石、雲母	褐色	—
NS J 5 S14	165	土師瓦土器	皿	—	1.0	18	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ、底部中央部切離し後ナテ	コナナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、長石、雲母	褐色	—
NS J T08	166	黄文土器	鉢	—	2.15	(9.6)	—	—	—	ナテ、底部中央部切離し後ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、石高、長石、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	反転還元
NS J T07	167	瓦瓦土器	磁葺	—	2.3	(8.6)	—	—	ロウロ	ナテ、コナナテ後ナテ、底部中央部切離し後ナテ	ナテ、ナテ後ナテ(半単位)	良好	黒色	褐色	反転還元
NS J T10	168	土師瓦土器	瓶	—	4.0	—	—	—	ロウロ	コナナテ後ナテ、ナテ	ナテ	良好	石高(影)長石(影)角閃石	(内) 褐色 (外) 褐色	—
NS J T10	169	土師瓦土器	瓶	(26.2)	39	—	—	—	ロウロ	ナテ	ナテ	良好	黒色粘土、長石、角閃石	(内) 褐色 (外) 褐色	反転還元
NS J 5 S14	170	土師器	瓶	—	4.8	—	—	—	—	ナテ後ナテ、ナテ後ナテ、ナテ後ナテ	ナテ後ナテ、ナテ後ナテ、ナテ後ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石高、角閃石、長石、雲母	(内) 褐色 (外) 褐色	—

産物名	R番号	種類	銘柄	法量 (cm <sup>3</sup> ) は元元					成形	調剤及び調剤		構成	散土 (石等)	色調	備考
				工深 / 最大径	底径 / 最大径	底径 / 最大径	孔径	重量 (g)		外形	内径				
NS J 5 50	171	土師瓦土器	皿	(73)	11	6.00	—	—	ロウロ 土器土 上	ナデ、埋蔵少あり。底径、 ロウロ切らぬし埋蔵不定 形ナデ	ナデ、ヨコナデ埋蔵 ナデ、不定形ナデ、埋 蔵少あり	良好	赤色粘土、黒色粘土、 石瓦、灰石、陶質石、 雲母	褐色	
NS J T92 14 新	172	土師器	杯	90	40	4.2	—	—	手捏	ナデ、底面に埋蔵あり、底 径ナデ	ナデ	良好	赤色粘土 (石瓦 (多) 長石、陶質石、雲母 (少))	(内) 陶質灰色 (内) 深褐色	
NS J T107	173	古磁	皿	—	6.0	—	—	—	ロウロ	磁輪	磁輪	良好	赤	(全体) 褐色 (全体) 薄緑色	
NS J T109 5	174	黒色土師 A 磁	皿	—	3.35	6.2	—	—	ロウロ	磁輪	磁輪	良好	ナデ埋蔵あり、石瓦、 雲母	(内) 褐色 (内) 灰褐色	
NS J T118	175	陶器	皿	—	5.4	5.00	—	—	ロウロ	磁輪	磁輪	良好	磁器	(全体) 赤褐色 模様、褐色 (全体) 薄褐色	反転瓦元
NS J T115 5	176	瓦葺土器	鉢	—	6.0	128.0	—	—	ロウロ	ナデ埋蔵あり、ナデ埋 蔵スタンプ、ナデ、底径ロウ ロ切らぬし埋蔵ナデ	ナデ埋蔵あり、ナデ、 白色粘土、長石、陶質 石、雲母	良好	赤色粘土、黒色粘土、 白色粘土、長石、陶質 石、雲母	褐色	反転瓦元
NS J T120	177	陶器	皿	—	6.4	—	—	—	ロウロ	磁輪、自然陶、3本の泥 筋	一部磁輪、江戸磁 器	良好	磁器、赤色粘土	(内) 濃茶色 (内) 灰色 (褐色) 透明	内腐瓦
NS J T120	178	肥前磁器	染付焼	—	5.4	—	—	—	ロウロ	染付のち磁輪	ごく一部磁輪であと は磁輪	良好	磁器	(全体) 白色 褐色 (褐色) 透明	
NS J T120	179	陶器染付	皿	—	3.8	—	—	—	ロウロ	磁輪	磁輪	良好	赤	(全体) 褐色 模様、褐色 (褐色) 透明	17 c 埋蔵 ~ 18 c 中埋
NS J T118	180	瓦葺土器	鉢	—	2.6	23.2	—	—	ロウロ	ヨコナデ埋蔵ナデ、底径、 埋蔵瓦	埋蔵ナデ埋蔵ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 長石 (少) 陶質石 (少)	(内) 褐色 (内) 薄褐色	反転瓦元
NS J T117 5	181	土製	仏像	5.3	21	2.5	—	—	手捏 (工 具使用)	—	—	良好	赤色粘土、黒色粘土、 雲母	褐色	底 部 に 直 径 0.3mm、深さ約 0.8mm の穴あ き
NS J T120	182	磁器	染付焼	—	2.7	3.8	—	—	ロウロ	磁輪	磁輪	良好	磁器	(全体) 白色 褐色、褐色 (褐色) 透明	
NS J T120	183	磁器	染付焼	—	4.6	—	—	—	ロウロ	磁輪	磁輪	良好	磁器	(全体) 白色 褐色、褐色 (褐色) 透明	
NS J T120	184	肥前磁器	染付焼	—	4.5	4.7	—	—	ロウロ	磁輪、高台に二重泥筋、体 部に二重泥筋と模様	磁輪	良好	磁器	(全体) 白色 褐色、褐色 (褐色) 透明	中央部並に (内) 半割埋蔵品よ うの一割の
NS J T120	185	肥前磁器	染付 磁石	5.3	4.9	3.2	—	—	ロウロ	磁輪、体部に模様あり	磁輪	良好	磁器	(全体) 白色 褐色、褐色 (褐色) 透明	反転瓦元
NS J T120	186	肥前磁器	皿	(9.8)	3.65	—	—	—	ロウロ	磁輪、体部に丸い1本の 泥筋、および彫刻・模様	磁輪	良好	磁器	(全体) 白色 褐色、褐色 (褐色) 透明	反転瓦元
NS J T120	187	陶器 (灰滑)	皿	(9.4)	5.25	—	—	—	ロウロ	磁輪、前口付	磁輪	良好	磁器	(全体) 赤褐色 縞、白色 (褐色) 透明	反転瓦元
NS J T120	188	陶器 (灰滑)	皿	—	6.2	0.60	—	—	ロウロ (長形)	磁輪、口付ヘラウズリ、底 径3枚ヘラウズリ、口付 ナデ、ナデ	口付ナデ、一部磁輪	良好	磁器	(内) 薄褐色 (内) 褐色 (内) 褐色	反転瓦元
NS J T120	189	陶器	蓋	(8.6)	2.05	(4.0)	—	—	ロウロ	磁輪 (一部穴開けあり)	口付ナデ、口付ナデ埋 蔵ナデ	良好	磁器	(外) 白色 (内) 灰褐色 (褐色) 概 色 (褐色) 透明	九州や関西 内、反転瓦元
NS J T120	190	陶器	鉢	—	3.7	(7.6)	—	—	ロウロ	口付ナデ埋蔵ナデ、埋蔵 あり、底径ロウロ切らぬ し埋蔵ナデ、口付ナデ	口付ナデ、底径二重 泥筋	良好	磁器	(内) 黄褐色 (内) 薄褐色	九州や関西内、反 転瓦元
NS J T119	191	瓦葺土器	磁鉢	—	3.9	1.42	—	—	ロウロ	ヨコナデ埋蔵ナデ、不定 形ナデ、底径ロウロ切 らぬし埋蔵ナデ	ヨコナデ (5 ~ 6 葉)、 ナデ	良好	磁器	灰色	反転瓦元
NS J T120	192	陶器	磁鉢	—	7.8	0.26	—	—	ロウロ	口付ヘラウズリ埋蔵磁 輪、口付ナデ、底径3枚 ヘラウズリ埋蔵ナデ、口 付ヘラウズリ、口付ナ デ、口付ナデ	ヨコナメ (11 ~ 12 葉)	良好	磁器	(内) 茶色 (内) 褐色 (内) 濃茶色	反転瓦元
NS J T120	193	陶器	磁鉢	—	7.6	0.28	—	—	ロウロ	口付ヘラウズリ、口付ナ デ、口付ナデ、口付ナ デ、口付ヘラウズリ	ヨコナメ (前 17 ~ 18 葉)	良好	磁器	(内) 茶色 (内) 灰褐色	反転瓦元
NS J T125	194	陶器	磁鉢	—	9.3	0.48	—	—	ロウロ	口付ナデ埋蔵ナデ埋蔵 磁輪、口付ナデ、口付ナ デ埋蔵ナデ、底径3枚ヘ ラウズリ埋蔵ナデ、口 付ヘラウズリ埋蔵ナデ、口 付ヘラウズリ埋蔵ナ デ、口付ヘラウズリ	ヨコナメ (前 11 葉)	良好	磁器	(内) 濃茶色 (内) 茶色 (褐色) 濃茶色	反転瓦元
NS J T150	195	土師器	小型 丸底筒	—	7.5	—	—	—	粘土練み 上げ	ヨコナデ、不定形 (工 具) ナデ	ナデ、不定形ナデ	良好	赤色粘土 (多) 黒色 粘土、石瓦、長石、 陶質石、雲母	(内) 濃褐色 (内) 薄褐色	
NS J T172	196	縄文土器	磁鉢	27.8	16.6	—	—	—	粘土練み 上げ	ヨコナデ埋蔵ナデ、ナ デ、貝殻染付埋蔵ナ デ	貝殻染付埋蔵ナ デ	良好	赤色粘土、黒色粘土、 長石 (多) 陶質石	(内) 濃褐色 (内) 灰褐色	
NS J T172	197	縄文土器	磁鉢	—	2.8	—	—	—	粘土練み 上げ	ヨコナデ埋蔵ナデ、ナ デ	貝殻染付	良好	赤色粘土、長石 (多) 陶質石、雲母	(内) 濃褐色 (内) 灰褐色	
NS J T139	198	陶器染付	皿	(9.4)	5.2	—	—	—	ロウロ	磁輪	磁輪	良好	磁器	(全体) 濃緑色 模様、褐色 (褐色) 透明	反転瓦元
NS J T140	199	陶器	磁鉢	33.4	14.45	—	—	—	ロウロ	口付ナデ埋蔵ナデ、口付 ナデ (工具使用)	口付ナデ、ヨコナ メ (10 葉)	良好	磁器	(内) 茶褐色 (内) 茶色	反転瓦元
NS J T143	200	縄文土器	磁鉢	—	2.5	—	—	—	粘土練み 上げ	口付ナデ埋蔵品に1本の泥 筋、ナデ、口付ナデ埋蔵 あり	工具ナデ埋蔵ナ デ、ナデ埋蔵ナ デ	良	赤色粘土、石瓦、長 石 (多) 陶質石、雲 母	(内) 茶褐色 (内) 概褐色	

遺構名	R番号	種類	図種	法量 (cm) は概元					形状		用途	土質 (石材)	色調	備考	
				口径 / 最大径	高さ / 最大幅	底径 / 最大幅	高さ / 最大幅	法量 (g)	外形	内面					
NS J T100	200	祭祀系器類	土碗	—	23-	13.0	—	—	口ウロ	無釉	無釉	良好	黄緑	(全体) 白色 (喉部) 赤色 (縁部) 透明	反転陶元
NS J T143	202	陶文土器	深鉢	—	40-	—	—	—	粘土積み上げ	口縁部付近に3本の浅彫、その1本目と2本目の間に横文、ナデ	ナデ	良好	黒色粘土、長石、角閃石、長石 (少)、黄褐色	(内) 濃茶褐色 (外) 黒茶褐色	
NS J T143	203	陶文土器	深鉢	—	56-	—	—	—	粘土積み上げ	口縁部付近に2本の浅彫、横文、工具ナデ後ナデ、ナデ	ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、長石、角閃石、黄褐色	(内) 濃茶褐色 (外) 赤褐色	
NS J T143	204	陶文土器	深鉢	—	43-	—	—	—	粘土積み上げ	横文、浅彫、口コナデ後ナデ、ナデ	ナデ	良好	黒石 (多)、黒色粘土、角閃石、長石	(内) 黒灰褐色 (外) 濃茶褐色	
NS J T143	205	陶文土器	深鉢	—	415-	—	—	—	粘土積み上げ	浅彫、ナデ後ナデ、ナデ	口コナデ後ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、長石、角閃石、黄褐色	(内) 濃茶褐色 (外) 赤褐色	
NS J T143	206	陶文土器	深鉢	—	46-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口縁部3本の浅彫、その2本目と3本目の間に横文	浅彫後ナデ	良好	赤色粘土 (少)、黒色粘土、長石 (多)、角閃石、黄褐色	(内) 灰白色 (外) 赤褐色	
NS J T143	207	陶文土器	深鉢	—	60-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口縁部に横文少々の	ナデ	良好	白磁粘土、長石 (少)、黄褐色、角閃石 (少)	(内) 淡紫灰褐色 (全体) 白色	
NS J T100	208	祭祀系器類	甕	—	33-	38	—	—	口ウロ	安付、無釉、体部文様有、横、彫文、体人形、腰懸、高台部分に1本の浅彫あり	無釉	良好	黄緑	(全体) 薄白色 (喉部) 赤色 (縁部) 透明	18c前~中頃
NS J T172	209	陶文土器	甕	—	65-	—	—	—	粘土積み上げ	斜口突部、口コナデ後ナデ、ナデ	口縁染込	良好	黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄緑、黄褐色、黄緑、黄褐色	濃茶褐色	
NS J T172	210	陶文土器	深鉢	—	205-	10.8	—	—	粘土積み上げ	口コナデ後ナデ、横文あり、高台部付、底彫、口コナデ後ナデ、ナデ	ナデ	良好	黒色粘土、白磁粘土、黄褐色、黄褐色	赤褐色	
NS J T172	211	陶文土器	深鉢	—	26-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、ユビオサエ後ナデ、へう切後ナデ	ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	濃茶褐色	
NS J T172	212	陶文土器	深鉢	—	35-	—	—	—	粘土積み上げ	口コナデ後ナデ、ナデ、突部付	口コナデ後ナデ、ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、長石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	濃茶褐色	
NS J 143	213	陶文土器	深鉢	—	30-	—	—	—	粘土積み上げ	浅彫、口縁部の横文になっている、およびヒキ、ケズリ後ミダシ、横文	ナデ	良好	赤色粘土、白磁粘土、長石、角閃石、黄褐色	濃茶褐色	
NS J T172	214	陶文土器	深鉢	—	49-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、浅彫	丁寧なナデ	良好	黒色粘土、白磁粘土、長石、長石、角閃石、黄褐色	(内) 灰白色 (外) 濃茶褐色	
NS J T172	215	陶文土器	深鉢	—	37-	—	—	—	粘土積み上げ	へう切後ナデ、口コナデ後ナデ、工具による斜口突部 (部分付)	口縁染込、横文あり	良好	赤色粘土、黒色粘土、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	(内) 赤褐色 (外) 黒茶褐色	下製形式
NS J T172	216	陶文土器	深鉢	—	44-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口コナデ後ナデ、ユビオサエ後ナデ、浅彫、横文、(部分付、黄褐色)	横文あり (口縁染込)	良好	黒色粘土、白磁粘土、長石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	濃茶褐色	
NS J T172	217	陶文土器	深鉢	—	42-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、ユビオサエ、突部、文、口コナデ後ナデ	口コナデ後ナデ (兼縁部)	良好	黒色粘土、白磁粘土、長石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	(内) 赤褐色 (外) 黒茶褐色	
NS J T174	218	土師器	甕	—	45-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口コナデ後ナデ	ナデ、工具ナデ後ナデ、ハナ後ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	(内) 赤褐色 (外) 濃茶褐色	
NS J T174	219	土師器	甕	(15.8)	95-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、浅彫、口コナデ後ナデ、工具ナデ後ユビオサエ、工具ナデ後ユビオサエ、工具ナデ後ユビオサエ、不定形ナデ	口コナデ後ナデ、ナデ、不定形ナデ、工具ナデ後ナデ、ユビオサエ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	(内) 赤褐色 (外) 濃茶褐色	反転陶元
NS J T174	220	土師器	甕	(21.0)	70-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口コナデ後ナデ、ナデ、ユビオサエ後ナデ、不定形ナデ	口コナデ後ユビオサエ後ナデ、ユビオサエ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	濃茶褐色	反転陶元
NS J T174 P2	221	土師器	甕	—	25-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口コナデ後ナデ	ナデ、口コナデ後ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	(内) 濃茶褐色 (外) 濃茶褐色	
NS J T174	222	土師器	甕	—	29-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口コナデ後ナデ	口コナデ後ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	(内) 濃茶褐色 (外) 濃茶褐色	
NS J T174	223	土師器	甕	(20.2)	84-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口コナデ後ユビオサエナデ、口コナデ後ナデ	口コナデ後ナデ、工具ナデ後口コナデ後ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	(内) 赤褐色 (外) 赤褐色	反転陶元
NS J T174	224	土師器	甕	—	47-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口コナデ後ナデ	ナデ、口コナデ後ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	(内) 赤褐色 (外) 赤褐色	
NS J T185 SIP	225	土師器	甕	—	22-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口コナデ後ナデ、へう切後ナデ	ナデ、口コナデ後ナデ	良好	赤色粘土 (多)、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	(内) 灰白色 (外) 濃茶褐色	
NS J T185	226	土師器	甕	—	21-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口コナデ後ナデ	ナデ、口コナデ後ナデ	良好	赤色粘土 (多)、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	濃茶褐色	
NS J T180	227	土師器	甕	—	27-	—	—	—	粘土積み上げ	へう切後ナデ、口コナデ後ナデ	ナデ、口コナデ後ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	(内) 濃紫灰褐色 (外) 濃茶褐色	
NS J T174 P2	228	土師器	甕	—	72-	—	—	—	粘土積み上げ	ナデ、口コナデ後ナデ、不定形ナデ	ナデ、口コナデ後ナデ	良好	赤色粘土、黒色粘土、黒色粘土、石、長石、角閃石、黄褐色、黄褐色	(内) 赤褐色 (外) 濃茶褐色	
NS J T185	229	土師器	甕	—	28-	—	—	—	粘土積み上げ (5)	ナデ、口コナデ後ナデ	ナデ、口コナデ後ナデ	良好	赤色粘土 (多)、黒色粘土、白磁粘土、長石 (少)、黄褐色、角閃石 (少)	(内) 灰白色 (外) 濃茶褐色	220、223と同一個体の複製体あり

産地名	R番号	種類	銘柄	法量 (cm <sup>3</sup> ) は元元				成形	調剤及び調剤		糖度	酸上(%)	色調	備考
				工数/総工数	底径/総底径	孔径	厚量(g)		外面	内面				
NS J T85	230	土瓶	煮	—	23*	—	—	粘土組み 13F (7)	ナテ、ヨコナテ、ヨコナテ後ナテ	工具用 ヨコナテ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 茶褐色	R229、R231と同一個体の可能性あり
NS J T85	231	土瓶	煮	—	29*	—	—	粘土組み 13F (7)	ナテ、ヨコナテ	ナテ(工具用) ヨコナテ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 茶褐色	R229、R230と同一個体の可能性あり
NS J T174	232	土瓶	煮	(260)	11.5*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、ヨコナテ後ナテ	ナテ、ヨコナテ後ナテ、ナテ、ナテ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元
NS J T174	233	土瓶	煮	(22.4)	32.5	107*	—	粘土組み 13F	ナテ、ヨコナテ後ナテ、工具ナテ後ナテ	ヨコナテ後ナテ、工具ナテ後ナテ、ナテ後ナテ、ナテ後ナテ、ナテ、ユビオサエナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 茶褐色	反転陶元
NS J T174	234	土瓶	煮	(90)	17.2*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、工具(ハウチ)	ナテ、工具(ハウチ)ナテ後ナテ、ナテ後ナテ、ユビオサエナテ	良好	黒色系(多) 赤色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 茶褐色	反転陶元
NS J T85 SIP1	235	土瓶	6面F	(22.5)	19*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、ヨコナテ後ナテ、工具ナテ後ナテ	ナテ後ナテ、ナテ後ナテ、ナテ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元
NS J T85 SIP2	236	土瓶	6面F(7)	—	26*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、工具ナテ後ナテ、工具ナテ後ナテ	ナテ、ナテ後ナテ、工具(ハウチ)ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元
NS J T88	237	陶器	編織	—	40*	—	—	ロウロ	18面ナテ後ナテ、(1.1.1.) ナテ、文様	18面(工具) ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	生産地不明(関西?)
NS J T85	238	土瓶	煮	—	45*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、工具ヨコナテ後ナテ、工具ヨコナテ後ナテ、ユビオサエナテ	工具ヨコナテ後ナテ、ユビオサエナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 茶褐色	R242と同一個体の可能性あり
NS J T174	239	土瓶	煮	(10.0)	80*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、ヨコナテ後ナテ、工具ナテ後ナテ、厚縁多少あり、底縁あり	ナテ、工具ヨコナテ後ナテ、ナテ、ナテ後ナテ、工具ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	R240と同一個体の可能性あり
NS J T174	240	土瓶	煮	—	2.1*	6.6*	—	粘土組み 13F (7)	ナテ、厚縁あり	ユビオサエ、工具ナテ、ナテ後ナテ、工具ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 赤褐色	R239と同一個体の可能性あり
NS J T175	241	青磁	煮	—	19*	—	—	ロウロ	筒輪	筒輪	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	生産地不明(関西?)
NS J T85 SIP1	242	土瓶	煮	—	38*	—	—	粘土組み 13F (7)	ナテ、ナテ後ナテ	ナテ、ナテ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	R238と同一個体の可能性あり
NS J T85	243	土瓶	6面F	(14.0)	3.1*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、ヨコナテ後ナテ、工具ナテ後ナテ	ナテ後ナテ、ナテ後ナテ、ナテ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元
NS J T174	244	土瓶	煮	(18.0)	95*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、ヨコナテ後ナテ、ユビオサエナテ、厚縁あり	ヨコナテ後ナテ、工具ナテ後ナテ、ユビオサエナテ、厚縁あり	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	古墳陶器(6c頃)
NS J T80 S1	245	陶器	研削	—	16*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、18面ナテ	ナテ、18面ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元
NS J T85	246	土瓶	ミニチュア土瓶	3.9	3.2	0.7*	—	手捏	ナテ、ナテ後ユビオサエ、底縁の全てと体部の1/3にかけて底縁あり	ナテ、工具ナテ後ナテ、ユビオサエ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元
NS J T174 P2	247	土瓶	煮	(22.0)	28.2	8.0*	—	粘土組み 13F	ナテ、ヨコナテ後ナテ、工具ナテ後ナテ、ユビオサエナテ、ナテ、ユビオサエ	ナテ、ヨコナテ後ナテ、ナテ、ナテ後ナテ、工具ナテ後ナテ、ユビオサエナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元
NS J T178	248	瓦質土瓶	火焼	—	5.15*	—	—	粘土組み 13F	ヨコナテ後ナテ、18面ナテ後ナテ	ヨコナテ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元
NS J T85 SIP1	249	土瓶	煮	(18.0)	4.8*	—	—	粘土組み 13F	ハウチ切り後ナテ、ハウチナテ、ハウチ縁	ハウチ後ナテ、ナテ後ナテ、ナテ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	R250と同一個体の可能性あり
NS J T85 SIP1	250	土瓶	煮	—	3.1*	—	—	粘土組み 13F (7)	ナテ、ハウチ後ナテ、ハウチ縁	ハウチ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 茶褐色	R249と同一個体の可能性あり
NS J T85	251	土瓶	煮or 鉢	(14.0)	2.65*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、ヨコナテ後ナテ	ナテ、ヨコナテ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元
NS J T85	252	土瓶	煮	(16.8)	30*	—	—	粘土組み 13F	ハウチ切り後ナテ、18面ナテ後ナテ、ナテ	18面ナテ後ナテ、ナテ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 茶褐色	反転陶元
NS J T85	253	土瓶	煮	(16.2)	30*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、18面ナテ後ナテ	18面ナテ後ナテ、ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元
NS J T85	254	土瓶	煮or 壺	(13.0)	3.15*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、ヨコナテ後ナテ、ヨコナテ後ナテ、ユビオサエ、ハウチ切り後ナテ	ヨコナテ後ナテ、ユビオサエナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元
NS J T85	255	土瓶	煮	(12.2)	2.3*	—	—	粘土組み 13F	ナテ、ヨコナテ後ナテ、ヨコナテ後ユビオサエ	ヨコナテ後ナテ	良好	赤色系(多) 黒色系(多) 白粉系(多) 石炭、炭石(少) 結晶片状、角閃石、雲母	(内) 黄褐色	反転陶元





選種名	登録番号	種別	群種	経緯 (cm) 以上規定				説明	調製及び調製		感度	粒上 (石材)	色調	備考
				口径 / 最大径	篩目 / 最大径	篩目 / 最大径	篩目		篩目	外面				
NSJ15015 P22	314	赤生土	黄	—	29-	—	—	粘土結み 1.5F	ナデ, 工具ナデ後ナデ, 第 9(付)付発露文	ナデ	良好	赤色粘土 (赤) 白 色粘土 (黄, 黄, 赤, 黄) 結晶片 (赤), 雲母	暗褐色	
NSJ1207 同 SI	315	土師器	黄	(10)8	425+	—	—	粘土結み 1.5F	ナデ, 工具ナデ後ナデ	ナデ	良好	赤色粘土 (赤) 白 色粘土 (赤), 結晶片 (赤) (赤), 雲母 (赤)	薄黄白色	灰化層元
NSJ1207 SI	316	赤生土	黄白C緑白	(14)2	60-	—	—	粘土結み 1.5F	ナデ, 工具ナデ後ナデ, 付 発露文	ナデ, 工具ナデ後ナ デ, ココナデ後ナデ	良好	赤色粘土 (赤) 白 色粘土 (赤), 結晶片 (赤) (赤), 雲母 (赤)	薄黄褐色	灰化層上同一層 体の可能性あり, 灰化層元
NSJT105	317	土師器	黄C黄	—	174-	—	—	粘土結み 1.5F	ナデ, コビオヤエ	工具ナデ後ナデ	良好	赤色粘土, 白結晶片 石, 黄, 結晶片 (赤) (赤), 雲母	(赤) 暗色 (内) 黄褐色	古墳埋明ナ
NSJT105	318	赤生土	黄	—	226-	—	—	粘土結み 1.5F	丁寧ナデ, 第9(付)付 発露文, 雲母風	丁寧ナデ	良好	赤色粘土, 雲母結晶 石, 黄, 長石, 結晶片 白, 黄, 雲母 (赤)	(赤) 淡黄白色 (内) 淡黄褐色	
NSJT105 SI	319	赤生土	黄	(12)2	49	0.7	—	ロウロ (灰 砂)	ナデ, 粗粒ナデ後ナデ, 雲 母風 (黄ウツ)	ナデ, 粗粒ナデ後ナ デ, 粗粒ナデ, 粗粒ナ デ後不定方向ナデ	良好	細米白結晶片, 雲母	(赤) 黄褐色	受部厚 14.5cm, 灰化層元
NSJ15015 P8	320	赤生土	黄	—	163-	—	—	粘土結み 1.5F	工具ナデ後丁寧ナデ, 丁 字ナデ	ナデ, コビオヤエ, ナ デ	良好	赤色粘土, 石, 黄, 長 石, 結晶片 (赤), 雲母 結晶片, 雲母	(赤) 濃褐色 (内) 濃褐色	
NSJ15015 P23	321	赤生土	黄	—	63-	6.8	—	粘土結み 1.5F	(工具) 不定方向ナデ, (工 具) ココナデ, ココナデ, 工具ナデ, 高付器部 (赤) の発露層風	(工具) 不定方向ナ デ	良好	赤色粘土, 雲母結晶 片, 結晶片, 石, 黄, 結 晶片 (赤), 雲母	(赤) 淡黄白色 (内) 黄褐色	全体の発露層が 7cm
NSJ15015 P6	322	赤生土	黄	—	425+	—	—	粘土結み 1.5F	ナデ, ココナデ後ナデ	ナデ	良好	赤色粘土, 長石, 結晶 片 (赤), 雲母 (赤), 黄 鉄石 (赤)	淡黄白色	灰化層上同一層 体の可能性あり
NSJ15015 P6	323	赤生土	黄	—	1385+	—	—	粘土結み 1.5F	ナデ, コビオヤエ	ナデ	良好	赤色粘土, 石, 黄, 長 石, 結晶片 (赤), 雲母 結晶片, 雲母	(赤) 濃褐色 (内) 濃褐色	灰化層上同一層 体の可能性あり
NSJ15005	324	赤生土	黄	—	76-	1.5	—	粘土結み 1.5F	ナデ, 摩滅多い	ナデ, 摩滅多い	良好	赤色粘土, 白結晶片 石, 黄, 長石 (赤), 雲母 結晶片, 雲母	(赤) 濃褐色 (内) 濃褐色	
NSJ15000	325	赤生土	黄	(15)0	32-	—	—	粘土結み 1.5F	ココナデ後ナデ, ナデ	ナデ	良好	赤色粘土, 白結晶片 石, 黄, 長石, 結晶片 (赤), 黄鉄石 (赤), 雲母	(赤) 濃褐色 (内) 濃褐色	灰化層元
NSJ15015 P23	326	赤生土	黄	—	—	1.4	—	粘土結み 1.5F	丁寧ナデ	ナデ, コビオヤエ	良好	黄石 (赤), 黄鉄石 (赤), 赤色粘土 (赤), 雲 母 (赤), 白結晶片 (赤) 石, 結晶片 (赤), 雲母	(赤) 淡黄褐色 (内) 薄黄褐色	
NSJT207 SI	327	赤生土	黄	C200	118-	—	—	粘土結み 1.5F	ナデ, 第9(付)付発露文	ココナデ後ナデ, ナデ コビオヤエ後ナデ, ナデ	良好	赤色粘土 (赤), 白 色粘土 (赤), 結晶片 (赤) (赤), 雲母 (赤)	暗褐色	灰化層元
NSJ15010 P4-98	328	赤生土	黄?	—	93-	—	—	粘土結み 1.5F	ナデ	ナデ	良好	赤色粘土 (赤), 白 色粘土 (赤), 結晶片 (赤) (赤), 雲母 (赤)	(赤) 濃褐色 (内) 濃褐色	
NSJ15002	329	赤生土	黄	—	16-	(6)0	—	粘土結み 1.5F	ナデ	ナデ (摩滅多い)	良好	赤色粘土, 雲母結晶 片, 白結晶片, 石, 黄, 長 石, 結晶片 (赤), 雲母 結晶片, 雲母	(赤) 濃褐色 (内) 濃褐色	灰化層元
NSJ15005 灰濁土	330	赤生土	黄	(12)0	45-	—	—	粘土結み 1.5F	ナデ	ナデ	良好	赤色粘土 (赤), 白 色粘土 (赤), 結晶片 (赤) (赤), 雲母 (赤)	淡黄白色	灰化層元
NSJ15005 灰濁土	331	赤生土	黄	—	75-	—	—	粘土結み 1.5F	ナデ, 摩滅あり	ナデ	良好	赤色粘土, 白結晶片 石, 黄, 長石, 結晶片 (赤) (赤), 雲母 (赤)	薄褐色	
NSJ15005 灰濁土	332	赤生土	黄	—	038-	—	—	粘土結み 1.5F	丁寧ナデ, ナデ	丁寧ナデ, ナデ (摩 滅多い)	良好	赤色粘土, 雲母結晶 片, 結晶片 (赤), 雲母 結晶片, 雲母	薄褐色	
NSJ15005 灰濁土	333	赤生土	黄	(12)2	64-	—	—	ロウロ	へう切り後ナデ, 粗粒ナ デ	へう切り後ナデ, 粗粒 ナデ	良好	細米 赤色粘土 (赤), 雲 母結晶片 (赤), 雲母 結晶片 (赤), 雲母 (赤)	黄褐色	灰化層元
NSJ15005 灰濁土	334	赤生土	黄, 赤?	—	34-	—	—	ロウロ, 粘 土結み 1.5F (7)	へう切り後ナデ, ナデ	粗粒ナデ, ナデ	良好	赤色粘土 (赤), 雲 母結晶片 (赤), 雲母 結晶片 (赤), 雲母 (赤)	薄褐色	
NSJ15005 灰濁土	335	赤生土	黄?	—	235+	—	—	粘土結み 1.5F	ココナデ後ナデ, ナデ	丁寧ナデ, ナデ	良好	赤色粘土, 雲母結晶 片, 結晶片 (赤), 雲母 結晶片, 雲母	薄黄白色	
NSJ15005 灰濁土	336	赤生土	黄?	(11)0	41-	—	—	粘土結み 1.5F	へう切り後ナデ, 工具ナ デ後ナデ	工具ナデ後ナデ, ナ デ	良好	赤色粘土 (赤), 雲 母結晶片 (赤), 雲母 結晶片 (赤), 雲母 (赤)	黄褐色	灰化層元
NSJ15005 灰濁土 粗粒色土	337	赤生土	黄	—	101+	—	—	粘土結み 1.5F	工具ナデ後丁寧ナデ, 工 具ナデ	工具ナデ後ナデ	良好	赤色粘土, 雲母結晶 片, 結晶片 (赤), 雲母 結晶片 (赤), 雲母 (赤)	(赤) 黄褐色 (内) 黄褐色	外層に黒色風層
NSJ15005 灰濁土	338	赤生土	黄	—	27-	—	—	粘土結み 1.5F	粗粒ナデ後ナデ, ナデ	粗粒ナデ後ナデ	良好	赤色粘土 (赤), 石 石 (赤), 黄鉄石 (赤) (赤), 雲母 (赤)	(赤) 暗色 (内) 暗褐色	
NSJ15005 灰濁土	339	赤生土	黄	—	19-	—	—	粘土結み 1.5F	ココナデ後ナデ, ナデ	粗粒ナデ後ナデ, ナ デ	良好	赤色粘土, 白結晶片 石, 結晶片 (赤), 雲母 結晶片, 雲母	黄褐色	
NSJ1 包合層	340	赤生土	黄C赤	—	35-	—	—	粘土結み 1.5F	丁寧ナデ	丁寧ナデ後ナデ, 工 具ナデ後ナデ, コビ オヤエ	良好	赤色粘土, 白結晶片 石, 結晶片 (赤), 雲母 結晶片 (赤), 雲母 (赤)	黄褐色	

産地名	区番号	種別	群 種	法量 (cm <sup>3</sup> ) 法還元					成 形	調製及び調製		焼成	敷土 (石屑)	色調	備考
				工数 / 最大量	最高 / 最大量	底径 / 最大量	孔径	重量 (g)		外面	内面				
NSJ 13005	341	赤生土層	黄小砂	—	50+	—	—	—	粘土様み 13F	不定方向ナテ、ココナテナテ、底面ノシロオサエナテ	コビオサエ後ナテ、ナテ	黄	赤色粘土、白色粘土、石、黒石、焼石(赤)、赤、黒	(赤) 濃黄褐色 (赤) 濃褐色	
NSJ 13005	342	赤生土層 灰土層	高F	(18.2)	4.1+	—	—	—	粘土様み 13F	ココナテ後ナテ、ココナテナテ	ココナテ後ナテ、ココナテナテ (薄層) 赤いナテ	黄緑	赤色粘土、赤色粘土、白色粘土、石、黒石、黒石(赤)、赤	(赤) 淡褐色	反転灰土
NSJ 13005	343	赤生土層	高F	(18.2)	4.1+	—	—	—	粘土様み 13F	即焼砂層	即焼砂層	黄緑	赤色粘土、赤色粘土、白色粘土、石、黒石、黒石(赤)、赤、焼石、赤	(赤) 褐色	反転灰土
NSJ 13005	344	赤生土層	高F	—	3.8+	—	—	—	粘土様み 13F	ココナテ後ナテ、ナテ	ココナテ後ナテ、ナテ	黄緑	石、黒石、黒石(赤)、焼石、赤	(赤) 濃褐色 (赤) 濃褐色	
NSJ 13005	345	赤生土層	高F	—	1.6+	—	—	—	粘土様み 13F	ココナテ後ナテ、ナテ	ココナテ後ナテ、ナテ	黄緑	石、黒石、焼石(赤)、赤	(赤) 褐色	
NSJ 13005	346	赤生土層	黄	—	6.6+	—	—	—	粘土様み 13F	ナテ	ナテ	黄緑	赤色粘土、赤色粘土、白色粘土、石、黒石、黒石(赤)、赤、焼石、赤	(赤) 灰褐色 (赤) 淡黄褐色	
NSJ 13015 P5	347	赤生土層	高F	(26.2)	5.3+	—	—	—	粘土様み 13F	へう切の後ナテ、ココナテ後ナテ、ナテ、ナテ後ナテ、ナテ	ココナテ後ナテ、不定方向ナテ、ナテ	黄緑	赤色粘土、赤色粘土、白色粘土、石、黒石、黒石(赤)、赤	(赤) 黄褐色	反転灰土
NSJ 13005	348	赤生土層	高F	(20.0)	5.6+	—	—	—	粘土様み 13F	ナテ	即焼砂層、ナテ	黄緑	赤色粘土 (赤)、白色粘土、石、黒石、焼石(赤)	(赤) 淡黄褐色	反転灰土
NSJ 13005 P12	349	赤生土層	黄	—	6.1+	3.5	—	—	粘土様み 13F	ハケ後ナテ	ナテ後ナテ、ナテ	黄緑	赤色粘土、赤色粘土、白色粘土、石、黒石 (赤) 黒石(赤)	(赤) 淡黄褐色	
NSJ T207 S1	350	赤生土層	焼石層赤	18.8	24.0+	—	—	—	粘土様み 13F	へう切の後ナテ、ココナテ後焼石層赤、丁字ナテ、別層、ナテ	不定方向ナテ、ナテ、コビオサエ	黄緑	赤色粘土 (赤)、白色粘土、石、黒石、黒石(赤) (赤) 黄褐色	(赤) 濃褐色 (赤) 黄褐色	
NSJ T207 S1	351	赤生土層	赤	—	11.0+	—	—	—	粘土様み 13F	ナテ	ナテ	黄緑	赤色粘土、白色粘土、石、黒石、焼石(赤) (赤) 灰褐色	(赤) 暗褐色 (赤) 灰褐色	
NSJ 13005	352	赤生土層 灰土層	黄	(13.8)	12.3+	—	—	—	粘土様み 13F	へう切の後ナテ、工具ナテ後ナテ、ナテ	コビオサエ後ナテ、工具ナテ後ナテ、ナテ	黄緑	赤色粘土 (赤)、白色粘土、石、黒石、黒石(赤) (赤) 濃褐色	(赤) 濃褐色 (赤) 濃褐色	反転灰土
NSJ 13005 P2	353	赤生土層	黄	(14.4)	13.3+	—	—	—	粘土様み 13F	へう切の後ナテ、ナテ、工具ナテ後ナテ	ココナテ後ナテ、コビオサエ、工具ナテ後ナテ、工具ナテ後ナテ	黄緑	赤色粘土 (赤)、白色粘土、石、黒石、焼石(赤)	(赤) 濃褐色 (赤) 濃褐色	反転灰土
NSJ 13015 P19-19-19-27	354	赤生土層	黄	(17.0)	24.4	2.5	—	—	粘土様み 13F	へう切の後ナテ、工具ナテ後ナテ、ナテ、底面ナテ	工具ナテ後ナテ、コビオサエ、ナテ	黄緑	赤色粘土、白色粘土、石、黒石、黒石(赤)、焼石、赤	(赤) 灰褐色 (赤) 黄褐色	反転灰土
NSJ 13015 P14-19-16	355	赤生土層	黄	—	16.7+	1.6	—	—	粘土様み 13F	工具ナテ後ナテ、底面ナテ	ナテ	黄緑	赤色粘土、赤色粘土、白色粘土、石、黒石、黒石(赤) (赤) 黄褐色	(赤) 黄褐色	
NSJ T207 S1	356	赤生土層	黄	—	20.5+	3.0	—	—	粘土様み 13F	工具ナテ後ナテ、ナテ、底面ナテ	コビオサエ後ナテ、ナテ	黄緑	赤色粘土 (赤)、石、黒石(赤) (赤) 濃褐色	(赤) 濃褐色	
NSJ 13005 P2-19-19-20-21-22	357	赤生土層	黄	(15.2)	27.9	3.0	—	—	粘土様み 13F	ナテ	ナテ	黄緑	赤色粘土 (赤)、石、黒石、黒石(赤) (赤) 濃褐色	(赤) 濃褐色	反転灰土
NSJ 13015 P22-24-3031 P24-26	358	赤生土層	黄	14.8	25.2	2.2	—	—	粘土様み 13F	多々半後工具ナテ後ナテ、多々半後工具ナテ後ナテ、工具ナテ後ナテ (ハケ状工具以下から上方向) スス付着	工具面後ナテ、工具後ナテ	黄緑	焼石、赤、赤色粘土、石、白色粘土、石	黄褐色	二次焼成あり
NSJ 13015 P23	359	赤生土層	黄or赤	—	4.0+	2.3	—	—	粘土様み 13F	ハケ後ナテ	ハケ後ナテ	黄緑	赤色粘土、黒石(赤)、白色粘土	(赤) 黄褐色 (赤) 濃褐色	
NSJ 13015 P20	360	赤生土層	御用砂	9.5	9.0+	—	—	—	粘土様み 13F	ナテ、工具ナテ後ナテ	ナテ	黄緑	赤色粘土、白色粘土、石、黒石(赤)	黄褐色	
NSJ 13015 P19-19-20	361	赤生土層	黄	(11.0)	16.0	—	—	—	粘土様み 13F	ナテ、ハケ後ナテ	ナテ	黄緑	赤色粘土、白色粘土、石、黒石(赤)	黄褐色	二次焼成あり
NSJ 13015 P19-20	362	土層	赤	(11.4)	6.4+	—	—	—	粘土様み 13F	ナテ後一部ナテ	ナテ後ココナテ方向ナテ、ハケ後ナテ	黄緑	焼石、白色粘土、赤色粘土、黒石(赤) (赤)	黄褐色	
NSJ 13015 P27-29	363	赤生土層	黄	(13.6)	10.0+	—	—	—	粘土様み 13F	へう切の後ナテ、多々半後ナテ、ナテ	ナテ、丁字ナテ	黄緑	赤色粘土、石、黒石(赤)	(赤) 黄褐色 (赤) 黄褐色	
NSJ 13030 P1	364	赤生土層	御用砂	—	4.8+	1.00	—	—	粘土様み 13F	不明	ナテ、コビオサエ	黄緑	白色粘土、石、黒石(赤)、焼石、赤、赤色粘土	黄褐色	
NSJ 13030	365	赤生土層	黄	—	3.8+	0.80	—	—	粘土様み 13F	ナテ	御用砂、赤	黄緑	白色粘土、黒石(赤)、石、黒石(赤)、赤色粘土	(赤) 黄褐色 (赤) 灰褐色	
NSJ 1 P20	366	赤生土層	黄	—	7.0+	5.0	—	—	粘土様み 13F	ナテ、底面ナテ	ナテ	黄緑	赤色粘土、石、黒石(赤) (赤) 濃褐色	(赤) 濃褐色 (赤) 濃褐色	
NSJ 13015 P13-19-19-18	367	赤生土層	赤	(16.0)	8.6+	—	—	—	粘土様み 13F	ナテ、ハケ後ナテ	?	黄緑	赤色粘土、黒石(赤)、石、黒石(赤)	(赤) 黄褐色 (赤) 黄褐色	二次焼成あり
NSJ 13015 P19-19-21	368	赤生土層	赤	—	14.7+	—	—	—	粘土様み 13F	ハケ後調子のナテ	ナテ、ハケ後ナテ	黄緑	赤色粘土、石、黒石(赤) (赤) 濃褐色	(赤) 濃褐色 (赤) 黄褐色	二次焼成あり
NSJ 13030	369	赤生土層	黄	—	9.7+	—	—	—	粘土様み 13F	1層目交差部ココナテココナテ、交差部以下はナテ、へう切の後ナテ、ハケ後ナテ	ナテ	黄緑	白色粘土、石、黒石(赤)、赤、赤色粘土、黒石(赤)、石	黄褐色	二次焼成あり

選機名	頁番号	種別	群種	経路 (cm) 以上規定				選別	調整及び換機		感度	軌上(石材)	色調	備考
				口径/最大径	篩高/最大幅	篩径/最大長さ	孔数		重量(t)	外面				
NSJ 2 S001	370	土師器	群付研	—	30*	(72)	—	粘土結み コナナ子, 底部コナ子	ナ子	良好	赤色粘土, 石灰, 白色 砂子, 結晶片	黄褐色	反転還元	
NSJ 1 S003 P28	371	赤土師器	壺	(110)	42*	—	—	粘土結み コナナ子, ナ子後刺突文 ナ子	コナナ子	良好	赤色粘土, 石灰, 結晶 片	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	反転還元	
NSJ 2 S001	372	土師器	壺 or 鉢	—	32*	—	—	粘土結み コナナ子, ナ子	ナ子	良好	赤色粘土, 石灰, 陶石 片	黄褐色		
NSJ 1 包苜類	373	土師器	壺 or 鉢	—	37*	—	—	粘土結み コナナ子	ナ子	良好	赤色粘土, 石灰, 陶石 片	黄褐色		
NSJ 1 S005 P1-5	374	赤土師器	壺	(102)	60*	—	—	粘土結み コナナ子, ナ子	コナナ子, ユビオオサエ 後ナ子	良好	赤色粘土, 赤色砂子, 石灰, 結晶片	黄褐色	反転還元	
NSJ 1 S005 P1-2	375	赤土師器	壺	(180)	116*	—	—	粘土結み ユビオオサエ後ナ子, ハク 後ナ子	ナ子	良好	赤色粘土, 石灰, 結晶 片, 陶石, 片	黄褐色	反転還元	
NSJ 2 S001 研苜類	376	土師器	研	—	33*	—	—	コナナ子	ナ子	良好	石灰, 陶石, 結晶片 片	黄褐色		
NSJ 1 S001 P2	377	土師器	土師	6.5	1.5	—	000	—	—	良好	赤色粘土, 白色粘土, 石 灰	灰褐色 白色色	背付土師	
NSJ 1 S000	378	赤土師器	壺	—	45*	1.5	—	粘土結み ナ子	黄褐色い	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 結晶片	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	反転還元	
NSJ 1 S006	379	赤土師器	壺	(178)	125*	—	—	粘土結み コナナ子, ナ子	コナナ子, ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 結晶片, 雲母	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	反転還元	
NSJ 2 2 包苜類 表土ハフ	380	赤土師器	鉢?	—	43*	—	—	粘土結み コナナ子	ナ子	良好	石灰, 赤色粘土, 白色 砂子, 結晶片	黄褐色	一次焼成/内面 黒色あり, 反転 不明	
NSJ 3 2 包苜類 表土ハフ	381	赤土師器	壺	—	38*	—	—	粘土結み ナ子	ナ子, 黄褐色い	良好	石灰, 赤色粘土, 石灰 片, 陶石	(内) 黄褐色 (外) 白褐色		
NSJ 1 S005 P21-22	382	赤土師器	壺	—	133*	—	—	粘土結み ハク後部付のナ子	ナ子, ユビオオサエ後ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 結晶片	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色		
NSJ 2 S001	383	赤土師器	壺	(130)	49*	—	—	粘土結み コナナ子, ナ子	コナナ子, ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 結晶片	黄褐色	反転還元	
NSJ 2 S005 P1	384	赤土師器	壺	—	158*	—	—	粘土結み ナ子後土子, 雲母の 層?	コナナ子後土子, 雲母 層?	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 石灰, 結晶片 片, 陶石	黄褐色		
NSJ 2 2 包苜類	385	土師器	小型丸底壺	—	65*	—	—	粘土結み コナナ子	ナ子	良好	灰石, 石灰, 赤色 粘土, 白砂子, 結晶片 片	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	反転還元	
NSJ 2 S005	386	赤土師器	覆口鉢	(100)	44*	—	—	粘土結み ハク切分後ナ子, 黄褐色 斑文, コナナ子	コナナ子, ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 結晶片	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	反転還元	
NSJ 2 2 包苜類	387	土師器	高鉢	—	53*	—	—	粘土結み コナナ子, 丸ナ子	ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 結晶片	黄褐色		
NSJ 2 2 包苜類 表土ハフ	388	赤土師器	壺	—	66*	—	—	粘土結み ナ子	ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 結晶片	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色		
NSJ 2 2 包苜類	389	赤土師器	壺	—	52*	—	—	粘土結み 穴留め付付ナ子	黄褐色い	良好	石灰, 白砂子, 陶石 片	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色		
NSJ 2 S005	390	赤土師器	壺	—	35*	—	—	粘土結み 研	ナ子, ユビオオサエ	良好	石灰, 赤色粘土, 陶石 片	黄褐色		
NSJ 1 S004 NSJ 2 包苜類 表土ハフ	391	赤土師器	壺	—	10*	—	—	粘土結み ナ子	ユビオオサエ後ナ子	良好	赤色粘土, 陶石, 石 灰, 灰石	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色		
NSJ 3 S000	392	土師器	鉢	7.8	1.6*	—	—	コナナ子, 底部赤色 丸後ナ子	ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 陶石	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色		
NSJ 3 S000	393	土師器	研 or 皿	—	11*	(82)	—	コナナ子後ナ子, 黄褐色 丸切後ナ子	ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 結晶片, 雲母 片, 雲母	黄褐色	反転還元	
NSJ 3 S046 P1	394	土師器	研	(86)	31	(76)	—	コナナ子後ナ子, 黄褐色 丸切後ナ子	コナナ子後ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 雲母	黄褐色	反転還元	
NSJ 3 S000 P15	395	土師器	研	(113)	35*	—	—	コナナ子, ユビオオサエ ハク後ナ子	ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 赤色砂子, 石灰, 結晶 片, 雲母	黄褐色	反転還元	
NSJ 3 S000 P5	396	土師器	小皿	(83)	09	(73)	—	コナナ子, 底部内刺赤 丸後ナ子	コナナ子, ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 結晶片, 陶石 片	黄褐色	反転還元	
NSJ 1 S005 P22-25	397	赤土師器	壺	15.6	21.3*	—	—	粘土結み コナナ子後ナ子, コナ ナ子, ハク後土子, ユビ オオサエ後ナ子	ユビオオサエ後ナ子, コ ナナ子	良好	赤色粘土, 雲母砂子, 赤色粘土, 石灰, 結晶 片, 灰石	黄褐色	二次焼成あり	
NSJ 3 S003	398	黒色土師 土師	鉢	—	27*	—	—	コナナ子, 裏付付高 付	ナ子後土子, コナ ナ子	良好	赤色粘土, 赤色粘土, 石灰, 陶石	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色		
NSJ 3 S000	399	土師器	研	(78)	1.6	(92)	—	コナナ子, 底部内刺赤 丸後ナ子	ナ子	良好	赤色粘土, 結晶片	黄褐色	反転還元	
NSJ 3 S000	400	土師器	研	(83)	1.05	(70)	—	コナナ子, 底部内刺赤 丸後ナ子	コナナ子	良好	石灰, 結晶片, 雲母 片	黄褐色	反転還元	
NSJ 3 S003 土師一笠	401	土師器	研	—	15*	(80)	—	コナナ子, 底部内刺赤 丸後ナ子	コナナ子	良好	陶石, 赤色粘土, 石灰, 雲母	黄褐色	反転還元	
NSJ 3 S000	402	土師器	小皿	(85)	1.15	(75)	—	コナナ子, 底部内刺赤 丸後ナ子	コナナ子, ナ子	良好	赤色粘土, 雲母砂子, 白砂子, 石灰, 陶石 片	黄褐色	反転還元	
NSJ 3 S000	403	土師器	小皿	(84)	1.35	(70)	—	コナナ子, 底部内刺赤 丸後ナ子	コナナ子, ナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 雲母	黄褐色	反転還元	
NSJ 3 S000	404	土師器	研	(103)	1.3	(90)	—	コナナ子, 底部内刺赤 丸後ナ子	コナナ子	良好	赤色粘土, 白砂子, 石灰, 陶石	黄褐色	反転還元	
NSJ 3 S000	405	土師器	研	—	1.6*	(96)	—	コナナ子, 底部内刺赤 丸後ナ子	コナナ子	良好	赤色粘土, 石灰, 結晶 片, 雲母	黄褐色	反転還元	
NSJ 3 S000	406	土師器	研 or 皿	—	12*	(59)	—	コナナ子, 底部赤色 丸後ナ子	ナ子	良好	白砂子, 赤色粘土, 黒色粘土, 石灰, 結晶 片, 雲母	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色	反転還元	

産地名	品番号	種類	等級	法量 (cm <sup>3</sup> ) 法規定					成形	調剤及び調剤		糖度	酸上(%)	色調	備考
				口徑/最大幅	底径/最大幅	底径/最大幅	孔徑	重量(g)		外面	内面				
NSJ 3300	407	土師瓦土器	小皿	9.30	1.2	0.63	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	白色粉子、石灰、黒石、赤粉子、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	408	土師瓦土器	皿	9.80	1.0	0.60	—	—	ロウロ	ナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ	良好	白粉子、黒粉子、赤粉子	淡褐色	反転焼成
NSJ 3300	409	土師瓦土器	皿	9.80	7.4	1.8	—	—	ロウロ	ナテ、ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	石灰、赤粉子、赤粉子(白)	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	410	土師瓦土器	片	13.80	3.95	10.00	—	—	ロウロ	ココナテ、ナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子(白)、赤粉子、石灰、黒石、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	411	土師瓦土器	片	—	17*	0.80	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	白粉子、石灰、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	412	土師瓦土器	小皿	7.30	1.3	0.50	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	白粉子、赤粉子、黒粉子、赤粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	413	土師瓦土器	皿	9.20	1.3	0.70	—	—	ロウロ	ナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	石灰、黒粉子、白粉子、赤粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	414	土師瓦土器	皿	9.60	1.1	0.64	—	—	ロウロ	ナテ、ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	赤粉子、石灰、白粉子、赤粉子(白)	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	415	土師瓦土器	皿	—	12*	—	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、黒粉子、陶器、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	416	土師瓦土器	皿	11.20	1.2	0.60	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、石灰、黒粉子、赤粉子、黒粉子	(内) 糖褐色 陶器色	反転焼成
NSJ 3300	417	土師瓦土器	小皿	7.4	1.15	0.62	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、黒粉子、結晶石灰、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	418	土師瓦土器	小皿	7.70	1.05	0.50	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	白粉子、赤粉子、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	419	土師瓦土器	小皿	7.80	1.0	0.67	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、石灰、黒石、黒粉子、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	420	土師瓦土器	皿	12.70	1.4	1.100	—	—	ロウロ	ナテ、ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	白粉子、結晶石灰、赤粉子、赤粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	421	土師瓦土器	皿	9.80	1.1	0.74	—	—	ロウロ	ナテ、ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	白粉子、石灰、結晶石灰、赤粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	422	土師瓦土器	皿	9.30	1.2	0.70	—	—	ロウロ	ナテ、ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	赤粉子、石灰、陶器、石灰、赤粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	423	土師瓦土器	皿	9.80	1.1	0.60	—	—	ロウロ	ナテ、ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	石灰、陶器、黒粉子、赤粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300 P3	424	土師瓦土器	皿	9.60	1.8	0.60	—	—	ロウロ	ナテ、ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	石灰、白粉子、赤粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	425	土師瓦土器	皿	9.50	1.4	0.70	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	426	土師瓦土器	皿	9.80	1.1	0.50	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	427	土師瓦土器	皿	9.80	1.4	0.70	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	428	土師瓦土器	片?	—	13*	—	—	—	ロウロ	ココナテ、ナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、陶器、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	429	土師瓦土器	皿	9.80	1.6	0.80	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	430	土師瓦土器	片	—	13*	0.62	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、石灰、結晶石灰、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300 P3	431	土師瓦土器	片	—	27*	—	—	—	ロウロ	ナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、黒粉子、石灰、結晶石灰、黒粉子	糖褐色	
NSJ 3300 P4	432	土師瓦土器	皿	7.4	1.4	5.2	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	白粉子、赤粉子、赤粉子、黒粉子	糖褐色	
NSJ 3300	433	土師瓦土器	片	14.20	2.7	1.080	—	—	ロウロ	ナテ、ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	赤粉子、石灰、黒粉子、白粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	434	土師瓦土器	皿	9.60	1.2	0.60	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	赤粉子(白)、陶器、白粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	435	土師瓦土器	皿	7.30	1.7	0.50	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子、白粉子、石灰、結晶石灰、赤粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 33003 土師一瓦	436	土師瓦土器	皿	7.10	1.9	0.50	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子、白粉子、石灰、陶器、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 33003 土師一瓦	437	土師瓦土器	皿	—	25*	—	—	—	ロウロ	ナテ、又、片付	ココナテ	良好	白粉子、黒粉子	黄白色色 外蓋入り 灰土色 黒色	
NSJ 3300	438	土師瓦土器	皿	9.10	1.0	0.60	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	439	土師瓦土器	皿	—	0.6*	0.60	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ	良好	陶器、石灰、結晶石灰	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	440	土師瓦土器	皿	9.70	1.5*	0.70	—	—	ロウロ	ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ	良好	白粉子、石灰、黒粉子	糖褐色	反転焼成
NSJ 3300	441	土師瓦土器	片	—	0.9*	0.60	—	—	ロウロ	ナテ、底面・糸切り後ナテ	丁取ナテ	良好	赤粉子、黒粉子、石灰	黄白色色	反転焼成
NSJ 33003 土師一瓦	442	土師瓦土器	片	—	25*	—	—	—	ロウロ	ナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、黒粉子	糖褐色	
NSJ 33086	443	土師瓦土器	片?	—	15*	—	—	—	ロウロ	ナテ、底面・糸切り後ナテ	ココナテ、ナテ	良好	赤粉子、白粉子、石灰、赤粉子、陶器、黒粉子	糖褐色	
NSJ 33046 P1	444	土師瓦土器	片	12.70	2.8	10.00	—	—	ロウロ	ナテ、ココナテ、底面・糸切り後ナテ	ナテ、ココナテ、エビオサ土塊ナテ	良好	赤粉子、白粉子、赤粉子、石灰、結晶石灰、黒粉子	糖褐色	反転焼成

選種名	登録番号	種別	群種	経路 (cm) 以上規定					選別	調整及び疾病		感病	粒上 (石材)	色調	備考
				口径/最大径	最高/最大幅	最低/最小幅	長さ	重量 (g)		外面	内面				
NSJ 3 S100 P1	445	土師貫土器	环	(11.0)	2.8	(9.2)	—	—	ココナ	ココナ子、底部中央部切り残ナ子	ココナ子、ナ子	良好	赤色粘土、白粉子、黒粉子、石炭、白、灰石、結晶質、雲母	黄褐色	反転産元
NSJ 3 S085	446	土師貫土器	环	(12.1)	3.7	(10.0)	—	—	ココナ	ナ子、ココナ子、底部中央部切り残ナ子	ナ子、ココナ子、不定形ナ子	良好	赤色粘土、灰石、石炭、結晶質、白粉子	黄白色 灰褐色	反転産元
NSJ 3 S085	447	土師貫土器	环	(12.7)	3.2	(10.0)	—	—	ココナ	ナ子、ココナ子、底部中央部切り残ナ子	ナ子、ココナ子	良好	赤色粘土、結晶質、雲母、黒粉子、白粉子	黄褐色	反転産元
NSJ 3 五条小P10	448	土師貫土器	环	(14.4)	2.7	(10.0)	—	—	ココナ	ナ子、ココナ子、底部中央部切り残ナ子	ナ子、ココナ子	良好	赤色粘土、黒粉子、黒炭粉子、雲母、角閃石、結晶質	黄褐色	反転産元
NSJ 3 S003 土師一岳	449	土師貫土器	环	12.0	2.9	8.8	—	—	ココナ	ナ子、ココナ子、底部中央部切り残ナ子	ナ子、ココナ子、不定形ナ子	良好	赤色粘土、黒粉子、黒炭粉子、雲母	黄褐色	
NSJ 3 S003 土師一岳	450	土師貫	瓶	—	1.5	—	—	—	ココナ	ナ子	ナ子	良好	石炭、白粉子、雲母、角閃石	黄褐色	
NSJ 3 相原色土	451	黄文土器	深鉢	—	2.0	3.2	—	—	粘土積み上げ	筒合粒、ナ子	ナ子	良好	(内) 赤色粘土、角閃石、白粉子、黒炭粉子、雲母	黄褐色 (内) 黄褐色	
NSJ 3 S002	452	黄文土器	鉢	—	1.3	7.0	—	—	粘土積み上げ	ナ子	ナ子	良好	(内) 赤色粘土、黒炭粉子、石炭、雲母	黄褐色	
NSJ 3 S88 S90	453	黄文土器	鉢	—	1.6	7.4	—	—	粘土積み上げ	ナ子	摩滅著しい	良好	白粉子、黒炭粉子、石炭、角閃石、雲母	(内) 黄褐色 (内) 黄褐色	
NSJ 3 S100	454	瓦器	瓶	—	2.6	—	—	—	粘土積み上げ	丁家ナ子	ナ子	良好	筒状、白粉子	黄白色	
NSJ 3 S004	455	土師貫土器	瓶	—	5.5	—	—	—	粘土積み上げ	ナ子、ココナ子	丁家ナ子	良好	灰石、角閃石、雲母、赤色粘土、白粉子、石炭	(内) 黄褐色 (内) 黄褐色、灰褐色	コビヤ工法造り
NSJ 3 S100 梨石近く	456	土師貫	壺	(20.3)	7.1	—	—	—	粘土積み上げ	へろ切り残ナ子、ココナ子、へろ後ナ子、ナ子	コビヤ工法ナ子、ココナ子	良好	黒炭粉子、白粉子、石炭、結晶質、角閃石	黄褐色	片割製成、反転産元
NSJ 3 S006 427	457	白磁	瓶	—	2.6	—	—	—	ココナ	無釉	無釉	良好	無釉	黄白色	
NSJ 3 S005 一岳	458	京焼陶器(白磁)	黄	—	2.5	—	—	—	ココナ	無釉	無釉	良好	無釉	薄緑	時期不定、高白に一部焼だまあり
NSJ 3 S006	459	白磁	黄	—	2.4	—	—	—	ココナ	無釉	無釉	良好	無釉	(内) 黄白、黄白色 (内) 白褐色	反転産元
NSJ 3 S04	460	瓦器	瓶	—	1.6	(8.0)	—	—	ココナ	ミガ子後ナ子	ミガ子後ナ子、ナ子	良好	無釉	(内) 黄褐色 (内) 黄褐色	反転産元
NSJ 3 相原色土	461	黄文土器	鉢	—	2.05	(9.2)	—	—	粘土積み上げ	ナ子、ココナ子	筒合	良好	黒炭粉子、白粉子、石炭、結晶質、角閃石、雲母	黄褐色	反転産元
NSJ 3 相原色土	462	黄文土器	深鉢	—	4.4	—	—	—	粘土積み上げ	へろ切り残ナ子、ナ子、各自別	無釉著しい	良好	黒炭粉子、白粉子、石炭、結晶質、角閃石	黄褐色	
NSJ 3 相原色土	463	黄文土器	鉢	—	6.7	—	—	—	粘土積み上げ	へろウズり残ナ子、ナ子、筒状別	無釉著しい	良好	黒炭粉子、白粉子、石炭、結晶質	黄褐色	
NSJ 3 S100	464	青磁	瓶	—	1.4	—	—	—	ココナ	無釉	無釉	良好	無釉	黄緑色	
NSJ 3 S100 下野 P2	465	黄文土器	深鉢	—	7.7	—	—	—	粘土積み上げ	ナ子、ココナ子、ナ子	ナ子	良好	赤色粘土、黒炭粉子、白粉子、コビヤ工法ナ子	(内) 黄褐色 (内) 黄褐色	
NSJ 3 S004	466	黄文土器	深鉢	—	3.0	—	—	—	粘土積み上げ	ナ子、洗泥	ナ子	良好	黒炭粉子、白粉子、石炭、結晶質、角閃石、雲母	黄褐色	
NSJ 3 S100	467	青磁	黄	—	3.8	—	—	—	ココナ	無釉	無釉	良好	無釉	白灰色 緑色・黄緑色	時期不定青磁
NSJ 3 S005 一岳	468	陶器	蓋	—	2.1	—	—	—	ココナ	ナ子	白磁	良好	黒炭粉子、白粉子	黄白色	時期不定、反転産元
NSJ T801 一岳	469	土師貫土器	瓶	(20.0)	6.5	—	—	—	ココナ	へろ切り残ナ子、ココナ子、コビヤ工法ナ子	へろ、ココナ子	良好	黒炭粉子、白粉子	(内) 黄褐色 (内) 黄褐色	二次焼成あり (又スリ層)、反転産元
NSJ T801 一岳	470	白磁	瓶	—	1.9	5.9	—	—	ココナ	無釉	洗泥	良好	無釉	白色 緑色・黄緑色	
NSJ T801 一岳	471	白磁	黄	—	2.9	—	—	—	ココナ	無釉	洗泥	良好	無釉	白色 緑色・黄緑色	
NSJ T801 一岳	472	土師貫土器	小瓶	(7.2)	1.1	(6.4)	—	—	ココナ	丁家ナ子、斜縁糸切り後ナ子	ナ子	良好	白粉子、雲母、角閃石	黄褐色	反転産元
NSJ T801 一岳	473	土師貫土器	环	(12.7)	3.0	(9.9)	—	—	ココナ	ナ子、斜縁糸切り後ナ子	ココナ子	良好	赤色粘土、雲母、白粉子、石炭、結晶質、角閃石、黒炭粉子	黄褐色	反転産元
NSJ T801 一岳	474	土師貫土器	环	—	2.3	(8.2)	—	—	ココナ	工具崩れ、ナ子、斜縁糸切り後ナ子	ナ子	良好	赤色粘土、白粉子、石炭、結晶質、角閃石	黄褐色	口縁に摩滅著しい反転産元
NSJ T801 一岳	475	土師貫土器	瓶	(8.0)	1.7	(6.4)	—	—	ココナ	ココナ子、斜縁糸切り後ナ子	ナ子、ココナ子	良好	赤色粘土、黒炭粉子、白粉子、石炭、結晶質	黄褐色	一部反転産元
NSJ T801 一岳	476	土師貫土器	环	—	1.8	(10.8)	—	—	ココナ	ココナ子、ナ子、斜縁糸切り後ナ子	ナ子、ココナ子	良好	赤色粘土、黒炭粉子、白粉子、石炭、結晶質、角閃石	黄褐色	一部反転産元
NSJ T801 一岳	477	土師貫土器	鉢	(12.5)	7.8	—	—	—	粘土積み上げ	へろ切り残ナ子、ココナ子、コビヤ工法ナ子、ナ子、へろ後ナ子	ナ子、ココナ子、へろ後ナ子	良好	赤色粘土、黒炭粉子、白粉子、石炭、結晶質、角閃石	黄褐色	反転産元
NSJ T801 一岳	478	土師貫土器	瓶	(12.0)	3.2	(9.5)	—	—	ココナ	ナ子、底部中央部切り残ナ子	ココナ子	良好	石炭、石炭、白粉子、雲母	黄褐色	外面に又付着、反転産元

産物名	品番	種類	加工	法量 (cm <sup>3</sup> ) 以元				成形	調剤及び調剤		焼成	敷土(石粉)	色調	備考
				口径/最大径	底径/最小径	孔径	壁厚(μ)		外面	内面				
NSJ T401-B	479	土師瓦土器	円	-	2.1	0.80	-	-	口コ	丁字や十字、底部や縁部を切り取った	良好	黄土、黄白、白磁子、黒色磁子、赤色磁子、青磁子	黒褐色	反転元
NSJ T360-A	480	土師瓦土器	鉢	-	5.05	-	-	-	口コ	十字	良好	白磁子、黒色磁子、石灰、雲母、結晶片	青灰色	産物系産物
NSJ T401-B	481	土師瓦土器	円	-	-	7.6	-	-	口コ	底部に口コ切の跡	良好	赤色磁子、黒色磁子、白磁子、石灰、雲母、結晶片	褐色	
NSJ T401-B	482	土師瓦土器	蓋	-	6.1	-	-	-	口コ	縁部目ヤケ	良好	黄土、白磁子、赤色磁子	灰褐色	長径3の同一個体
NSJ T401-B	483	土師瓦土器	蓋	-	26.0	-	-	-	口コ	縁部目ヤケ	良好	黄土、白磁子、赤色磁子	灰褐色	長径2の同一個体
NSJ 3350277-191-120314-10-18-20-22-23-24-25-26-28-29-30-31	484	陶文土器	蓋	OK2	392	108	-	-	粘土練み	口縁部部に色濃く、側部上縁方向を染み、側部下部に「龍」の方向を染み、底面は十字	良好	赤色磁子、黒色磁子、白磁子、石灰、結晶片	黒褐色	埋蔵として利用、反転元
NSJ 45005-P	485	土師瓦土器	円	02	20	5.9	-	-	口コ	ヨコナテ、ヨコナテ後十字、底部や縁部を切り取った	良好	黄土、石灰、結晶片、赤色磁子、雲母、金雲母	褐色	
NSJ 45019-1-半研	486	土師瓦土器	円	-	1.4	0.4	-	-	口コ	ヨコナテ、底部や縁部を切り取った	良好	黄土、結晶片、白磁子、赤色磁子、雲母、金雲母	(外) 褐色 (内) 灰褐色	反転元
NSJ 45004-P2	487	土師瓦土器	円	(13.1)	31	(4.1)	-	-	口コ	十字、ヨコナテ、ユビヤキ工程、底部や縁部を切り取った	良好	黄土、結晶片、赤色磁子、雲母	褐色	反転元
NSJ 45005-P2	488	土師瓦土器	円	98	2.15	5.7	-	-	口コ	十字、ヨコナテ、底部や縁部を切り取った	良好	赤色磁子(多)、白磁子、黄土、結晶片、石灰、結晶片、雲母	褐色	
NSJ 45107-B14	489	瓦器	筒	-	2.8	-	-	-	口コ	ヨコナテ	良好	白磁子、黒色磁子、結晶片	(外) 灰褐色、黒褐色 (内) 灰褐色	陶器型瓦器
NSJ 45004-C10	490	土師瓦土器	鉢	08.5	13	(5.5)	-	-	口コ	十字、丁字や十字、底部や縁部を切り取った	良好	赤色磁子(多)、白磁子、黒色磁子、雲母	褐色	反転元
NSJ 45004-C10	491	土師瓦土器	円	(12.65)	2.9	(6.0)	-	-	口コ	十字、不定方向十字、底部や縁部を切り取った	良好	赤色磁子(多)、黒色磁子、白磁子、結晶片、雲母	褐色	反転元
NSJ 45019-1-半研	492	瓦器	筒	-	3.2	4.7	-	-	口コ	無縁、縁だまり、無縁	良好	赤土	(全体) 白褐色 (縁部) 褐色	
NSJ 45120-B15	493	土師瓦	円	(13.3)	26	(0.5)	-	-	口コ	十字、ヨコナテ、底部や縁部を切り取った	良好	白磁子(多)、黄白磁子、赤色磁子	褐色	反転元
NSJ 45192-A13	494	土師瓦	円	-	30	-	-	-	口コ	丁字や十字、底部や縁部を切り取った	良好	結晶片、黄土、石灰、雲母、白磁子(多)	褐色	
NSJ 45116-B10	495	土師瓦	円	-	1.1	-	-	-	口コ	十字、底部や縁部を切り取った	良好	黄白磁子、黄土、白磁子	黄褐色	二次焼成あり?
NSJ 45019-1-半研	496	陶器型瓦	筒	-	4.25	(4.9)	-	-	口コ	無縁、無縁	良好	赤土	(全体) 白褐色 (縁部) 褐色	特製近接、反転元
NSJ 45120-B15	497	土師瓦	円	-	3.3	-	-	-	口コ	丁字や十字、底部や縁部を切り取った	良好	黄白磁子、石灰、白磁子、黒色磁子	黒褐色	
NSJ 45019-1-半研	498	陶器	筒	-	2.8	(5.4)	-	-	口コ	無縁、縁だまり、無縁	良好	赤土	(全体) 白褐色 (縁部) 褐色	反転元
NSJ 45019-1-半研	499	陶器	筒	-	4.3	(4.9)	-	-	口コ	無縁、無縁	良好	赤土	(全体) 白褐色 (縁部) 褐色	特製近接、反転元
NSJ 45005-P3-P10-B	500	土師瓦土器	円	11.4	2.5	6.0	-	-	口コ	十字、ヨコナテ、底部や縁部を切り取った	良好	赤色磁子(多)、白磁子、黒色磁子、石灰、結晶片、雲母、金雲母、黄白磁子	褐色	陶器系青磁
NSJ 45100-半研	501	瓦器	筒	-	4.2	-	-	-	口コ	縁だまり、無縁	良好	赤土	緑褐色	
NSJ 45155-C13	502	土師瓦	蓋	-	2.2	-	-	-	口コ	ヨコナテ、底部や縁部を切り取った	良好	白磁子、結晶片、石灰	褐色	
NSJ 45113-B14	503	土師瓦	蓋	-	0.7	-	-	-	口コ	ヨコナテ、十字	良好	白磁子、黄白磁子	褐色	
NSJ 45107-B14	504	土師瓦土器	円	-	3.7	-	-	-	口コ	十字	良好	赤色磁子、石灰、黄土、白磁子	褐色	
NSJ 45176-A13	505	土師瓦	品付付本環	-	2.6	5.9	-	-	口コ	十字	良好	赤色磁子、白磁子、石灰、結晶片、雲母	褐色	
NSJ 45100-半研	506	瓦器	筒	-	4.25	-	-	-	口コ	ヘラ切の痕跡、十字、ヨコナテ	良好	赤色磁子、白磁子、黄白磁子、雲母	褐色	
NSJ 45100-半研	507	土師瓦	品付	-	6.8	-	-	-	口コ	十字、ヨコナテ	良好	赤色磁子、白磁子、石灰、結晶片、赤色磁子、雲母	褐色	
NSJ 45178-C5	508	土師瓦土器	円	(15.0)	28	(8.0)	-	-	口コ	十字、ヨコナテ、底部や縁部を切り取った	良好	赤色磁子(多)、白磁子、黒色磁子、石灰、結晶片、雲母	褐色	反転元
NSJ 45704-C6	509	土師瓦	蓋	-	4.2	-	-	-	口コ	ヨコナテ、ヘラ	良好	石灰、結晶片、白磁子、赤色磁子、黒色磁子	褐色	特製近接時代、特製近接/品付ヘラ
NSJ 45734	510	土師瓦	蓋	-	1.7	-	-	-	口コ	ヨコナテ後十字、十字	良好	白磁子、赤色磁子、赤色磁子、石灰	褐色	
NSJ 45182-A13	511	土師瓦	円	-	3.6	-	-	-	口コ	十字、後十字	良好	石灰、白磁子、黄白磁子	白褐色	
NSJ 45145-A14	512	土師瓦	蓋	-	4.1	-	-	-	口コ	円形ヘラケズリ後十字、十字	良好	白磁子、石灰、黄白磁子、黒色磁子	黒褐色	

遊樂名	装置号	種別	形種	経路 (cm) 以元元				説明	調整及び決断		機材	軌上(石材)	色調	備考
				口径/最大径	高さ/最大高さ	底径/最大底径	径差		重量 (kg)	外周				
NSJ 4 S300 中下層	513	土曜器	筒	—	21+	—	—	—	ココナテ、ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、陶器	黄褐色色	
NSJ 4 S146 B14	514	土曜器土器	球	—	125-	16.8)	—	—	ココナテ、底部付回転車切り出し	ナテ	良好	赤色粘土、白磁粘土、赤色粘土、陶器、石、石膏	黄褐色色	反転度元
NSJ 4 S120 B15	515	土曜器	球	116.0)	2.7	113.0)	—	—	ナテ、ココナテ、底部付回転車切り出し	ナテ	良好	赤色粘土(赤)、白色粘土、黒色粘土、陶器、石膏、珪藻土	黄褐色色	反転度元
NSJ 4 S019 上中層一話	516	土曜器土器	大鉢	—	605-	—	—	—	ミガキ、流線、底部ココナテ切り出し	ミガキ	良好	白磁粘土、黒色粘土、赤色粘土、陶器、石膏	白、黄褐色	
NSJ 4 S116 B16	517	土曜器	筒	—	43-	—	—	—	へう切り出しナテ、ナテ	ナテ	良好	白磁粘土、黒色粘土、石膏、赤色粘土、珪藻土、白磁陶器、石膏	黄褐色色	
NSJ 4 S107 B14	518	土曜器土器	球	—	08-	—	—	—	ナテ、底部付回転車切り出し	下層ナテ	良好	白磁粘土、陶器	赤褐色色	
NSJ 4 S790 C-4	519	土曜器	筒	—	38-	—	—	—	ナテ、ココナテ	下層ナテ	良好	石膏、黒石、白磁粘土	(内) 黄褐色色 (外) 黄褐色色	
NSJ 4 S300 中下層	520	土曜器	后倒筒	18.0)	4.4-	—	—	—	ナテ	ナテ	良好	白磁粘土、黒色粘土、陶器、石膏、赤色粘土	黄褐色色	反転度元
NSJ 4 S135 C13	521	土曜器	垂直筒	—	46-	—	—	—	へう切り出しナテ、ナテ、ココナテ	ココナテ	良好	白磁粘土、黒色粘土、赤色粘土、陶器、石膏、石膏	黄褐色色	時刻表
NSJ 4 S121	522	土曜器	筒	—	28-	—	—	—	へう切り出しナテ、ナテ	ナテ	良好	石膏、石膏、白磁粘土、赤色粘土、黒色粘土、陶器、石膏	黄褐色色	時刻表
NSJ 4 S109	523	土曜器	球	—	36-	—	—	—	ナテ	ナテ	良好	粘土、石膏、珪藻土、赤色粘土、赤色粘土	黄白色	
NSJ 4 S154 C13	524	土曜器土器	土鉢	4.7	1.5	—	0.40	8.6	ナテ	—	良好	陶器、石膏、黒石、白磁粘土	赤茶褐色	竹状土鉢
NSJ 4 S004 C10	525	土曜器	球	—	39-	—	—	—	ナテ、ココナテ	ナテ、ココナテ	良好	白色粘土、黒石、石膏、陶器、黒色粘土、赤色粘土	黄褐色色	
NSJ 4 S143 B12	526	土曜器	球	—	25-	—	—	—	ココナテ、底部付回転車切り出し	ナテ	良好	石膏、石膏、白磁粘土、陶器	赤茶褐色	
NSJ 4 S300 B16	527	土曜器土器	球	—	09-	—	—	—	ナテ、底部付回転車切り出し	ココナテ	良好	白色粘土、石膏、赤色粘土	黄褐色色	
NSJ 4 S080	528	土曜器	球	115.2)	4.05	18.2)	—	—	ナテ、底部付回転車切り出し	ナテ	良好	赤色粘土、白磁粘土、黒色粘土、石膏、珪藻土、石膏、珪藻土、陶器	黄褐色色	反転度元
NSJ 4 S080	529	土曜器	球	—	435-	—	—	—	ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、陶器、石膏	黄褐色色	
NSJ 4 S015 C5	530	垂直器	垂直筒	—	50-	—	—	—	ナテ	ナテ	良好	黒色粘土、石膏、黒石、白磁粘土	灰白色	外周に白磁陶器あり
NSJ 4 S700	531	円筒	筒	—	21+	—	—	—	筒輪	筒輪	良好	白磁粘土	白灰色	
NSJ 4 S101	532	土曜器	蓋	0.44)	1.4-	—	—	—	回転車切り出しナテ、ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、白磁粘土、石膏、黒石	黄褐色色	反転度元
NSJ 4 S080	533	土曜器	蓋	—	13-	—	—	—	筒輪へう切り出しミガキ、ナテ、ナテ、ナテ	ナテ、ナテ、ナテ	良好	赤色粘土、白磁粘土	黄褐色色	
NSJ 4 S080	534	土曜器	球	—	41-	—	—	—	ナテ、ナテ、ナテ、ナテ	ナテ、ナテ、ナテ、ナテ	良好	陶器、石膏、黒石、白磁粘土	黄褐色色	コナテ回転車あり
NSJ 4 S060	535	土曜器	球	—	33-	—	—	—	ナテ	ナテ、ココナテ	良好	陶器、石膏、黒石、赤茶褐色	外周に黄褐色あり	
NSJ 4 S080	536	土曜器	筒	—	56-	—	—	—	軌上組み上げ	へう切り出しナテ、ナテ、ココナテ、ナテ	良好	赤色粘土、白磁粘土、赤色粘土、陶器、石膏	黄褐色色	時刻表
NSJ 4 S080	537	垂直器	筒	113.0)	33-	—	—	—	ココナテ	ココナテ	平良	白磁粘土、黒色粘土、赤色粘土、陶器	(内) 白磁灰色 (外) 灰褐色	反転度元
NSJ 4 S080	538	土曜器	筒or 垂直付蓋球	—	1.4-	10.2)	—	—	ナテ、ココナテ	ナテ	良好	白磁粘土、黒色粘土、赤色粘土、陶器、石膏	黄褐色色	反転度元
NSJ 4 S080	539	垂直器	筒	—	13-	—	—	—	へう切り出しナテ	ナテ	良好	白磁粘土、黒色粘土、赤色粘土	灰白色	
NSJ 4 S080	540	土曜器	蓋	—	135-	—	—	—	へう切り出しナテ、ナテ	ナテ、ナテ、ナテ	良好	白磁粘土、黒色粘土、陶器、石膏	黄褐色色	行燈より
NSJ 4 S007	541	土曜器	球	—	295-	—	—	—	円筒	円筒	良好	赤色粘土、白磁粘土、黒色粘土、陶器、石膏	黄褐色色	
NSJ 4 S060	542	土曜器	蓋	112.0)	1.4-	—	—	—	回転車切り出しナテ、ナテ、へう切り出し	ナテ	良好	赤色粘土、陶器、黒石、白磁粘土	黄褐色色	反転度元
NSJ 4 S177	543	土曜器	長筒筒	—	52-	—	—	—	ナテ、ココナテ	ナテ、ナテ、ナテ	良好	石膏、石膏、陶器	黄褐色色	
NSJ 4 S080	544	土曜器	筒	—	13-	—	—	—	ナテ、底部付回転車切り出し	ナテ	良好	白磁粘土、赤色粘土、黒色粘土、石膏	黄褐色色	
NSJ 4 S080	545	土曜器	筒	—	75-	—	—	—	へう切り出しナテ、ナテ、ココナテ	ナテ、ココナテ	良好	白磁粘土、黒色粘土、石膏、陶器、石膏	黄褐色色	
NSJ 4 S055	546	土曜器	球	—	75-	—	—	—	底部付回転車切り出し	ナテ	良好	白磁粘土、黒色粘土、陶器、石膏	黄褐色色	
NSJ 4 S088	547	土曜器	球	—	1.8-	—	—	—	ナテ、流線、ナテ、回転車切り出し	ナテ	良好	白磁粘土、黒色粘土、石膏、陶器、石膏	黄褐色色	
NSJ 4 S058	548	土曜器	蓋	—	95-	—	—	—	へう切り出しナテ、ナテ	ナテ	良好	白磁粘土、黒色粘土、石膏、石膏	黄褐色色	
NSJ 4 S044 B16	549	土曜器	蓋	—	16-	—	—	—	ココナテ、へう切り出し	ココナテ	良好	白磁粘土、黒色粘土、石膏、石膏	黄褐色色	
NSJ 4 S101	550	土曜器	球	—	2.4-	—	—	—	ナテ、ココナテ、ミガキ	ココナテ	良好	赤色粘土、白磁粘土、黒色粘土、陶器、石膏	黄褐色色	

遺構名	R番号	種類	基 形	法量 (cm) は概元					成 形	測 定 及 び 測 繪		材 質	敷 土 (石 材)	色 調	備 考
				工 程 / 積 込 高	底 径 / 積 込 径	底 径 / 積 込 径	孔 径	重 量 (g)		外 形	内 形				
NSJ 43196	551	土師器	瓶 or 杯	—	27*	—	—	—	口ノコ	ナデ, ハウミガキ	ナデ, ハウミガキ	良好	赤色粘土, 白色粘土, 黒色粘土	褐色色	
NSJ 43049 B15	552	土師器	蓋	—	14*	—	—	—	口ノコ	ハウミガキ, ナデ	ナデ	良好	白色粘土, 黒色粘土, 雲母	褐色色	丹波市赤井
NSJ 43156	553	土師器	蓋	—	10*	—	—	—	口ノコ	ナデ, ハウミガキ, 厚減薄しい	ナデ, 厚減薄しい	良好	褐色土, 白色粘土	褐色色	
NSJ 43034	554	土師器	杯	—	22*	—	—	—	口ノコ	ナデ, ナデ後ミガキ	ナデ	良好	褐色土, 白色粘土, 黒色粘土	褐色色	
NSJ 43690	555	土師器	甕	(28.0)	11.0*	—	—	—	口ノコ	ハウミガキ後ナデ, ココナデ, ナデ	ナデ後ミガキナデ, ナデ	良好	赤色粘土, 白色粘土, 黒色粘土, 石炭, 結晶片状, 雲母	(外) 黄褐色 (内) 褐色色	反転覆元
NSJ 43004 C10	556	土師器土器	杯	(9.0)	3.1*	—	—	—	口ノコ	ナデ, ココナデ	ナデ	良好	石炭, 結晶片状, 雲母, 角閃石, 白色粘土	褐色色	反転覆元
NSJ 43004 C10	557	土師器土器	杯	—	2.1*	—	—	—	口ノコ	ココナデ, 底面4角, 糸切り後ナデ	ココナデ	良好	石炭, 雲母, 角閃石, 白色粘土	白褐色色	反転覆元
NSJ 43600 1番	558	前期土器	鉢	—	6.5*	—	—	—	口ノコ	無輪, ココナデ	ココナデ, ナデ	良好	灰石, 石炭, 白色粘土	灰褐色色	車庫前遺跡
NSJ 43784 C15	559	前期器	壺	—	2.4*	(11.2)	—	—	口ノコ	ナデ後ミガキ, ナデ, 洗脱	ココナデ, ナデ	良好	赤色粘土, 白色粘土, 黒色粘土	白灰色	反転覆元
NSJ 43515 C14	560	前期器	碗	—	2.5*	(8.0)	—	—	口ノコ	ココナデ, ナデ	ナデ	良好	赤土	灰色	
NSJ 43268 C6	561	土師器	皿 or 甕	(22.4)	2.5*	—	—	—	口ノコ	ナデ	ナデ	良好	白色粘土, 赤色粘土, 角閃石, 灰石	(外) 褐色色 (内) 黒色	特設古代 or 中世, 反転覆元
NSJ 43755	562	土師器	杯	—	1.3*	(5.0)	—	—	口ノコ	ナデ, 底面4角, ハウミガキ	ナデ	良好	白色粘土, 赤色粘土, 結晶片状, 雲母	褐色色	反転覆元
NSJ 43087 A14	563	土師器	甕	—	6.0*	—	—	—	口ノコ	ナデ	ナデ	良好	白色粘土, 赤色粘土, 赤色粘土, 石炭, 結晶片状, 雲母, 角閃石, 金雲母	褐色色	
NSJ 43677 C15	564	土師器土器	杯	(9.2)	1.9*	—	—	—	口ノコ	ナデ, ココナデ, 底面4角, 糸切り後ナデ	ココナデ	良好	石炭, 白色粘土, 角閃石	褐色色	反転覆元
NSJ 43035 C16	565	土師器	蓋	—	1.2*	—	—	—	口ノコ	厚輪, ハウミガキ, ココナデ後ミガキ	ナデ	良好	角閃石, 灰石, 石炭	褐色色	
NSJ 43034 C16	566	土師器	杯	—	1.4*	—	—	—	口ノコ	ナデ, ココナデ	ココナデ	良好	褐色土, 白色粘土	褐色色	
NSJ 43004 P5	567	土師器土器	杯	—	4.0*	—	—	—	口ノコ	ナデ	ナデ	良好	石炭, 灰石, 赤色粘土, 赤色粘土	黄褐色色	
NSJ 43121 B11	568	前期器	壺	—	4.0*	—	—	—	口ノコ	工具ナデ	ココナデ	良好	白色粘土, 赤色粘土, 雲母	灰色	一宮自然坑, 反転覆元
NSJ 43663 C6	569	土師器土器	杯	(13.0)	2.9	(8.0)	—	—	口ノコ	ナデ, ココナデ, 底面4角, 糸切り後ナデ	ココナデ	良好	石炭, 雲母, 赤色粘土, 角閃石, 白色粘土, 灰石	黄褐色色	反転覆元
NSJ 43000 E6	570	土師器	杯	—	2.8*	—	—	—	口ノコ	ココナデ	ハウミガキ後ナデ, ココナデ	良好	赤色粘土, 白色粘土	灰褐色色	
NSJ 43192 A13	571	土師器	蓋	—	2.0*	—	—	—	口ノコ	ナデ	ナデ	良好	白色粘土, 赤色粘土, 石炭, 角閃石, 結晶片状, 赤色粘土, 雲母	褐色色	反転覆元
NSJ 43677 C15	572	土師器土器	杯	(11.8)	2.3	(8.1)	—	—	口ノコ	ナデ, 底面4角, 糸切り後ナデ	ナデ	良好	赤色粘土, 赤色粘土, 石炭, 雲母, 白色粘土	浅褐色色	反転覆元
NSJ 43573 B7	573	土師器土器	杯	—	2.0*	(3.0)	—	—	口ノコ	ナデ, 底面4角, 糸切り後ナデ	ココナデ	良好	石炭, 角閃石, 赤色粘土	褐色色	反転覆元
NSJ 43430 C15	574	青花	瓶	—	3.7*	—	—	—	口ノコ	無輪	無輪	良好	赤土	(全体) 白色 (輪色) 透明 (模様) 灰色	碧穂銅器系
NSJ 43500 E6	575	土師器	碗	—	1.8*	—	—	—	口ノコ	ナデ, ココナデ	ナデ	良好	白色粘土, 赤色粘土, 赤色粘土, 石炭, 雲母, 角閃石, 赤雲母	褐色色	
NSJ 43120 B15	576	前期器	甕	—	8.2*	—	—	—	口ノコ	タタキ後ナデ	同心円上オサエ, ナデ	良好	角閃石, 石炭, 灰石, 白色粘土, 赤色粘土	灰色	
NSJ 43100 中1番	577	土師器	甕	—	4.2*	—	—	—	口ノコ	ナデ後コビオサエ	ナデ後コビオサエ	良好	赤色粘土, 白色粘土, 赤色粘土, 石炭, 結晶片状, 雲母, 金雲母	黄褐色色	
NSJ 43543 A12	578	土師器	碗	—	2.1*	—	—	—	口ノコ	ナデ, ハウミガキ後ナデ	ナデ	良好	石炭, 黒色粘土	褐色色	
NSJ 43500 E6	579	前期器	瓶	—	1.6*	—	—	—	口ノコ	ココナデ	ココナデ	良好	白色粘土, 灰石, 石炭	黄褐色色	
NSJ 43004 C10	580	土師器	甕	—	2.7*	—	—	—	口ノコ	ハウミガキ後ナデ, ココナデ	ナデ後ハシ	良好	角閃石, 雲母, 石炭, 灰石, 赤色粘土, 白色粘土	赤灰色	
NSJ 43004 C10	581	土師器土器	杯	—	2.6*	(7.0)	—	—	口ノコ	ナデ, ココナデ, 底面4角, 糸切り後ナデ	丁家コナデ	良好	赤色粘土, 石炭, 灰石, 白色粘土	浅褐色色	反転覆元
NSJ 43000 C16	582	土師器	杯	—	2.4*	—	—	—	口ノコ	ナデ, ココナデ	ナデ, ココナデ	良好	赤色粘土, 角閃石, 白色粘土	褐色色	
NSJ 43004 C10	583	土師器土器	杯	(10.4)	2.6	(3.5)	—	—	口ノコ	ナデ, 底面4角, 糸切り後ナデ	ナデ	良好	赤色粘土, 石炭, 灰石, 赤色粘土, 赤色粘土	浅褐色色	反転覆元
NSJ 43006 B8	584	土師器	甕	—	3.3*	—	—	—	口ノコ	ナデ	ナデ	良好	白色粘土, 赤色粘土, 石炭, 結晶片状, 雲母, 石炭, 角閃石, 雲母, 金雲母	(外) 黄褐色色 (内) 赤褐色色	特設古墳時代, 内側に丹波砂
NSJ 43002	585	前期器	甕	(10.9)	7.8	(3.2)	—	—	口ノコ	無輪, 無輪	無輪	良好	赤土	(全体) 黄白色 (輪色) 透明	特設遺跡, 反転覆元
NSJ 43004 P5	586	土師器土器	杯	(11.0)	3.0	(3.4)	—	—	口ノコ	ナデ, 底面4角, 糸切り後ナデ	ナデ	良好	赤色粘土, 白色粘土, 赤色粘土, 角閃石, 雲母, 石炭	褐色色	底面にオサエあり, 反転覆元
NSJ 43786 C15	587	前期器	蓋	—	1.4*	—	—	—	口ノコ	ナデ, 工具ナデ	ナデ	良好	白色粘土, 赤色粘土, 赤色粘土, 雲母	褐色色	

選種名	登録号	種別	群種	経路 (cm) 以上元				成別	調整及び品種		感成	動土 (石材)	色調	備考
				口径 / 最大径	経路 / 最大径	底径 / 最大径	径差		重量 (kg)	外面				
NS J 4 S000 1-500	588	土師瓦	土師	—	2.5	—	—	—	コナテ、底面中継糸切のヘラテ	ナテ、ナテ後スコナテ	良好	密着、赤色粘土、白色粘土	茶褐色	
NS J 4 S003 B-8	589	土師瓦	蓋	—	2.1+	—	—	—	目録へラテナテ、ナテ	丁寧ナテ	良好	石、炭石、角閃石、密着、赤色粘土、白色粘土	褐色色	
NS J 4 S004 C-16	590	土師瓦	平	—	1.1+	—	—	—	ナテ後ミナテ	目録へラテナテ	良好	白色粘土、黒色粘土、石、炭石	褐色色	
NS J 4 S005 P-1	591	土師瓦	土師	—	5.0+	—	—	—	—	—	—	—	—	肌滑り全周に及ぶ。
NS J 4 S004 P-2	592	青磁	瓦	12.9	5.4+	—	—	—	コナテ文あり、無釉	無釉	良好	（全体）灰色（釉色）緑褐色	藍染茶色	
NS J 4 S120	593	土師瓦	瓦	122.8	2.4	19.7	—	—	ナテ、ココナテ、底面中継へラテ切の後ナテ	ココナテ	良好	白石、石、炭石、角閃石、陶石	褐色色	反転産元
NS J 4 S100 葉込	594	土師瓦	高平	—	5.7+	—	—	—	ナテ、底面糸切の後ナテ	ココナテ	良好	石、炭石、角閃石、陶石、赤土	淡黄褐色	
NS J 4 S110	595	土師瓦	土師	—	1.9+	—	—	—	ナテ	ココナテ	良好	角閃石、黒色粘土、石、炭石	淡黄褐色	
NS J 4 S714	596	土師瓦	平	—	4.0+	—	—	—	ナテ、ココナテ	ココナテ	良好	白色粘土、赤色粘土、黒色粘土、結晶片、角閃石、赤土	褐色色	
NS J 4 S120	597	土師瓦	蓋	—	2.75+	—	—	—	ココナテ	へラ切の後ナテ、へラ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石、炭石、角閃石、赤土	茶褐色	
NS J 4 S100	598	土師瓦	小型蓋	—	4.4+	—	—	—	ナテ、ミヤギ	ナテ、スコナテ	良好	白色粘土、黒色粘土、結晶片、角閃石、赤土	（内）黄褐色（外）淡茶褐色	
NS J 4 S749	599	土師瓦	蓋	—	1.15+	—	—	—	目録へラテナテ	丁寧ナテ	良好	黒色粘土、角閃石、石、赤土	白褐色	
NS J 4 S109 B-4	600	土師瓦	蓋	—	2.0+	—	—	—	ココナテ、ナテ	ココナテ	良好	角閃石、黒色粘土、赤土、結晶片	茶褐色	
NS J 4 S714	601	土師瓦	鉢	—	3.4+	—	—	—	粘土積み上げ	ナテ、スコナテ	良	白色粘土、黒色粘土、石、炭石、角閃石、赤土	（内）茶褐色（外）褐色色	時期不定、古く代
NS J 4 S121	602	瓦葺	板	—	2.5+	—	—	—	ナテ	ナテ	良好	白色粘土、黒色粘土	白褐色	
NS J 4 S715	603	土師瓦	平	—	1.2+	16.4	—	—	底面中継へラテ切の後ナテ、ナテ	ナテ	良好	白色粘土、赤色粘土、黒色粘土、結晶片、角閃石、赤土	褐色色	反転産元
NS J 4 S713	604	土師瓦	平	—	1.2+	16.7	—	—	ナテ、底面糸切の後ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、白色粘土、黒色粘土、角閃石、赤土	褐色色	反転産元
NS J 4 S715	605	土師瓦	平	—	1.9+	—	—	—	丁寧方向ナテ、目録へラテナテ	ココナテ	良好	赤色粘土、炭石、石、炭石、黒色粘土、角閃石、赤土	黄褐色	
NS J 4 S715	606	土師瓦	平	—	1.8+	—	—	—	ナテ、底面糸切の後ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、黒色粘土、石、炭石	（内）茶褐色（外）黄褐色	
NS J 4 S122	607	土師瓦	平	—	1.65+	—	—	—	ナテ、目録へラテ切の後ナテ	ナテ	良好	白色粘土、黒色粘土、角閃石、赤土	褐色色	
NS J 4 S153	608	土師瓦	土師	—	2.0+	—	—	—	ナテ	ナテ	良好	白色粘土、黒色粘土	茶褐色	
NS J 4 S707	609	土師瓦	平	—	1.6+	—	—	—	ナテ	鉄釘埋め文	良好	白色粘土、黒色粘土、赤土	褐色色	
NS J 4 S001 D	610	空持楕圓蓋		10.80	7.4	14.9	—	—	無釉、無釉	無釉	良好	密着	（全体）白褐色（釉色）白、黄褐色	時期不定、一部反転産元
NS J 4 S004	611	土師瓦	土師	—	1.3+	—	—	—	ココナテ、底面糸切の後ナテ	ココナテ	良好	赤色粘土、炭石、石、炭石、黒色粘土、結晶片、赤土	黄褐色	
NS J 4 S1 1-500	612	吹物楕圓蓋	黄	10.90	7.0	15.0	—	—	底面中継糸、無釉	底面中継糸	良好	密着	（全体）赤褐色（釉色）透明（釉色）白	時期不定、反転産元
NS J 4 S206 A-12	613	土師瓦	平	—	1.6+	—	—	—	ナテ、底面中継へラテ切の後ナテ	ナテ後目録へラテナテ	良好	角閃石、雲母、白色粘土	（内）黄褐色（外）茶褐色	
NS J 4 S113	614	土師瓦	平	—	1.6+	—	—	—	目録へラテナテ、目録糸切の後ナテ	縦方向ミナテ	良好	密着、白色粘土、角閃石、黒色粘土	茶褐色	
NS J 4 S1 1-500	615	瓦葺	蓋	—	3.8+	—	—	—	ココナテ、へラテナテ	ココナテ	良好	角閃石、雲母、白色粘土、黒色粘土	（内）黄褐色（外）白褐色	
NS J 4 S128	616	土師瓦	平	—	1.8+	—	—	—	ナテ、目録へラテ切の後ナテ	丁寧	良好	角閃石、白色粘土、赤土	（内）赤茶褐色（外）茶褐色	
NS J 4 S206 A-13	617	土師瓦	蓋	—	3.2+	—	—	—	摩滅深いへラテナテ	摩滅深い	良好	石、炭石、角閃石、結晶片、黒色粘土	明褐色	
NS J 4 S241 B-12	618	土師瓦	平	—	3.3+	—	—	—	ナテ、目録へラテ切の後ナテ	ナテ	良好	赤色粘土、石、炭石、黒色粘土、白色粘土	黄褐色	
NS J 4 S045 B-15	619	土師瓦	平	13.60	3.3	7.1	—	—	ナテ、底面中継へラテ切の後ナテ	ナテ	良好	角閃石、石、炭石、白色粘土、黒色粘土	明褐色	反転産元
NS J 4 S206 A-13	620	土師瓦	平	—	4.4+	—	—	—	ナテ	ナテ	良好	石、炭石、雲母、黒色粘土	黄褐色	
NS J 4 S001 A-14	621	瓦葺	平	—	1.7+	16.8	—	—	丁寧ココナテ、底面中継へラテナテ	ナテ、ココナテ	良好	炭石、石、炭石、黒色粘土	黄褐色	反転産元
NS J 4 S1 1-500	622	肥後系青磁	黄	—	4.5+	14.7	—	—	白磁釉、無釉	無釉	良好	密着	（全体）白褐色（釉色）黄褐色	時期不定、反転産元
NS J 4 S1 1-500	623	青伊勢陶器	黄	—	1.8+	4.4	—	—	白磁釉、糸切り、ナテ、無釉	白磁釉（砂目）、白磁釉	良好	密着	（全体）白褐色（釉色）白	時期不定、反転産元
NS J 4 S1 1-500	624	青磁	楕圓	—	2.6+	—	—	—	ココナテ、底面中継糸切の後ナテ	丁寧	良好	赤色粘土、黒色粘土、石、炭石	赤褐色	時期不定
NS J 4 S001	625	青磁	楕圓	—	4.9+	—	—	—	ココナテ	丁寧	良好	白色粘土、黒色粘土、結晶片	赤褐色	時期不定